

仙台市文化財調査報告書第115集

下ノ内浦遺跡

—みやぎ生活協同組合店舗建設に伴う
発掘調査報告書—

1988年3月

仙台市教育委員会
みやぎ生活協同組合

仙台市文化財調査報告書第115集

下ノ内浦遺跡

—みやぎ生活協同組合店舗建設に伴う
発掘調査報告書—

1988年3月

仙台市教育委員会
みやぎ生活協同組合

序 文

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しまして多大のご協力をいただき、担当する仙台市教育委員会にとりましては、誠に感謝にたえません。

富沢地区および笊川の流域は、区画整理の完了や昨年7月の高速鉄道（地下鉄）の開通により、急速に開発、市街化が進んでおり、仙台市南部の副都心として生まれ変わろうとしております。こうした動きのなかで、開発に伴う発掘調査が頻繁に行われ、さまざまな先人文化が解明されてきております。その反面、遺跡の保存に関する諸々の問題が露呈していることも事実であり、文化財保護の課題となっていることも否めないところであります。

さて、この度発掘調査いたしました下ノ内浦遺跡は、その周辺も含めてこれまでにも縄文時代以来の先人の生活の痕跡が、重層的に残されてきた地域であります。今回の調査におきましても、縄文時代から近世にいたる生活の痕跡が発見され、笊川流域における人間の営みの歴史を解明するための一助となる成果が得られました。こうした文化遺産を後世に継承し活用していくことは、新時代を迎えようとしている仙台市の「まちづくり」に欠かせない大切なことであります。今後とも市民の皆様のご支援とご協力をお願い申し上げまして、刊行のご挨拶いたします。

最後になりましたが、調査と整理に参加された皆様と、本書の作成にあたりご助言、ご指導くださいました各位に心から感謝いたします。

昭和63年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本書は、みやぎ生活協同組合の店舗建設に伴う下ノ浦遺跡の第3次発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集には渡部 紀があたり、小川淳一が補佐した。
3. 植物遺体の同定を星川清親氏・庄司耕男氏（東北大学農学部作物学教室）、人骨の鑑定を高橋 理氏（東北大学考古学研究室）、石器の石材鑑定を佐々木 隆氏（仙台市科学館）に依頼した。
4. 本書の第1図の地形図は、国土地理院発行5万分の1「仙台」を使用した。
5. 本書に収録した記録・遺物は仙台市教育委員会が保管している。
6. 発掘調査および報告書作成にあたり、次の方々の助言を得た。

豊島正幸（東北大学理学部地理学教室） 渡藤吉弘 阿部 恵 相原淳一 古川一明（宮城県文化財保護課） 藤沼邦彦（東北歴史資料館） 丹羽 茂（多賀城跡調査研究所） 次山 淳（京都大学文学部） 高橋勝也

凡　　例

1. 方位は真北を示す。磁北は真北から7°20'西偏する。
2. 基本層位はL I・II・III……、遺構内堆積土は①・2・3……と略称する。
3. 土色の記載にあたっては、「新版標準上色帳」（小山・竹原 1973）を使用した。
4. 遺構の焼け面・土師器の黒色処理・漆石器の磨面・石器の焼けはじけはスクリーン・トーンで示した。
5. 土層断面図の数値は標高を示す。
6. 遺物登録にあたっては以下の記号を使用した。

A. 繩文土器	B. 弥生土器	C. 土師器（非クロクロ）	D. 土師器（クロクロ）
E. 須恵器	F. 平瓦	I. 陶器	J. 磁器
K. 石器・石製品	P. 土製品		

本文目次

I章 調査の概要	1	4. 平安時代以降の遺構と遺物	31
1. 調査に至る経過	1	5. 奈良時代の遺構と遺物	33
2. 調査要項	1	6. 縄文時代の遺構と遺物	38
3. 遺跡の位置と自然的環境	1	7. 時期不明の遺構と遺物	46
4. 歴史的環境	2	8. 各層の出土遺物	51
5. 前回の調査	5	下ノ内浦遺跡より出土の植物種子の 鑑定報告	85
6. 調査の方法と経過	6		
II章 調査の成果	8	III章 考察	86
1. 基本層序	8	1. 奈良時代の遺構と遺物	86
2. 河川跡とその出土遺物	11	2. 縄文早期の遺構と遺物	87
3. 中世以降の遺構と遺物	27	まとめ	92

図表目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第18図 藏骨器出土状況	32
第2図 区画整理前の地形図	4	第19図 藏骨器	32
第3図 調査区の位置とグリッド配置図	7	第20図 2号溝跡	33
第4図 基本層序	9	第21図 1号住居跡	35
第5図 1号河川跡平面図	12	第22図 1号住居跡出土遺物	36
第6図 1号河川跡堆積土	13	第23図 XII・XIII層上面検出遺構配置図	39
第7図 1号河川跡出土遺物(1)	17	第24図 12・13・14・15号土坑	42
第8図 1号河川跡出土遺物(2)	18	第25図 16・17・18・19号土坑	43
第9図 1号河川跡出土遺物(3)	19	第26図 20・21・22号土坑	44
第10図 1号河川跡出土遺物(4)	20	第27図 伽層上面縦平面分布図	45
第11図 1号河川跡出土遺物(5)	21	第28図 B4グリッド集石	45
第12図 2号河川跡出土遺物	22	第29図 1・3~11号土坑	46
第13図 III層上面検出遺構配置図	25	第30図 1・3・5号溝跡	48
第14図 V層上面検出遺構配置図	26	第31図 6号溝跡	49
第15図 2号建物跡P ₁₇ 出土遺物	28	第32図 溝跡出土遺物	50
第16図 挖立柱建物跡平面図	29	第33図 1次調査IV層出土須恵器	51
第17図 2号土坑	31	第34図 III・IV・V層出土遺物	53

第35図 VI層出土土器(1).....	54	第53図 XII層出土剥片石器(5).....	72
第36図 VI層出土土器(2).....	55	第54図 XII層出土剥片石器(6).....	73
第37図 VI層出土土器(3).....	56	第55図 XII層出土剥片石器(7).....	74
第38図 VI層出土土製品.....	57	第56図 XIII層出土剥片石器(1).....	75
第39図 VI・VII層出土土石器.....	57	第57図 XIII層出土剥片石器(2).....	76
第40図 VII層出土礫石器.....	58	第58図 XIII層出土剥片石器(3).....	77
第41図 VIII層出土土器.....	59	第59図 XIII層出土剥片石器(4)・石核(1).....	78
第42図 XII層出土土器(1).....	61	第60図 石核(2).....	79
第43図 XII層出土土器(2).....	62	第61図 石核(3).....	80
第44図 XII層出土土器(3).....	63	第62図 磕石器(1).....	82
第45図 XII層出土土器(1).....	64	第63図 磕石器(2).....	82
第46図 XIII層出土土器(2).....	65	第64図 石器のグリッド別出土状況.....	83
第47図 土器平面分布図.....	65	第65図 土偶.....	84
第48図 石器の計測方法.....	66	第66図 石鎌長幅関係図.....	88
第49図 XII層出土剥片石器(1).....	68	第67図 他遺跡との比較.....	88
第50図 XII層出土剥片石器(2).....	69	第68図 土坑群の長軸・短軸・深さの 関係.....	90
第51図 XII層出土剥片石器(3).....	70	第69図 土坑群の分類.....	90
第52図 XII層出土剥片石器(4).....	71		

挿 表 目 次

第1表 遺跡地名表.....	3	第8表 土坑計測表.....	44
第2表 1号河川跡土師器・須恵器 破片集計表.....	23	第9表 XIII層上面縦集計表.....	45
第3表 1号河川跡繩文土器 破片集計表.....	24	第10表 3~11号土坑計測表.....	47
第4表 2号河川跡繩文土器 破片集計表.....	24	第11表 5・6号溝跡出土遺物 破片集計表.....	50
第5表 柱穴計測表.....	30	第12表 III層出土土器破片集計表.....	59
第6表 住居跡出土遺物破片集計表.....	37	第13表 VI層出土土器破片集計表.....	59
第7表 柱穴出土遺物.....	38	第14表 石器組成表(1).....	88
		第15表 石器組成表(2).....	89
		第16表 剥片・チップにおける受熱資料.....	89

I 章 調査の概要

1. 調査に至る経過

昭和57年12月9日、みやぎ生活協同組合より仙台市教育委員会に店舗建設とともに発掘通知が出された。場所は下ノ内浦遺跡地内であり、昭和57年に仙台市教育委員会の調査した地点の南にあたる。協議の結果、記録保存のための発掘調査を昭和62年4月より行なうこととした。

2. 調査要項

遺跡名 下ノ内浦遺跡 (C-300)

所在地 仙台市長町南4丁目32

調査面積 1000m²

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課調査係

担当職員 小川淳一 渡部紀

調査期間 野外調査 昭和62年4月18日～10月2日

整理作業 昭和62年12月14日～昭和63年3月26日

調査参加者 菅井君子 斎藤とき子 森節子 竹森永源 清水昭子 小林英子 浅野とく子
 川地モトヨ 井上福子 今福三良子 相原明 八津尾勝正 板橋実 伊藤秀男
 森常治 阿部高子 阿部ミノル 佐藤よし江 嵐岸光子 阿部幸夫 菊地旭
 武田萬 村井二郎松 菅井妙子 鈴木よしあ 板橋みつよ 小野ヒサコ
 大沼勇 渡辺節子 阿部あき子 加藤けい子 佐藤静子 佐藤久恵 鈴木和佳子
 森谷いずみ 佐野弘 山内昌弘 須藤一 岩渕信博 吾妻俊典 高木晃

整理参加者 吾妻俊典 森忠一 二瓶憲生 松崎博 坂本康裕 佐々木晃子 桜井美枝 佐藤知里

3. 遺跡の位置と自然的環境

(1) 遺跡の位置

下ノ内浦遺跡は、国鉄長町駅の南西約1.5km、地下鉄富沢駅の北東約500mの地点に位置している。従来、畑・水田であったが、昭和48年以降の土地区画整理の際に盛土され整地された。周辺は畑・水田が若干残るものの大半は住宅地となっている。

(2) 自然的環境

仙台市域の地形は北部から西部にかけての丘陵と東部の海岸平野とに大別される。丘陵部か

ら海にむかひ、七北田・広瀬・名取の河川が東流している。中でも、広瀬川と名取川にはさまれた地域は郡山低地と呼ばれ、その中央部を太白山に起源をもつ荒川が曲流している。郡山低地の基盤は広瀬・名取川の供給した疊層であるが、その後の堆積状況は場所により異なっている。両河川から遠い富沢付近では泥炭層の発達がみられているが、河川に近づくと砂・シルトが主体となる堆積状況である。下ノ内浦遺跡の立地している地形は、荒川の自然堤防上にあたり、その堆積物は名取川・荒川の洪水堆積物である砂・シルトを主体としている。現標高は11~12mである。

参考：豊島正一（1987）「富沢遺跡周辺の地形と土地条件の変遷」仙台市文化財調査報告書第98集『富沢』

P.4~8

4. 歴史的環境

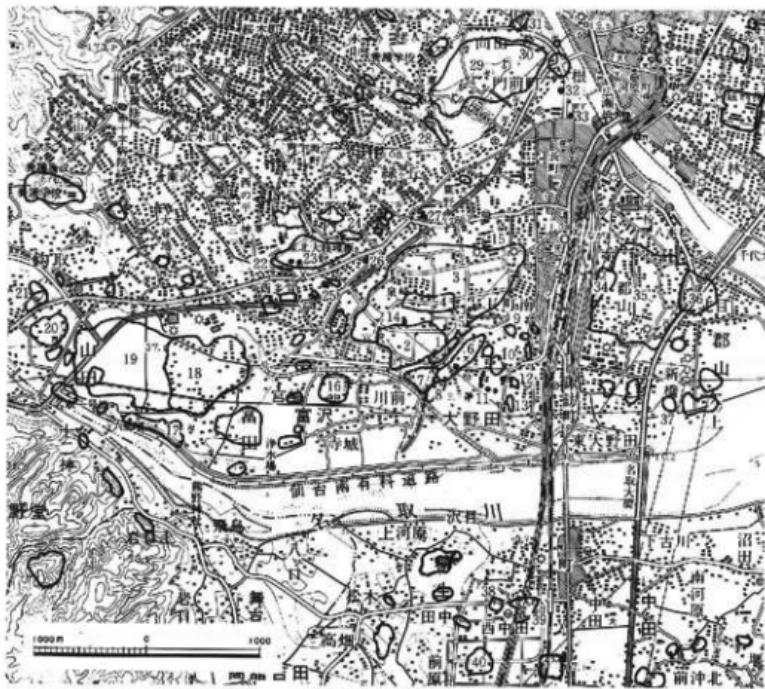
当遺跡周辺には数多くの遺跡があり、それぞれからは各時代の遺構・遺物が重層的に発見されている。当遺跡を中心とする地域の歴史を概観してみる。

生活のはじまり

仙台市内で最も古い人間生活の痕跡は、丘陵部に近い段丘上の山田上ノ台(3)・北前遺跡(2)から発見された旧石器であり、3万年以前の前期旧石器時代にさかのばる。当遺跡周辺では下ノ内浦遺跡(昭和58年度)で縄文時代早期の、日計式押型文の時期の陥し穴と竪穴遺構が見つかっており、最も古い人間活動の痕跡である。早期後葉は、山口遺跡(2)で土器が出土している。前期には丘陵の三神峯遺跡(4)が前期初頭の集落跡と考えられるものの、沖積地では遺構は検出されていない。下ノ内浦遺跡(昭和58年度)で大木5b式の土器片が出土している。中期初頭には上野遺跡(3)に集落が営まれ、続いて大木8b式期に六反田遺跡(6)に住居がつくられる。以後、後期中葉宝ヶ峯式期まで、六反田・下ノ内(7)・下ノ内浦・山口・伊古田(8)遺跡といった、荒川の自然堤防上に立地する遺跡で多量の遺構・遺物が残されている。しかし、その後は、遺物の量も減り、遺構も発見されなくなる。

稻作の導入

当遺跡周辺に稻作が導入された時期については不明であるが、横形圓式期以前にさかのばることが富沢遺跡(3)の調査成果により明らかにされている。また、富沢遺跡では弥生時代以降現代に至るまで水田が作られ続けてきたことが確かめられている。だが、弥生時代に稻作を行なった人々の日常生活の痕跡は少ない。下ノ内浦遺跡(昭和57年度)での十三塙式期あるいは天王山式期の墓壙の発見や、下ノ内・六反田・山口遺跡での土器の出土があげられる程度である。古墳時代には、六反田・下ノ内・伊古田・泉崎浦(4)遺跡に住居跡がみとめられる。また、当遺跡の南東部の六反田遺跡を含めた地域には大野田古墳群(1)があり、今まで9基の円墳が確認さ



第1図 遺跡の位置と周辺の道跡

第1表 遺跡地名表

番号	道跡名	立地	時代	番号	道跡名	立地	時代
1	下ノ内溝道跡	自然堤防	繩文・平安	21	北前道跡	段丘	昭和(?)～明治(?)
2	山口道跡	自然堤防・後背湿地	縄文(?)・古墳・平安	22	富沢金谷跡	丘陵斜面	古墳・奈良・平安
3	室沢道跡	後背湿地	縄文～古墳	23	三津井道跡	段丘	繩文(草・龍)
4	室沢消古道跡	自然堤防・後背湿地	縄文・古墳・平安・奈良	24	土手内宮跡	丘陵斜面	古墳末～奈良
5	鷲森消古道跡	自然堤防	古墳・平安	25	高木町古墳	段丘	古墳
6	六反田道跡	自然堤防	縄文(?)・古墳・平安	26	金沢段丘塚	段丘	古墳
7	下ノ内道跡	自然堤防	縄文(中・後)・奈良・平安	27	下ノ内古塚	後背湿地	古墳
8	伊吉田道跡	自然堤防	古墳・奈良・平安	28	ニツ沢横穴群	丘陵	古墳
9	元樂豆道跡	自然堤防	奈良・平安	29	茂ヶ原篠塚	丘陵斜面及び斜面	南北朝～室町
10	大野田道跡	自然堤防・後背湿地	縄文(後期)・奈良	30	大年寺横穴群	丘陵斜面	古墳末～奈良
11	大野田古墳群	自然堤防	古墳	31	愛宕山横穴群	丘陵斜面	古墳末～奈良
12	北北敷道跡	自然堤防・後背湿地	奈良・平安	32	鬼子母古塚	自然堤防	古墳
13	長町酒水道跡	自然堤防	古墳？	33	小鬼母古塚	自然堤防	古墳
14	敷無古塚	後背湿地	古墳	34	西谷群古塚	自然堤防	奈良・古墳
15	金剛八瀬古塚	後背湿地	古墳	35	郡山道跡	自然堤防・後背湿地	古墳・奈良
16	富民馬塚	自然堤防・後背湿地	古墳	36	北ノ内城跡	自然堤防	奈良・江戸
17	御前道跡	段丘	縄文・弥生・奈良・平安	37	久ノ上ノ道跡	自然堤防・後背湿地	古墳・奈良・平安
18	上野道跡	段丘	縄文(中)・奈良・平安	38	安久道跡	自然堤防	弥生～中世
19	山田糸田道跡	段丘	奈良・平安	39	安久里道跡	自然堤防	弥生～中世
20	山田上ノ道跡	段丘	縄文(中)・奈良・平安	40	鬼子母古塚	自然堤防	古墳



第2図 区画整理前の地形図（トーン部が調査区）

れている。さらに山口遺跡北方に教塚古墳¹⁰、富沢遺跡北方に金岡八幡古墳¹¹が存在し、さらに沖積地との境界に沿った丘陵上に一塚・二塚¹²・金洗沢古墳¹³等、数基の古墳が点在する。大年山周辺の斜面には横穴墓（28・30・31）が群をなしている。

政治的転機

当地域における画期的なできごととして郡山遺跡¹⁴の成立がある。これは、7世紀後半から8世紀初めにかけての官衙跡であり、中央政権の体制に当地域が組み込まれたことを示すものである。民衆の生活にも変化が生じたものと考えられる。奈良・平安時代には遺跡数も多くなり、下ノ内・下ノ内浦・伊古田・山口・六反田遺跡においては住居跡が見つかっており、山口遺跡では居住域と水田がセットで見つかっている。また、富沢遺跡の平安時代の水田跡では、真北方向の大畔がみとめられ、一定の企画性を読み取れる。中世以降は遺跡の調査例が少なく不明な点が多い。富沢館跡¹⁵、茂ヶ崎城跡¹⁶、北目城跡¹⁷等の遺跡があるが詳細は不明である。富沢遺跡では水田跡の他に中世の屋敷跡や溝跡が発見されている。近世にはいると当遺跡は富沢村に含まれる。

以上のように見てくると、稻作の導入以降、富沢遺跡では水田がつくられ、本遺跡を含む荒川の自然堤防上には集落が営まれるという土地利用が近年まで続けられてきたといえよう。このような景観が変化したのは昭和48年以降の土地区画整理による宅地化の開始であり、今後は仙台市の副都心として都市化が進んでいくと考えられる。

5. 前回の調査

下ノ内浦遺跡ではこれまで二度にわたる調査が行なわれている。（第3図）

1次調査 みやぎ生活協同組合の倉庫建設に先立ち、昭和57年7月から9月にかけて調査が行なわれた。I区からは平安時代以降の土坑・ピット、平安時代以前の河川跡が検出され、土師器・須恵器・中世陶器・青磁が出土している。II区からは、奈良時代の住居跡・溝跡・掘立柱建物跡、平安時代以降の溝跡・掘立柱建物跡・土坑、時期不明の溝跡・土坑・竪穴造構・ピット・河川跡が検出されている。出土遺物には、石器・繩文土器・弥生土器・土師器（塩釜式・国分寺下層式・表杉ノ入式）・須恵器・赤焼土器・土鍤がある。II区は今回の調査区の北側に位置するが、基準杭の位置を確認できず、正確につなげることができなかった。今回の調査では、II区に連続すると考えられる遺構も確認されている。

2次調査 高速鉄道南北線の建設に先立ち、昭和58年4月～12月、昭和59年4月～12月の2年にわたる調査が行なわれた。検出された遺構は、平安時代の水田跡・住居跡・掘立柱建物跡・柱列・溝跡・小溝状造構群、平安～弥生時代の小溝状造構群・ピット、奈良時代の住居跡・弥生時代の竪穴造構・土坑・墓壙（石包丁副葬）・溝跡・ピット、繩文時代後期（南境式）の配石

墓、繩文時代早期（日計式）の陥し穴、奈良時代以降の河川跡がある。遺物には、石器・繩文土器（日計式・大木5b式・南境式）・弥生土器（十三塚式・天王山式）・土師器（国分寺下層式・表杉ノ入式）・須恵器・炭化米等がある。

註 1次調査：仙台市文化財調査報告書第59集『下ノ内浦遺跡』（1983）

2次調査：仙台市文化財調査報告書第69集『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III』（1984）

仙台市文化財調査報告書第82集『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報IV』（1985）

仙台市文化財調査報告書第89集『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報V』（1986）

6. 調査の方法と経過

調査区は店舗設計図に合わせ、東西40m・南北25mの広さに設置した。北側隣地との境界杭を基準とし、南に18mの地点をグリッド基準点とし、3m方眼のグリッドを設定した。また、グリッド基準点を0とし東にE 1・2……、南にS 1・2……と水系番号をつけた。ベンチマークは千刈田公園内にある測量水準点№76、12.0212m（仙台市環境公害部設置）から移動した。遺構の掘り込みにあたっては二分法・四分法を用い掘り下げた。図化にあたっては原則として1/20で実測し、一部1/40・1/100で実測した。写真は35mm・6×7版白黒・カラーリバーサルで撮影した。

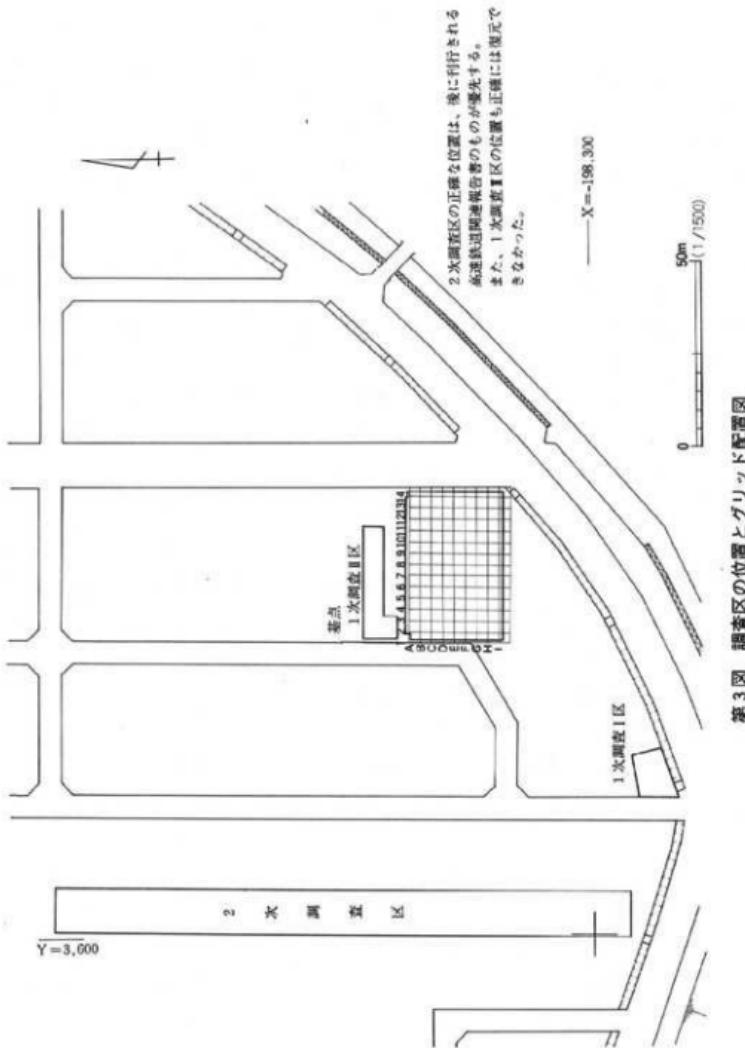
調査には4月18日より入ったが、盛土とアスファルト舗装があったため重機を用いてそれらを除去した。4月27日より作業員を導入し遺構の確認・掘り込みを行なった。1号河川跡とL VIII～L XIの除去にあたっては土量が多いため重機を用いたが、それ以外の層は人力で掘り下げた。調査の間、6月25日に大野田小学校6年生3クラスの見学会、7月15日に同校歴史地理クラブの発掘体験学習を行なった。

調査区は国土座標に位置づけるため測量を行なった結果は以下の通りである。

平面直角座標系X

N O S	X = -198251.63	E 3 - S 12	X = -198263.65
	Y = +3677.80		Y = +3680.63
E 9 - S 9	X = -198260.70	E 15 - S 9	X = -198260.85
	Y = +3686.65		Y = +3692.70

調査区のグリッド南北軸は、国土座標X軸から約1度東偏する。



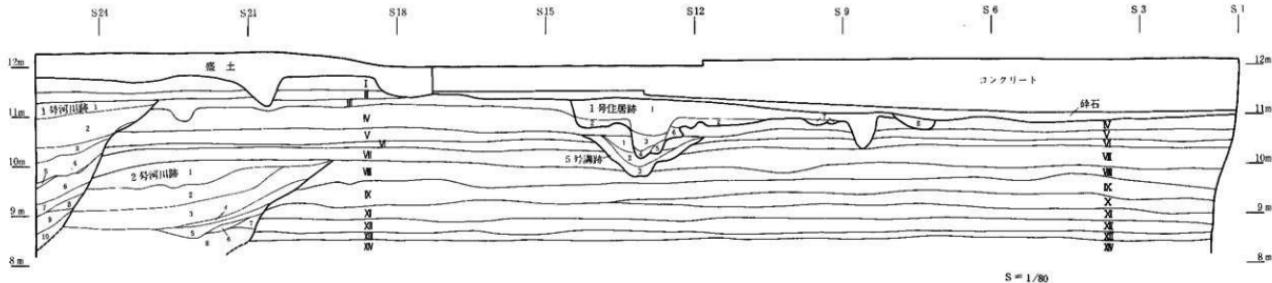
第3図 調査区の位置ヒグリッド配置図

II章 調査の成果

1. 基本層序（第4図）

調査区南半は厚さ50cm程の盛土がされ、北半は1m程削られている。盛土下の基本層序について説明する。

- I層 明オリーブ灰色シルト。酸化鉄粒が点々と混じる。層厚約30cm。II水田耕作土。
- II層 淡黄橙色砂質シルト。酸化鉄・マンガンの集積層。層厚15~20cm。
- III層 暗灰黄色シルト。マンガン粒が混じる。層厚約30cm。上面より住居跡、掘立柱建物跡、1号河川跡が検出される。層中からはロクロ不使用土師器、須恵器が出土している。
- IV層 黄褐色シルト。III層に比べ砂粒が多い。層厚約50cm。層中より弥生土器、縄文土器が出土している。
- V層 黒褐色粘土。上層は暗灰黄色である。層厚15~30cm。上面より柱穴、溝跡が検出される。また、小ピットが多数検出されたがいずれも不整形で柱痕跡なく、人為的なものではないと判断した。層中より弥生土器、縄文土器（晩期）が出土している。
- VI層 にぶい黄色シルト。層厚約10cm。層中より縄文土器（後期）、石器が出土している。
- VII層 黄褐色シルト。層厚20~30cm。層中より縄文土器（後期）、石器が少量出土している。
- VIII層 明黄褐色砂質シルト。やや明るい土が斑状に混じる。層厚30~40cm。上面より2号河川跡が検出される。
- IX層 明黄褐色砂質シルト。層厚30~50cmで、南にむかい厚くなる。
- X層 にぶい黄色砂質シルト。層厚約30cmで、北半部にのみ分布する。
- XI層 明黄褐色砂質シルト。層厚約30cm。
- XII層 南部はオリーブ褐色、北にむかうにつれ次第に灰オリーブ色になる粘土。粘りは強い。層厚約30cm。上面より土坑が検出される。層中より縄文土器（早期）、石器が出土している。
- XIII層 緑灰色および暗オリーブ色粘土。XII層に比べたいへん堅くしまっている。層厚10~15cm。上面より土坑、集石が検出される。層中より縄文土器（早期）、石器が出土している。
- XIV層 緑灰色砂。たいへん堅くしまる。上から約20cmまでは細砂、その下は粗砂である。
- XV層以下については、次第に砂の粒径が大きくなり、標高7m前後で砂礫層となる。



基本層序

番号	色調	上位	下位	備考
1	明オリーブ灰色	2.5YR 7/7	シルト	砂礫が混じる
2	明灰褐色	2.5YR 7/7	シルト	砂礫が混じる
3	暗灰褐色	2.5YR 5/2	シルト	マング酸化鉄を含む
4	黄褐色	2.5YR 4/4	砂質シルト	砂質多くミヤリヤリする
5	黒褐色	2.5YR 3/1	粘土	弱りつよい
6	にじみ青色	2.5YR 4/4	シルト	
7	青褐色	2.5YR 4/4	シルト	
8	明褐色	2.5YR 6/6	砂質シルト	砂質多く弱りつよい
9	明褐色	2.5YR 7/7	シルト	
10	にじみ青色	2.5YR 7/7	シルト	
11	明褐色	2.5YR 7/6	シルト	
12	明褐色	2.5YR 7/6	シルト	
13	オリーブ褐色	2.5YR 4/4	粘土	(油膜)
14	オリーブ褐色	5Y 4/2	粘土	(油膜)
15	緑灰	10G 5/1	粘土	弱くしまる
16	明オリーブ色	6Y 4/4	粘土	
17	緑灰	7.5G 6/1	砂	弱くしまる

1号柱筋地土層観察表

番号	色調	上位	下位	備考
1	にじみ青色	2.5Y 6/4	シルト	炭化物、鐵土鉱混じる
2	明灰褐色	2.5Y 6/2	シルト	炭化物、鐵土鉱混じる
3	暗灰褐色	2.5Y 7/4	シルト	風化層
4	灰褐色	5Y 4/1	シルト	風化層
5	灰オリーブ色	5Y 5/2	シルト	地上、灰と混在
6	暗灰褐色	5Y 4/1	シルト	地上、灰と混在
7	明褐色	2.5Y 7/4	シルト	
8	暗灰褐色	5Y 4/1	シルト	
9	暗灰褐色	2.5Y 5/2	シルト	
10	暗灰褐色	2.5Y 7/6	シルト	粘土、灰と混在
11	明褐色	2.5Y 7/6	シルト	粘土、灰と混在
12	明褐色	2.5Y 7/6	シルト	粘土、灰と混在
13	明褐色	2.5Y 7/6	シルト	粘土、灰と混在

5号溝土層観察表

番号	色調	上位	下位	備考
1	にじみ青色	2.5Y 6/4	シルト	
2	明灰褐色	2.5Y 6/2	シルト	
3	暗灰褐色	2.5Y 6/6	シルト	

番号	色調	上位	下位	備考
1	灰褐色	10YR 4/2	シルト	
2	浅青色	2.5Y 7/4	シルト	
3	浅青色	2.5Y 7/4	砂	
4	浅青色	2.5Y 7/4	砂	
5	白山灰	灰白色火山灰層		
6	にじみ青色	10YR 4/4	砂	
7	浅青色	2.5Y 7/4	砂	
8	灰褐色	3Y 5/2	砂	灰褐色土ブロック製じる
9	青灰褐色	5BG 5/1	砂	灰褐色土ブロック製じる
10	青灰褐色	5BG 5/1	砂	灰褐色土ブロック製じる

第4図 基本層序

2. 河川跡とその出土遺物

調査区の南東隅に改修前の荒川が検出された他に、III層上面で1号河川跡、VII層上面で2号河川跡が検出された。

(1) 1号河川跡 (第5~11図、第2・3表)

(検出) III層上面

[形状] (第5図) 調査区の南東2/3を占める。北西岸は検出されたが、対岸は調査区外である。岸は44mにわたり検出され、河川の最大幅は26mである。調査では堆積している砂層を除去し、礫層を検出し一部掘り込んだ。礫は中央部が高まり、両脇が深くなる。礫層までの深さは、中央部で平均1.6m、南側で平均2m、北側で平均2.3mである。

[堆積土] (第6図) 堆積土は58層に細分されたが、火山灰層の存在や切り合い関係をもとに6層に大別される。

A層 1~5層の砂層である。河川跡のほぼ全体を覆う。

B層 6~12層の砂層である。火山灰層とC層を切る。

灰白色火山灰層 13・14層。13層は火山灰と砂が混じっており、14層は火山灰が主体である。
10世紀前半に降下した火山灰と考えられる。^註

C層 13~40層の砂層である。岸に近い部分で、えぐり込むように深くなっている。

D層 41~54層の礫層である。径5cm以下の礫が主体を占める。

E層 55~58層の礫層である。径10cm程の礫が主体を占める。

これらの大別層のうち、D・E層(礫層)は河川が機能していた時期の河床礫と考えられる。A~C層(砂層)は河川が機能を停止した(河道が移動した)後の堆積土であり、その中でもB層の存在は埋没途中で一時的な小河道ができたことを示すと考えられる。D層のうち、B層直下の礫については、この一時的な小河道に伴う礫とみられる。まとめると大別層を古い方から並べると以下のように考えられる。

(河道の存在) (埋没) (小河道) (埋没)

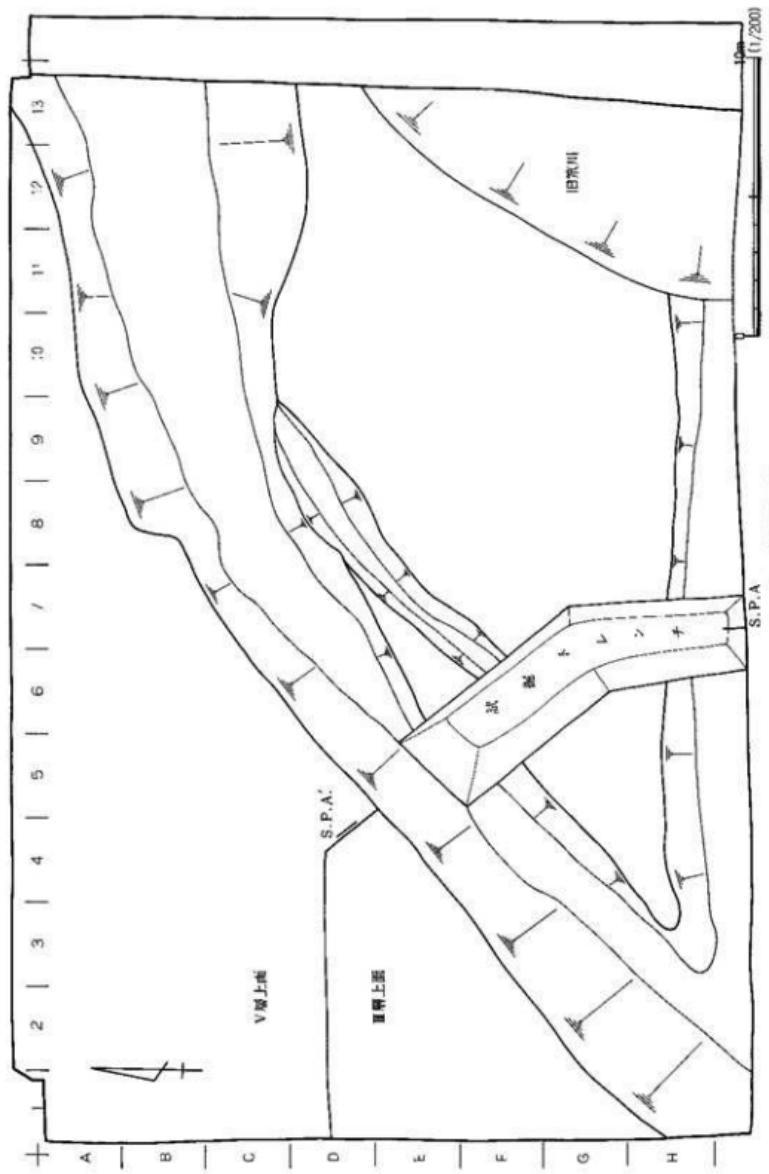
E層 → C層下D層 → C層 → 灰色火山灰層 → B層下D層 → B層 → A層

註) 山田一郎・庄子貞雄(1980)「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』P.97~102

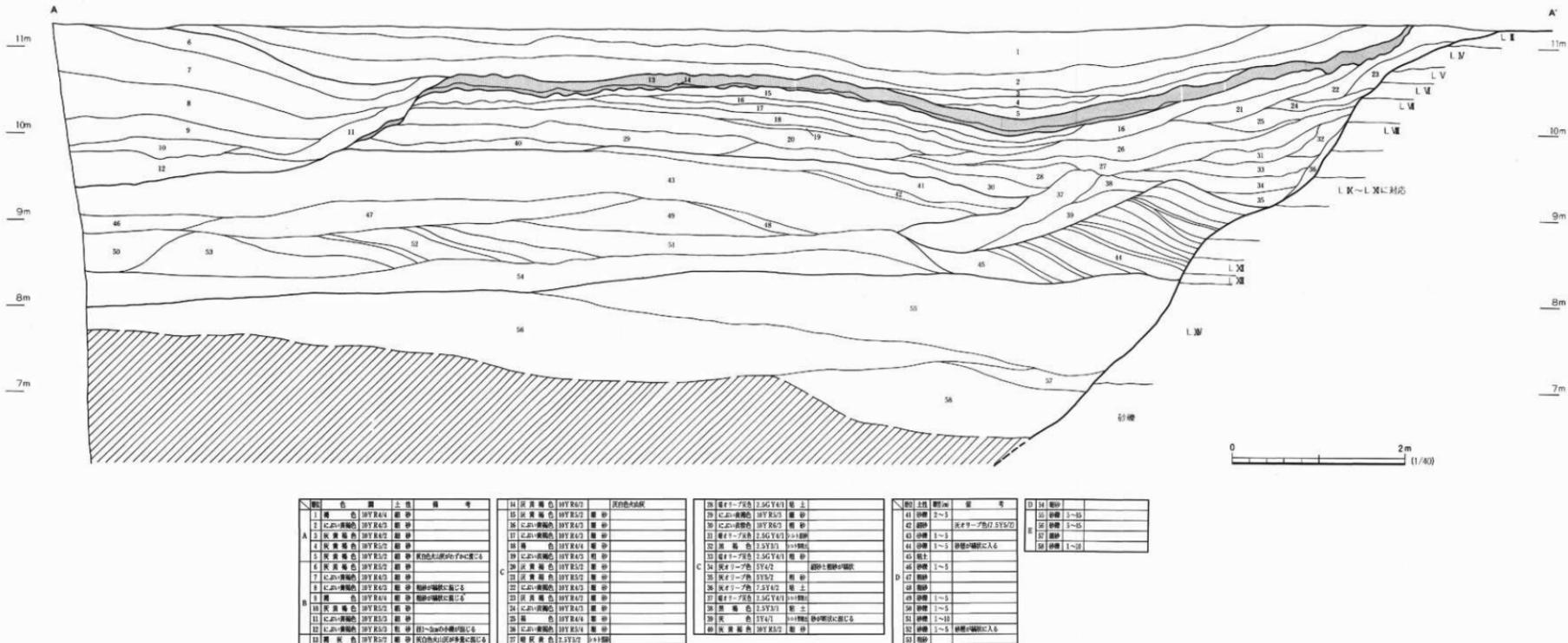
白鳥良一(1980)「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所紀要VII』P.1~38

(出土遺物)

縄文土器・弥生土器・石器については一括して、土師器・須恵器・陶磁器については層ごとに記述する。



第5図 1号河川路平面図



第6図 1号河川跡堆積土

縄文土器 (第7図1~25) 1~24はD層、25はA層出土のものである。全体に摩滅が著しい。1・25は外面に条痕が施されており、縄文早期に位置づけられよう。2は波状口縁で、鎌状彫線が貼付される。3は口縁部が「く」字状に屈曲し、沈線文・盲孔が施される。4は刺突文、5・6は沈線文が施される。7・8は口縁部に縄文原体圧痕文をもつ。11~14は内面に格子状の沈線文をもつ。16~19は沈線文が施される。23は薄手で小突起をもち、内外面に沈線文をもつ。24は小形の壺状かと推定される。2~22は、縄文後期前・中葉に、23は晩期に位置づけられよう。24は不明である。

弥生土器 (第7図26~28) 26は口唇部に刻目が施され、地文上に沈線文が施される。27是有段の口縁部であり、28も口縁部で刻目をもつ段を有する。いずれも、弥生時代後期に位置づけられよう。

石器 (第8図) 1は有茎石鐵、2は無茎石鐵であり、2は裏面にアスファルトが付着する。3は石錐、4は石匙破損品である。5~8は不定形石器で、5は縦長剝片の両縁部と先端部にバティナの異なる二次加工が施される。6・8は剝片の先端部、7は縁部に二次加工を施す。図示資料の他に微細剝離痕をもつ剝片が存在しているが、自然營力による可能性も高いためとりあげなかつた。

C層下D層出土遺物

土師器 (第9図1~4) 1は甕の上半部破片である。体部はあまり膨らまず、撫で肩の肩部から直線的に外傾して開く広口のものである。外面は口唇部を横ナデした後全面に縦のヘラケズリを施し、内面はナデが体部では縦位に、口縁から頸部では横位に施される。2は丸底の坏で口縁部がやや外反する。外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ、黒色処理が施される。3・4はロクロ使用の坏である。3は底部全面と体部下端に手持ちヘラケズリが施されており、切り離しは不明である。体部に墨書「及」を持つ。4は回転糸切り後底部周縁と体部下端に手持ちヘラケズリが施される。3・4とも内面はヘラミガキ、黒色処理が施される。

須恵器 (第9図5~7) いずれも坏である。5は裾高の高いものである。底部は手持ちヘラケズリがされており、切り離しは不明である。6は底部全面から体部下端にかけ回転ヘラケズリが施される。7は底部のみであるが、回転糸切り痕を持ち、墨書「東」とヘラ記号「×」がある。

遺物の年代 2は國分寺下層式(奈良時代)にあたる。ロクロ使用土師器および須恵器は、底部および体部下端に再調整が施されるという特徴をもつ。このことから、2~7の土器は奈良時代からの平安時代初頭(9世紀中頃まで)に位置づけられる。1は県内の類例を知らない。器形の類似するものとしては、北関東地方の弥生時代後期の甕があり、同器形の甕は古墳時代前期五^世領式期の甕の中にも存在している(例として、茨城県曲松遺跡出土のものがあげられる)。

註) 佐藤次男(1974)「曲松集落遺跡」『茨城県史料考古資料編古墳時代』

C層出土遺物

土師器（第9図8） ロクロ使用の高台付坏である。内外面ともヘラミガキ、黒色処理が施される。底部の切り離しは回転糸切りである。

須恵器（第9図9～12・第10図1～6・第11図） 第9図9～12、第10図1～3は底部の切り離しが回転ヘラ切りの坏である。器形は底部から直線的に外傾するものが大部分である。第10図4は切り離しが回転糸切りの坏で、底部からやや内側に入り込んだ後若干丸味をもって外傾する。3・4の底部には墨書きがあり、3は判読不明、4は「正」である。第10図5は蓋である。扁平な宝珠形のつまみを持ち、天井部からなだらかに口縁部に至り、口縁端部は下方に折り曲げられる。天井部外面上半には回転ヘラケズリが施される。6は高台付盤で、底部全面には回転ヘラケズリが施される。内面には沈線が1条巡る。第11図は蓋であり、第10図1・3の坏と共に出土した。最大径は体部上半にあり、器高より大きい。体部外面には平行タタキの後5条の沈線が巡り、内面には青海波文（同心円状アテ目）が認められる。

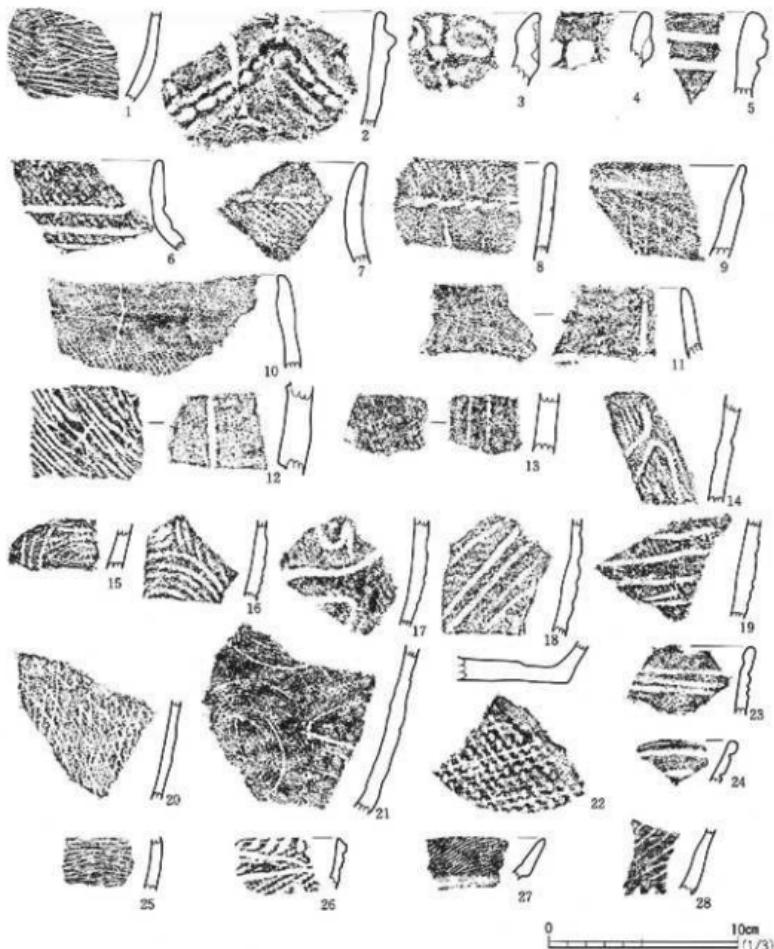
土器の年代 C層出土土器は、切り離し技法、器形等の特徴より、奈良時代から平安時代初頭（9世紀中頃まで）に位置づけられる。

B層下D層出土遺物（第10図7・8） ロクロ使用の土師器坏で、底部の切り離し技法は回転糸切りで再調整は施されない。器形は底部からやや内側に入った後丸味をもって立ち上がり、口縁部は7は内弯気味であり、8はやや外反する。内面はヘラミガキ、黒色処理が施される。これら坏は表衫ノ入式（平安時代）のものである。

A層出土遺物（第10図9～12） 9は須恵器坏で、切り離し技法は回転糸切りである。10は赤焼土器坏である。切り離しは回転糸切り後無調整であり、器形は口縁部が大きく外反し全体に小ぶりのものである。これらは平安時代に位置づけられる。11は青磁碗である。厚手の底部で、高台は削落しており、高台内は露胎である。全体にオリーブ灰色の釉がかかり、見込みには「金玉満堂」のスタンプ文がある。これは龍泉窯系の青磁とみられ、13世紀から14世紀前半に位置づけられる。12は陶器片であるが、後述する2号建物跡出土の常滑焼三筋壺と同一個体の可能性が高い。沈線が2条引かれており、三筋壺の最下段の沈線部分であろう。沈線幅は、上が1mm、下が2mm、沈線の間隔は3mmである。時期は12世紀頃とみられる。図示できなかったが他に、瀬戸灰釉瓶子片（14世紀頃）と志野焼皿片が出土している。志野焼皿は底部に近い部分の小破片で、白色の釉がかかる。時期は16世紀末～17世紀前半頃である。

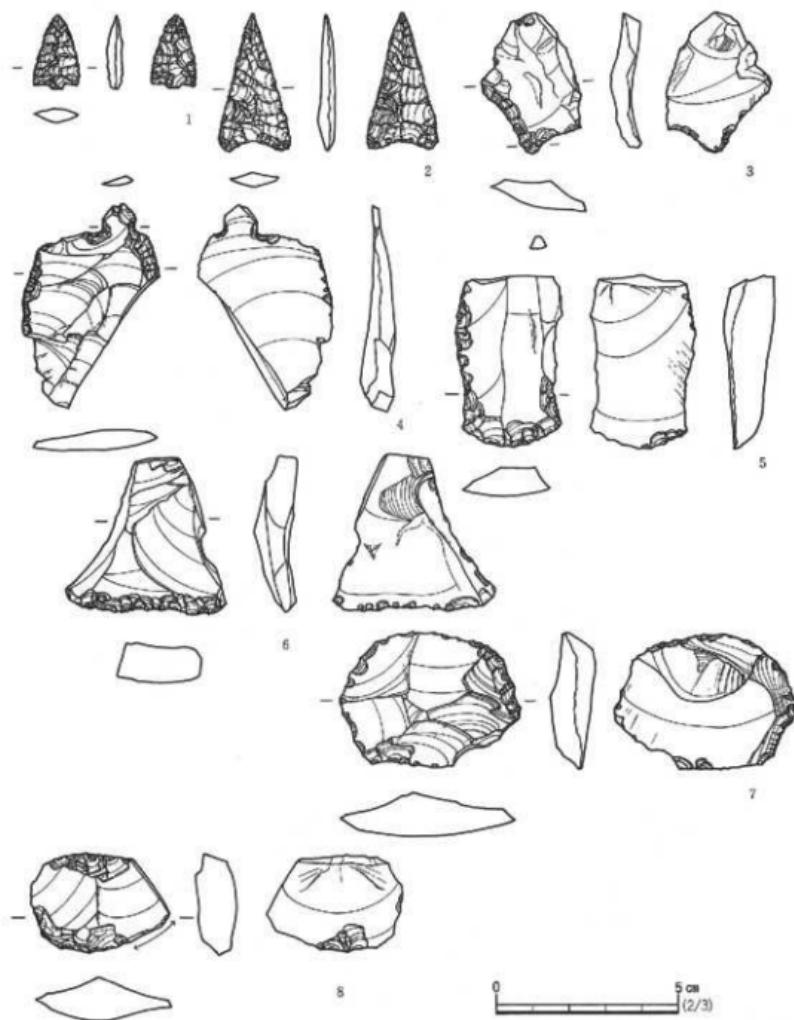
〔まとめ〕 1号河川跡の機能していた時期は、C層下D層出土遺物の年代から平安時代初頭かそれ以前と考えられる。そして、C層の遺物と灰白色火山灰の存在から平安時代の前半代にはほぼ埋まっていたとみられる。完全に埋没し平坦になった時期は、A層から志野焼皿片が出土していることから、中世末～近世頃と考えられる。

（青磁器については、文化財課佐藤 洋の表示による）



番号	場所	文様・調査	備考	場所	文様・調査	備考	場所
1	D 屋	条痕か(幅1mm)		A248	15 D 滑	縞文(L.R.)、波線	A14
2	D 屋	縞線・斜切	波状口縁	A 1	16 D 滑	波線	A15
3	D 滑	花線・斜実		A 2	17 D 滑	波線	A16
4	D 滑	口唇縞文(L.R.)、斜実		A 3	18 D 滑	波線	A17
5	D 滑	波線		A 4	19 D 滑	波線、縞文か	A18
6	D 滑	縞文(?) - 波線		A 5	20 D 滑	網目波線系文(R)	A19
7	D 滑	網目正縞(?)、縞文(R.L.)		A 6	21 D 滑	波線、縞文か	A20
8	D 滑	網目正縞(?)、縞文(R.L.)		A 7	22 D 細	網目波線	A21
9	D 滑	網目波線系文(?)		A 8	23 D 細	波線	A22
10	D 滑	縞系文(L)		A 9	24 D 細	波線	A23
11	D 滑	縞文か	内面波線	A10	25 A 細	尖底か(幅1mm)	A24
12	D 滑	波系文(R)	内面波線	A11	26 A 細	口唇本ガラ、縞文(L.R.) - 波線	B 1
13	D 滑	縞文か	内面波線	A12	27 A 細	縞文(L.R.)	B 2
14	D 滑	縞文(?)、波線		A13	28 A 細	縞文系(R)、キザミ	B 3

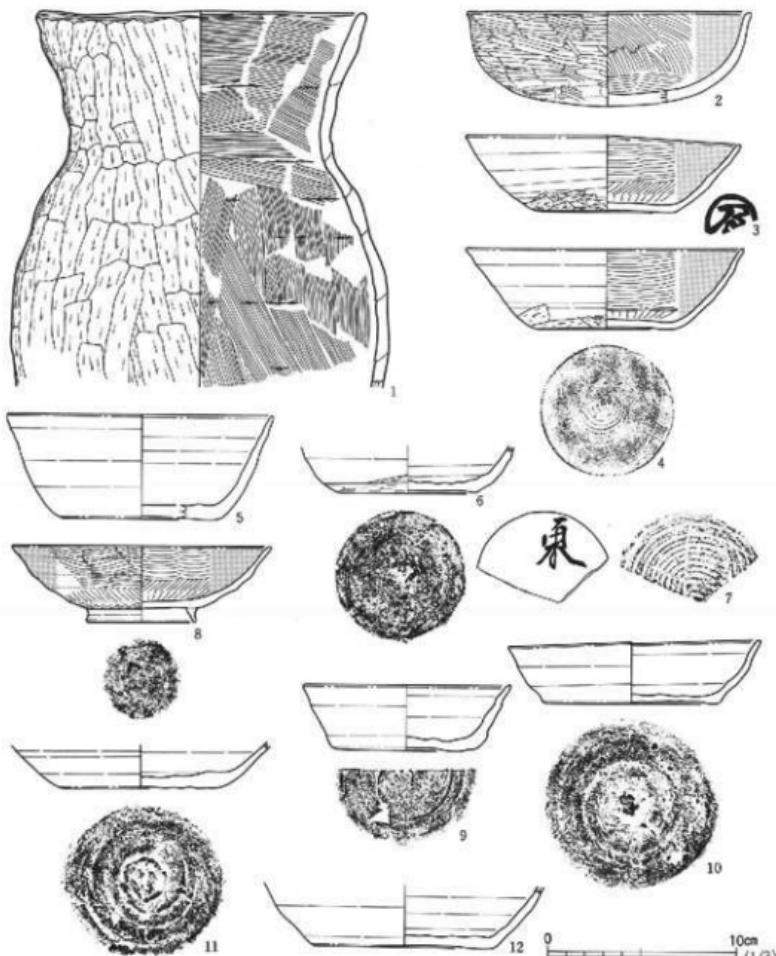
第7図 1号河川跡出土遺物(1)



番号	層位	器種	石 材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	備 考	番 編	写 真
1	D 層	石 破	チャート (?)	20	12	3.8	0.7	無孔欠損	K 1	32-28
2	D 層	石 破	青 貝 岩	38	19.7	4.4	2.3	アスファルト付着	K 2	32-29
3	D 層	石 破	青 貝 岩	37.2	26	6.6	5.4		K 3	32-30
4	D 層	石 此	青 貝 岩	57.8	34.2	7.4	11.2	下半欠損	K 4	32-31
5	D 層 不定形	石 破	英	46.2	29.3	12.3	18.6	二次加工は全て新しい	K 5	32-32
6	D 層 不定形	石 破	青 貝 岩	42	43	9.9	14.4		K 6	32-33
7	D 層 不定形	石 破	青 貝 岩	49.2	36.7	12.1	21.0		K 7	32-34
8	D 層 不定形	石 破	青 貝 岩	24.0	36.0	10.0	8.9	m, f, あり	K 8	32-35

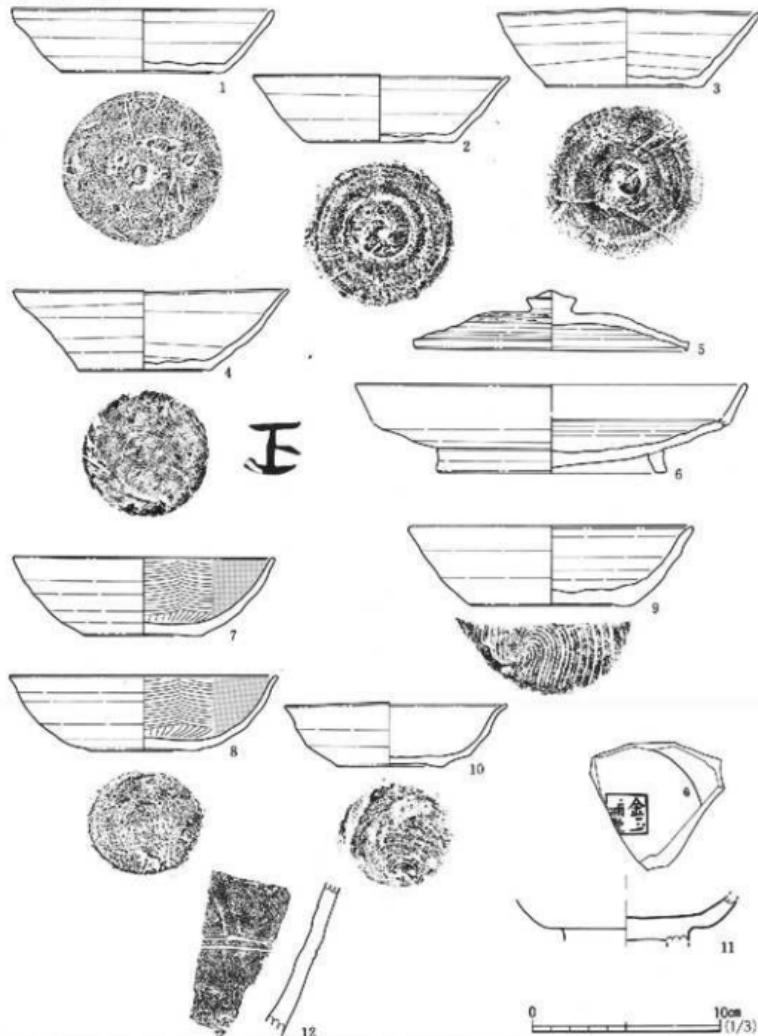
剥片は剥片鳥・柄、打面不明のものは最大長を示す

第8図 1号河川跡出土遺物(2)



番号	所位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外面調査	内面調査	生産年式
1	C層下D層 上部断面	27.4			ヨコテグ、ヘラケズリ	ナゲ	C 1 33-9
2	C層下D層 土師胎环	15.0			ヘラケズリーハラミガキ	ヘラミガキ、黒色絵画	C 2 33-1
3	C層下D層 土師胎环	14.4	7.6	4.1	手轉ヘラケズリ、織籠「丸」	ヘラミガキ、黒色絵画	D 1 33-2-3
4	C層下D層 土師胎环	14.4	7.2	4.3	刃板余切り、手轉ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色絵画	D 2 33-4
5	C層下D層 土師胎环	14.6	9.0	5.6	手轉ヘラケズリ		E 1 33-5
6	C層下D層 泥炭胎环		7.2		刃板ヘラケズリ		E 2
7	C層下D層 泥炭胎环		7.2		刃板余切り、墨書き「丸」		E 3 33-6
8	C層 土師胎环	13.6	5.8	4.1	刃板余切り、ヘラミガキ、黒色絵画	ヘラミガキ、黒色絵画	D 3 33-7
9	C層 泥炭胎环	16.6	6.2	3.5	刃板ヘラ切り		E 4 33-8
10	C層 泥炭胎环	13.2	8.9	3.4	刃板ヘラ切り		E 5 33-10
11	C層 泥炭胎环		8.6		刃板ヘラ切り		E 6
12	C層 泥炭胎环		9.6		刃板ヘラ切り		E 7

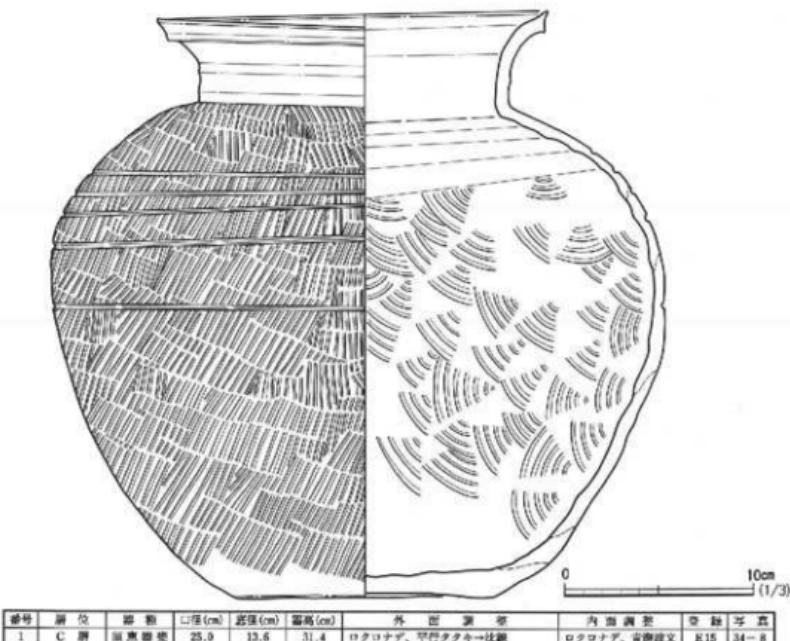
第9図 1号河川跡出土遺物(3)



0 10cm
(1/3)

番号	場所	物種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外 国 漢 型	内 表 調 査	色 線 写 真
1	C 河	縦底器皿	13.6	8.4	3.4	圓輪ヘラ切り、ロクロナデ	ロクロナデ	E 8 34-11
2	C 河	直底器皿	13.3	7.4	4.6	圓輪ヘラ切り、ロクロナデ	ロクロナデ	E 9 34-1
3	C 河	直底器皿	13.6	8.3	4.2	圓輪ヘラ切り、ロクロナデ	ロクロナデ	E 10 34-2
4	C 河	直底器皿	14.4	6.9	4.3	圓輪ホリ切り、ロクロナデ、巻書「正」	ロクロナデ	E 11 34-34
5	C 河	直底器皿	14.4		3.2	圓輪ケズリ、ロクロナデ	ロクロナデ	E 12
6	C 河	縦底器皿		12.2		ヘラケズリ、ロクロナデ	ロクロナデ	E 13
7	B階FD層	上直底器皿	13.6	6.2	4.2	圓輪糸切り、ロクロナデ	ヘミガキ、黒色地埋	D 4
8	B階下D層	上直底器皿	14.6	5.8	4.6	圓輪糸切り、ロクロナデ	ヘミガキ、黒色地埋	D 5 34-5
9	A 層	直底器皿	14.8	8.6	4.3	圓輪糸切り、ロクロナデ	ロクロナデ	E 14 34-8
10	A 層	直底器皿	11.5	2.8	3.4	圓輪糸切り	ロクロナデ	D 6 34-7
11	A 層	青 級 瓦		6.6		オーバー波曲(2.5G Y5/1) 細、窓あり、窓内縫隙	J 1 34-9	
12	A 層	陶 器 底				ナデ。平行比較	ナデ	T 1 34-10

第10図 1号河川跡出土遺物(4)



第11図 1号河川跡出土遺物(5)

(2) 2号河川跡

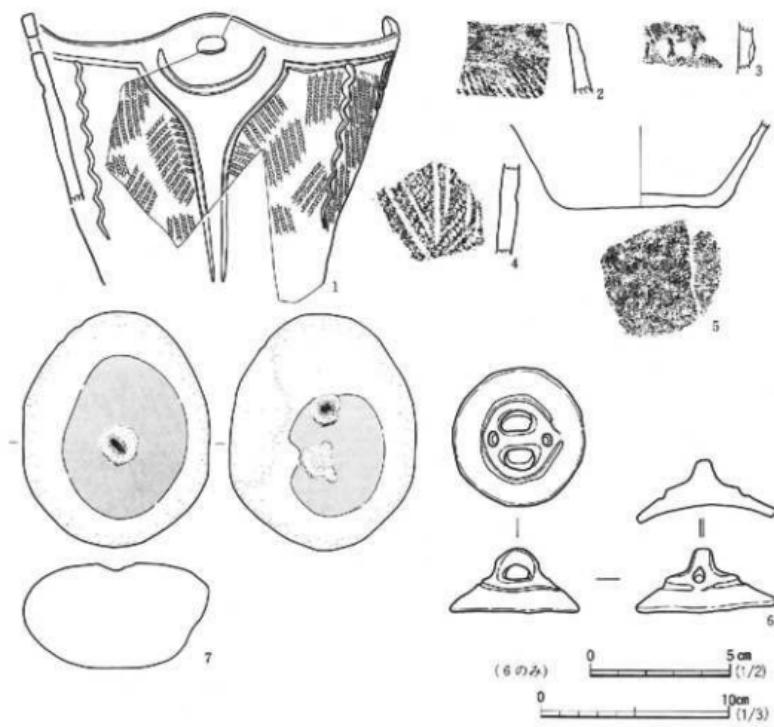
〔位置・形状〕 Ⅷ層上面で検出された。G・H1グリッドに位置する。大部分は1号河川跡により破壊されている。西壁部分での残存幅4.7m、深さは1.6m以上である。

〔堆積土〕 8層確認された。明黄褐色の砂が主体で、 ℓ 8以下は砂礫層である。

〔出土遺物〕 (第12図・第3表) ℓ 1より縄文土器、石器が少量出土している。1は深鉢形土器の上半部であり、4単位の波状口縁とみられる。波頂部に円孔を持ち、口縁部は沈線で区画され無文、体部は縄文が施文された後沈線により区画された磨消部による「Y」字状が波頂部に合わせて描かれ、その間に蛇行沈線が引かれる。2は撚糸文の施文される口縁部、3は刺突文、4は地文上に沈線が施される。6は土製蓋である。石器は磨凹石が1点出土しており、磨凹面を2面持つ。

これらの土器は、縄文時代後期前葉の南境式に位置づけられる。

〔まとめ〕 2号河川跡は縄文時代早期の遺物を出土するⅧ・Ⅸ層を切っており、堆積土最上層に縄文後期前葉の遺物を含んでいる。このことから河川の機能していた時期は、縄文早期以降、縄文後期以前と考えられる。



第12図 2号河川跡出土遺物

第2表 1号河川跡土師器・須恵器破片集計表

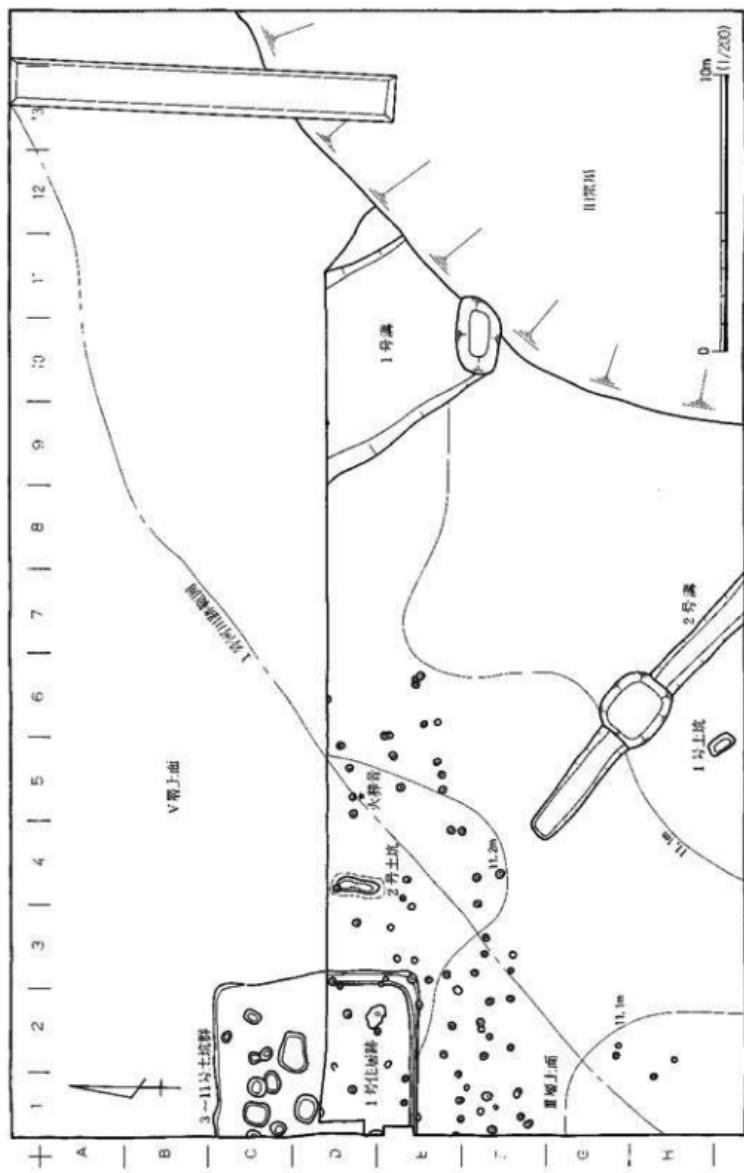
種別	部位	部	器	面	型	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	計
土 壁	縫 部	口	クロ	ミガキ(黒色)	14			19		27		1				61
		クロ後ミガキ	ミガキ(黒色)	1												1
		ミガキ	ミガキ(黒色)	4						5		1				10
		ミガキ(黒色)	ミガキ(黒色)	2		1										2
		縫ナデ	ミガキ(黒色)													1
	体 部	不列	ミガキ(黒色)	26					41		13					26
		ロクロ	ミガキ(黒色)	28												82
		ミガキ	ミガキ(黒色)	22									2			24
		ミガキ(黒色)	ミガキ(黒色)	2												2
		不明	ミガキ(黒色)	20												20
	縫 部	不明	不明	1		1										1
		回転糸切り								14		7	1			22
		回転糸切り後縫紙ヘラケズリ		1					3		1					5
		回転糸切り後手持ちヘラケズリ								1						1
		全面手持ちヘラケズリのため不明									2					2
土 壁	縫 部	手持ちヘラケズリ	ミガキ(黒色)	1								1				1
		不明	ミガキ(黒色)					3				8				11
		回転糸切り														9
		横ナデ	横ナデ	11								5				16
		ロクロ	ロクロ	25	1		12									38
	体 部	ロクロ	ナデ				6			2						8
		ロクロ	ミガキ(黒色)			1		2		1		1				5
		ナデ	ナデ	35	27							6				68
		ナデ	ヘラナデ		1		4			2						1
		崩毛口	崩毛口	1				9								6
土 壁	縫 部	崩毛口	ナデ													10
		ミガキ	ナデ													2
		ヘラケズリ	ナデ	13				11		19						43
		不明	不明	338	16		38		42		21					434
		回転糸切り							1							1
	体 部	木雲底		6									1			7
		不明		7	1											8
		ロクロ	ロクロ	15			4		2							21
		口縫	ミガキ								1					1
		底部	ミガキ	…	不	明							1(堆積)			1
土 壁	外張	外張	ミガキ	ミガキ									1(堆積)			1
		脚部	ミガキ(朱色)段	…	不	明(朱色)							1(堆積)			1
		小計		575	52		167		147		34					975
		回転糸切り														36
		横ナデ	横ナデ	4	3		7		22							4
	縫 部	ロクロ	ロクロ	7	2		2		3		1					15
		ロクロ	ロクロ				1									1
		山形ナデ		3			1		8							12
		回転ヘラ切り		1	2		1		3							2
		手持ちヘラケズリのため不明					1									1
土 壁	縫 部	回転ヘラケズリのため不明		1			1									2
		不	明			1										5
		ロクロ	ロクロ	1	1											4
		横状文	ナデ									1				1
		ロクロ	ロクロ	2	1				10		1					14
	体 部	ロクロ	ナデ	21	5		4		14		3					47
		平行クタキ	青海波文	7			3									10
		平行クタキ	オサエ									6				6
		輪子クタキ	ナデ									2				2
		輪子クタキ	青海波文									1				1
土 壁	縫 部	手持ちケズリ	ナデ				1		3							4
		ナデ	オサエ		2											2
		平行クタキ	オサエ		1											1
		ロクロ	ロクロ	2												3
		ロクロ	ロクロ	3			1									5
	体 部	平行クタキ	ロクロ						1		1					2
		近縫崩毛口	ロクロ													1
		近縫部	ロクロ	1												1
		口縫	ロクロ	12	ク	ロ	1					2				3
		体透	ロクロ	12	ク	ロ	1					12				13
須 塚 土 器	縫 部	回転糸切り		4						3						7
		小計	計	65	19		45		91		9					229
		合	計	640	71		212		238		43					1204

第3表 1号河川跡出土縄文土器集計表

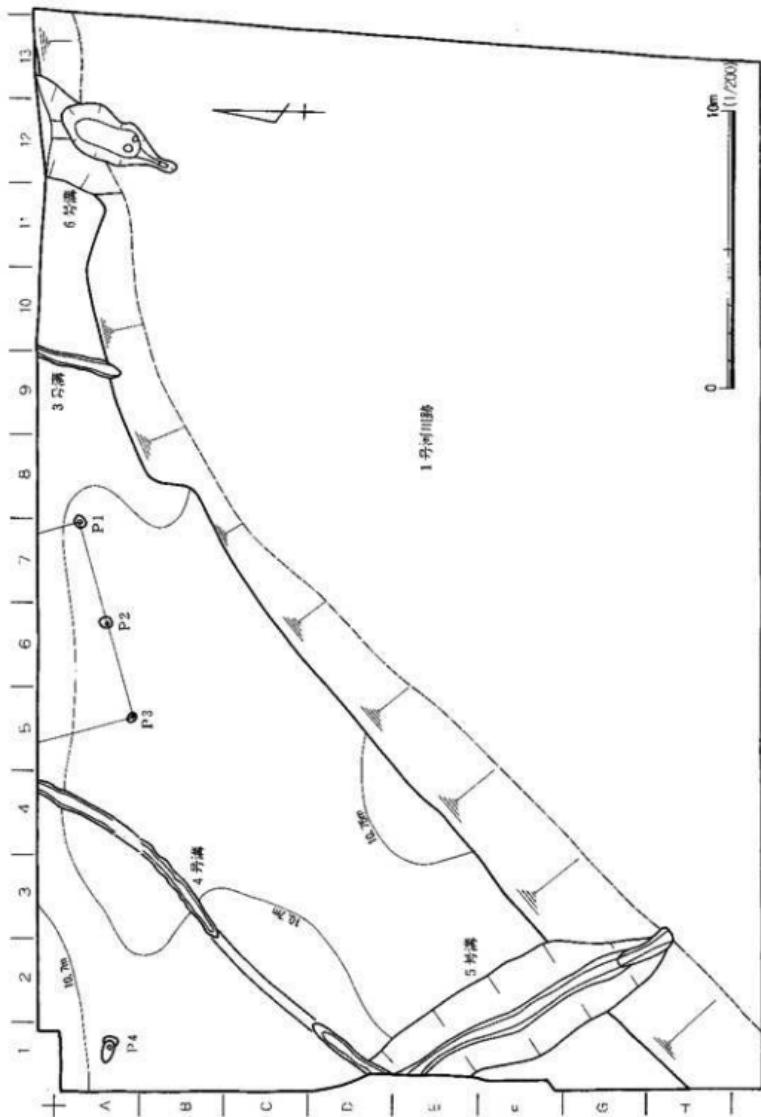
部位	文様・調整	A層	D層	堆土表記	計
口 縦 部	斜行縄文(?)		3		3
	燃系文(r)		2		2
	沈縫文	1	1		2
	沈縫文+孔		1		1
	無文		11	2	13
	不明			1	1
	斜行縄文(LR)	3	13	1	17
	斜行縄文(RL)	5	25	30	
	斜行縄文(L,r)		3		3
体 部	斜行縄文(?)		28	2	30
	燃系文(?)	5	5		11
	燃系文(r)		14		14
	燃系文(?)		8		8
	沈縫文		9	1	10
	斜行縄文(LR)+沈縫文		2	1	3
	斜行縄文(RL)+沈縫文			1	1
	燃系文(?) + 沈縫文		1		1
	燃系文(r) + 沈縫文		1		1
部 底	原体压痕(RL)+斜行縄文(RL)		1		1
	原体压痕(RL)		1		1
	納糞(?)		2		2
	隨縫		1		1
	無文		96		96
	不明			5	5
	無文(ミガキ)		5		5
	無文(ナゲ)	1			1
	無文(?)		9		9
部	木葉痕		1		1
	棒状压痕		1		1
	計	16	245	14	274

第4表 2号河川跡第1層出土
縄文土器破片集計表

部位	文様・調整	点数	計
II 縦 部	斜行縄文(LR)	1	2
	斜行縄文(RL)	1	
体 部	斜行縄文(RL)	1	6
	斜行縄文(LRL)	1	
	斜行縄文(L)	1	
	沈縫文	1	
	無文	2	
計		8	



第13図 Ⅲ層上面検出遺物配置図



第14図 V層上面検出遺構配置図

3. 中世以降の遺構と遺物（第15・16図、第5表）

D・E-1～6グリッドのIII層上面および1号河川跡堆積土上面に多数の柱穴が検出された。柱穴の径と堆積土はほぼ類似しているが、深さと柱痕跡を基準に検討した結果、3棟の建物跡を復元することができた。

1号掘立柱建物跡

〔位置〕 D・E-5・6グリッド。

〔確認面〕 P₆・P₈はIII層上面、他は1号河川跡上面。

〔規模〕 北側は削られており不明だが、残存部分で梁行2間(3.57m:約12尺)、桁行2間以上(4.22m以上)の南北棟で、西側に廂(0.55m)を持つ。内部にも柱穴があり、間仕切りがなされていたとみられる。桁行方向はN-15°-Wである。また、建物南側のP₁₂とP₁₄を結んだ線は梁行に平行しており、塀が存在していた可能性がある。

〔柱間寸法〕 梁行の平均は1.78m(5尺8寸7分)、桁行の平均は1.61m(5尺3寸1分)。

〔出土遺物〕 P₁₆掘り方埋土より、土師器壺体部破片(調整不明)が1点出土している。

2号掘立柱建物跡

〔位置〕 D-F-2-4グリッド。

〔確認面〕 P₁₇・P₁₈・P₂₂・P₂₆・P₄₂・P₆₇は1号河川跡上面、他はIII層上面である。

〔重複〕 1号住居跡、2号土坑より新しい。

〔規模〕 北側は削られており不明だが、残存部分は梁行2間(4.38m:約14.5尺)、桁行2間以上(5.98m以上)の南北棟と考えられる。内部にも柱穴があり、間仕切りされていた可能性がある。桁行方向はN-6°-Wである。建物跡の南側のP₂₈・P₂₇は桁行の延長上にあり、径は小さくが30cmの深さがあることから塀等の施設の可能性がある。

〔柱間寸法〕 梁行の平均は2.19m(7尺2寸3分)、桁行の平均は2.53m(8尺3寸5分)。

〔出土遺物〕 P₂₁掘り方埋土より弥生土器片(天王山式)、P₁₉掘り方埋土より土師器壺底部片(不明-ナデ)、P₁₇掘り方埋土より土師器壺口縁部片(横ナデ-横ナデ)、体部片(調整不明)各1点ずつ出土している。建物南東隅にあたるP₁₇掘り方底面からは常滑窯三筋壺片が出土している(第15図)。体部片2点が内面を上にして重ねられ、礎板のように置かれていた。三筋壺は肩部から体部にかけてのみ残存している。体部には3段にわたり沈線が施されている。本来幅約6mmの半截竹管状の工具で2本同時に引こうとしたようだが、場所によって1本しか引かれなかったり、一巡しても線が一致せず3本引かれたりしている。調整は外面上半が横方向のナデ、下半が縦方向のナデ、内面は横・斜めの方向のナデである。内面には巻き上げ痕跡が部分的に見られる。肩部には自然軸がかかっている。編年位置については、口頸部を欠く資料のため沈線が複線であることしか決め手にならないが、赤羽編年の第I・II段階、植崎

註2)

編年の第1～3段階のものとみられる。時期としては12世紀に位置づけられよう。

註1) 赤羽一郎(1984)「常滑焼——中世窯の様相——」ニュー・サイエンス社

註2) 梶崎彰一(1974)「初期中世陶における三筋文の系譜」[名古屋大学文学部研究論集L X 番] P.99～145

また、P₃₃柱痕からオオムギ穀粒が出土している(P.85 参照)。

3号掘立柱建物跡

(位置) D～F-1～3グリッド。

(確認面) III層上面。

(規模) 北側は削られており不明だが、残存部分は梁行2間(3.63m:約12尺)、桁行2間以上(4.86m以上)の南北棟と考えられる。内部にも柱穴があり、間仕切りされていた可能性がある。桁行方向はN-7°-Wである。また、柱穴の並びからみて1m南と0.9m西に廂のつく可能性があるが、柱間が身舎と合致せず疑問が残る。P₄₂とP₄₃は桁行の延長上にあり、1・2号建物跡同様に構等の施設の可能性がある。

(柱間寸法) 梁行の平均は1.82m(5尺9寸9分)、桁行の平均は1.87m(6尺1寸7分)。

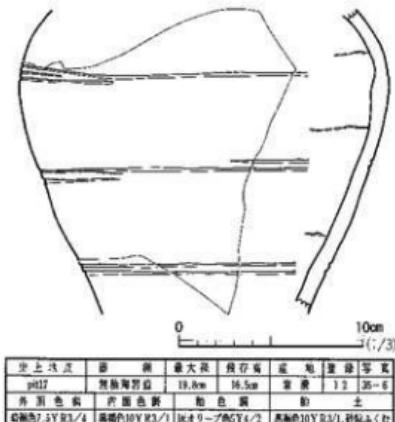
(出土遺物) P₃₂・P₃₃柱痕より土師器環口縁部片(ロクローミガキ・黒色処理)各1点、P₃₃柱痕より赤燒土器環口縁部片1点、P₃₃掘り方埋土より土師器環体部片(不明ミガキ・黒色処理)1点、壺体部片(ヘラケズリーナデ)1点、須恵器壺体部片(平行タタキ・青海波文)2点が出土している。

組み合わない柱穴

P₄₄・P₄₅・P₄₆は調査区西側にのびる建物跡になる可能性がある。P₄₄柱痕より土師器壺体部片1点が出土している。他の柱穴からは、P₄₁柱痕より木炭、P₄₆柱痕より土師器壺体部片(ヘラケズリーナデ)1点、P₄₄柱痕からオオムギ穀粒、米粒が出土している(P.85 参照)。

まとめ

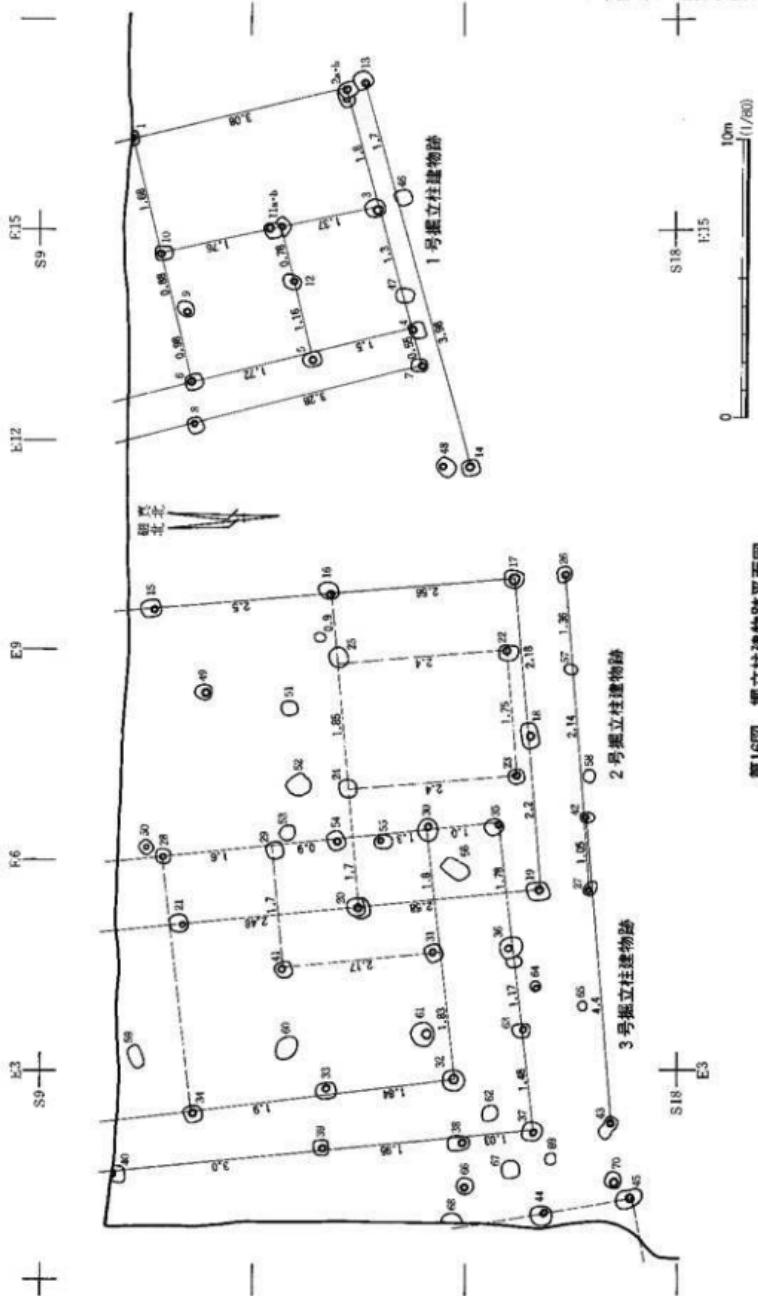
3棟建物跡はいずれも南北棟と考えられ、桁行方向より1号建物跡と2・3号建物跡に2分される。2・3号建物跡は建て替えを示していると考えられる。建物跡の時期



出土状況	断面	最大径	發行高	底	壁	底	等	見
pH17	灰褐色薄皮	13.8cm	16.5cm	青 色	1.2	26-6		
赤 色	赤褐色薄皮	16.2cm	16.5cm	白 色	1.0	1		土
赤褐色7.5YR3/4	赤褐色10YR3/1	16.4cm	16.5cm	赤褐色5YR4/2	1.0	26-6		砂質土

第15図 2号建物P₁₇出土遺物

は、2号建物跡P₁₇より12世紀の常滑三筋壺が出土しているが、柱穴の検出される1号河川跡A層の堆積年代からみて、近世頃と考えたい。



第16圖 据立柱建物跡平面図

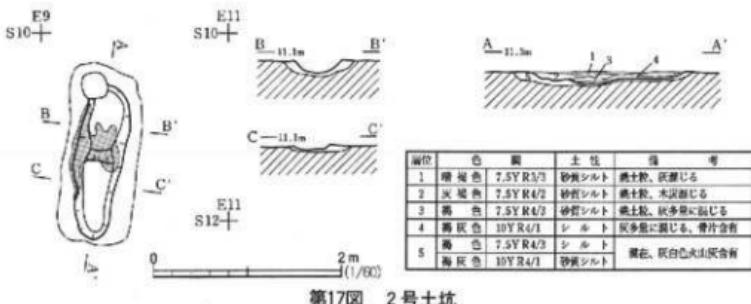
第5表 ピット計測表

4. 平安時代以降の造構と遺物

2号土坑（第17図）

D・E-4グリッドに位置し、III層上面で確認された。2号掘立柱建物跡のP₁₅に切られる。長軸163m、短軸54cmの不整長楕円形で、深さは南半で8cm、北半で13cmと北半が一段下がる。長軸方向はN-6°-Eである。土坑はひとまわり大きな掘り方をもち、掘り方埋土を壁、底としている。掘り方の長軸190cm、短軸80cm、最深16cmである。土坑の壁はゆるやかに立ち上がり、中央部の底面と壁に焼け面が認められ、木炭が付着している。堆積土は4層に分けられる。①～③は焼土・木炭・灰を多く含むシルトである。④は中央部から南部の底面を覆う灰層で、纖維質のものが層状にみられ骨粉が混じっている。掘り方埋土には灰白色火山灰が多量に混入している。遺物は出土しなかった。

2号土坑の時期は、掘り方埋土に灰白色火山灰が存在することから、平安時代（10世紀前半）以降と考えられる。

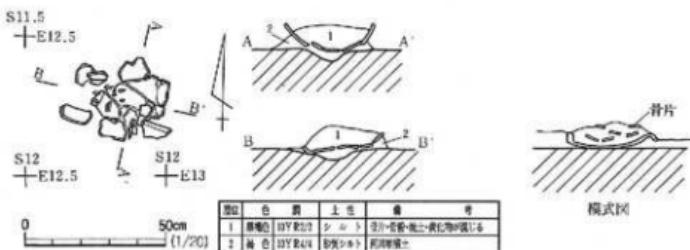


第17図 2号土坑

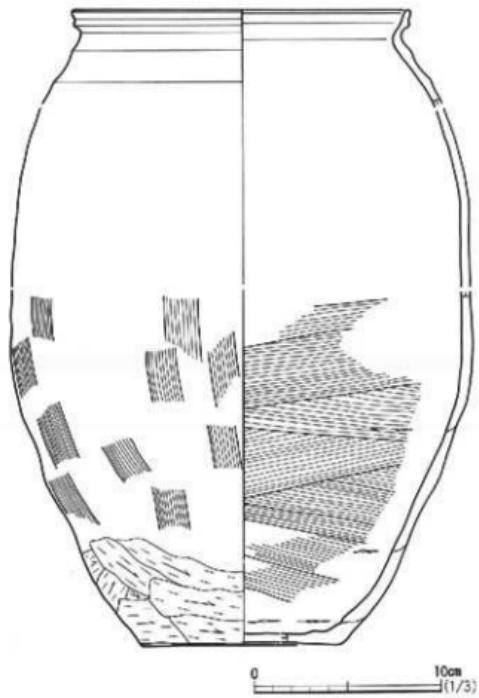
藏骨器と火葬骨（第18・19図）

D-5グリッドの1号河川跡堆積土を精査中、横倒しとなった土師器甕を検出した。甕内部の土中には焼骨片が混じっていた。甕は大部分が欠損しており、掘り方等の施設は認められず、周辺にも骨粉が散乱していたことから、本来の位置から動いていると考えられる。

藏骨器（第19図）土師器甕である。体部下半と口縁部が残存しており、図上で復元した。口径18cm、底径10.5cm、最大径は胴中央部にあり24.5cm、復元器高34cmである。口径は底径よりも大きく、体部上半は大きく内窵し臺に近い器形である。口縁部は短く、「く」の字状に開いている。全体に摩滅が著しいが、口縁部～体部上端の内外面はロクロナデ、体部下半の外面にはナデとヘラケズリ、内面にはナデが施される。底部はヘラケズリである。所属時期は平安時代である。



第18図 藏骨器出土状況



第19図 藏骨器

部類	外観測定	内観測定	高さ	直径
上腕骨	ロ:ロクロナラ、筒ド:ナラ、ヘラケヅリ	ロ:ロクロナラ、筒ド:ナラ、ヘラケヅリ	DT	10cm (1/3)

○丈夫であるはずの歯や頭骨が見つけられない。また、指骨、中手・中足骨の肢端部も見つけ

2号土坑および藏骨器出土の焼骨について

焼骨について高橋 理氏（東北大文学部考古学研究室）に鑑定を依頼した。

2号土坑出土焼骨 火を受けて白色化しているが、人骨であるとは断定できない。

藏骨器内焼骨 全て人骨であり、熱を受けて割れ、変形が見られるので、火葬後土器内に納めたものと推定される。

○椎骨片・上腕骨片（右側・遠位端）・肋骨片・四肢骨の一部・大腿骨（or 上腕骨）の骨頭部破片が出土している。全て白色化して変形が著しい。

○骨自体は決して小さくはないが、上腕骨の骨端部の一部に巣着の未了の線が残っているので、完全に成長しきった人間ではない（十代）と思われる。

○性別は不明。

られない。出土状況からするとある程度の骨は紛失していると思われる。しかし、骨片は細片化し混在しているのだから、見つけられないものがあるということは、それらの骨が甕に納める以前の段階で失われていたものと考えたい。人骨そのものの性格（罪人？）によるものか？

2号土坑について

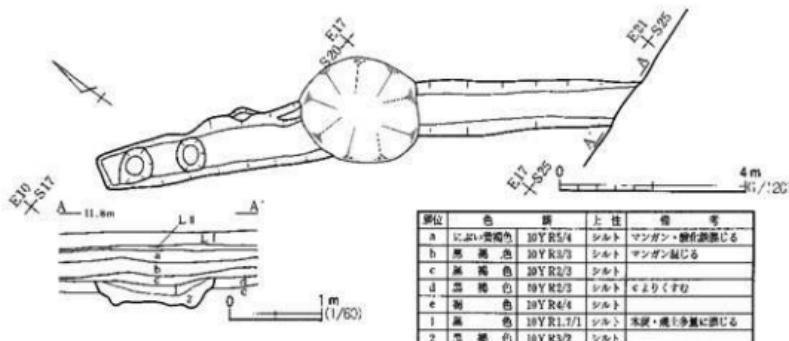
2号土坑の機能については、掘り方をもち、人が入るくらいの大きさである他に、周辺から火葬骨を納めた蔵骨器が出土したという状況から、火葬施設であった可能性が高い。類似する遺構は松木遺跡（工藤1986）、後河原遺跡（佐藤・兼田1985）から発見されている。

2号溝跡（第20図）

F-4、G-4～6、H-6・7グリッドに位置する。検出面は1号河川跡A層上面から約30cm下がった面である。F-4グリッドから南東方向へ向かい、調査区外に延びる。長さ約11m、上端幅約1.1m、下端幅約0.8m、深さ約20cmである。壁はやや急に立ち上がり、底面はほぼ平坦だが、小さな凹凸がみられる。堆積土は2層に分けられ、①には木炭、焼土が多く混じる。

出土遺物は、土師壺口縁部片（ロクローミガキ・黒色処理）、甕体部片（ロクローロクロ）（不明—ナデ）各1点が出土している。

2号溝跡は、検出層位と出土遺物から平安時代かそれ以降に位置づけられる。



第20図 2号溝跡

5. 奈良時代の遺構と遺物

竪穴住居跡（第21・22図）

【位置と確認面】C・D・E-1・2・3グリッドに位置する。III層上面で確認されたが、北

半は削平されており、IV層上面で掘り方のみ確認された。

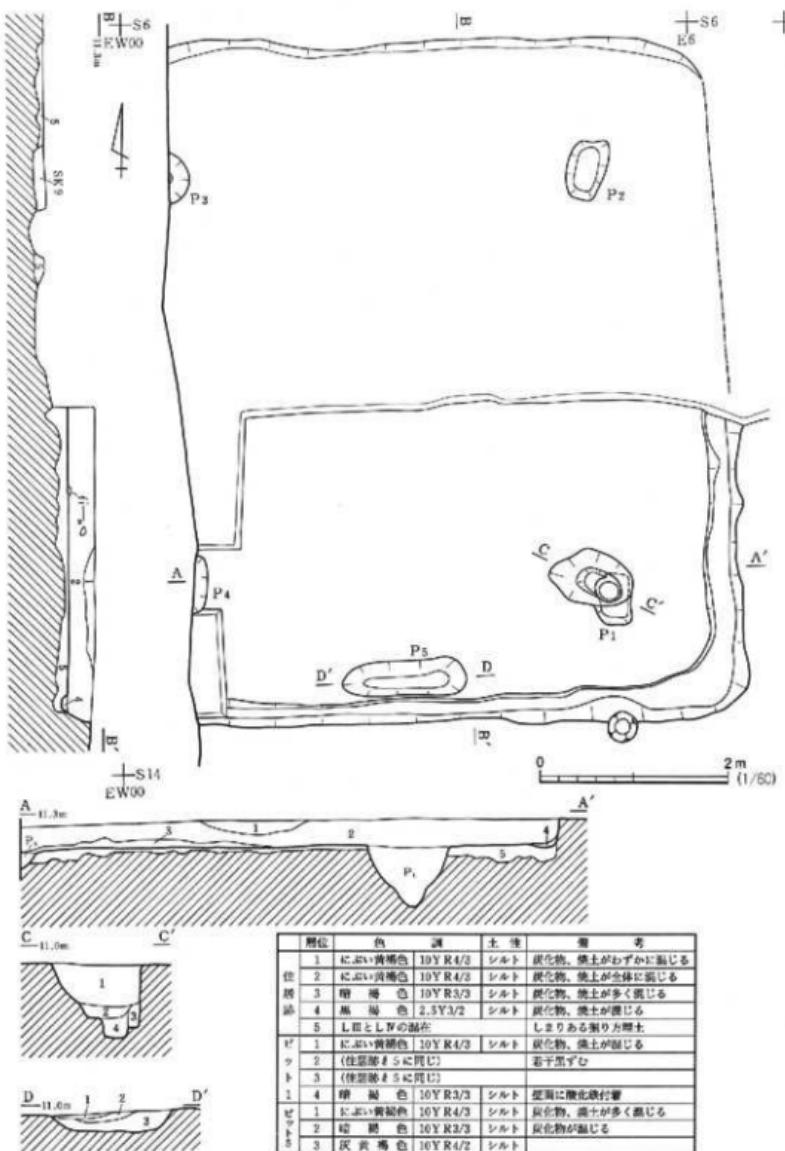
【重複】南半は2・3号掘立柱建物跡に切られ、北半は3～11号土坑に切られる。

【形状】削平された部分があるが、一辺約7.3mの正方形であったと考えられる。III層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は約25cmである。床面は掘り方埋土上面であり、堅くしまって平坦である。南壁と東壁の直下には周溝が巡る。幅20～60cm、深さ4～7cmである。床面および掘り方埋土中より4個のピットを検出した。柱痕跡を確認できたのはP₁のみであるが、4個のピットは対角線上に位置しているため、これらは柱穴であったと考えられる。カマドは調査部分に認められないこと、床面の南西部に焼土・木炭が散布していた点からみて、西壁南寄りにあった可能性が高い。他に、南壁中央部の周溝に接するように長楕円形の落ち込みが確認された。長軸132cm、短軸37cm、深さ24cmをはかる。出土遺物はない。

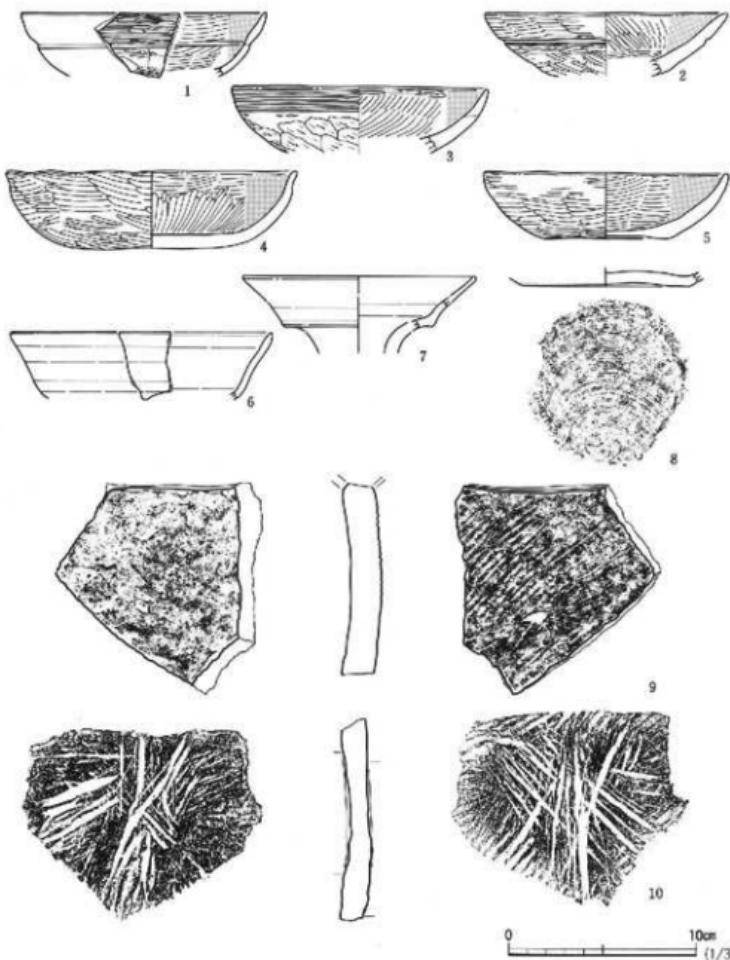
【堆積土】4層に細分された。ℓ1は中央部にのみ、ℓ2は南西部を除き南北全面の床面を覆う。ℓ3は南西部床面上にのみ認められ生活層と考えられる。ℓ4は周溝内堆積土である。これらは自然流入土による堆積層と考えられ、2層が床面まで厚く均一に堆積していることからみて、堆積速度は非常に速かったと推定される。住居跡掘り方底面は凹凸があり、全体に北に向って傾斜する。埋土は厚さ8～20cmで、堅くしまっている。

【出土遺物】(第22図) 床面上の出土は少なく、大部分は床面直上の2層下部から出土している。遺物には、土師器壺・甌・瓶・須恵器壺・甌などがあるが、破片が多く図示できたものは少ない。

土師器壺 1は体部外面の中央部に段を有するもので、内面にも外面に対応した軽い段が認められる。段の上は内弯気味に立ち上がる。調整は、段の下がヘラケズリ後ヘラミガキ、段の上が横ナデの後ヘラミガキで、内面はヘラミガキ・黒色処理である。2は体部外面の中央部に沈線をもつもので、内面に対応する段等はみられない。丸味をもつて体部から、そのまま内弯気味に立ち上がるが、沈線を境として上下の傾きの変化はない。調整は、外面は沈線の下がヘラケズリ後ヘラミガキ、沈線の上がヘラミガキで、内面はヘラミガキ・黒色処理である。壺としたが、高壺となる可能性もある。3は体部から丸味をもって立ち上がり、口縁部が内弯気味のものである。調整は、外面は口縁部が横ナデ、体部がヘラケズリで、内面はヘラミガキ・黒色処理である。4は平底風の丸底のもので、底部から丸味をもって立ち上がり、口縁部が小さく外反している。外面は、口縁部～体部上半がヘラミガキ、体部下半～底部がヘラケズリ後ヘラミガキで、内面はヘラミガキ・黒色処理である。5は丸底風の平底のもので、底部はヘラケズリにより意識的に作っている。底部から丸味をもって立ち上がり、口縁部が内弯気味である。調整は、外面は口縁部がヘラミガキ、体部～底部がヘラケズリ後ヘラミガキで、内面はヘラミガキ・黒色処理である。



第21図 1号住居跡



番号	器 物	器 様	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	幅(cm)	外 壁 調 査		内 壁 調 査	重 量
							外 壁 調 査	内 壁 調 査		
1	2 碗	土器 異形	(15.0)				ヨコナメ→ヘラミガキ、ヘラケズリ→ヘラミガキ		ヘラミガキ、褐色透塵	C 3 36-3
2	2 碗+鉢	土器 異形	(12.0)				ヘラミガキ、ヘラケズリ→ヘラミガキ		ヘラミガキ、褐色透塵	C 4 36-4
3	床 盆	土器 異形	(13.0)				ヨコナメ、ヘラケズリ		ヘラミガキ、褐色透塵	C 5 36-1
4	床 盆	土器 異形	(13.0)		4.2		ヘラミガキ、ヘラケズリ→ヘラミガキ		ヘラミガキ、褐色透塵	C 6 36-2
5	床 盆	土器 異形	(13.0)	(6.0)	3.5		ヘラケズリ→ヘラミガキ		ヘラミガキ、褐色透塵	C 7 36-5
6	2 碗	骨器 異形	(13.0)				ヨクロナメ、ヘラケズリ?		ヨクロナメ	E 16 36-5
7	2 碗	骨器 異形								E 17 36-7
8	2 碗	陶器 異形		8.8			円柱み切り無調査			E 18 36-8
9	2 碗	陶器 異形					平行クタキ目、横に削直		ナメ、横に削直	E 19 36-9
10	2 碗	陶器 異形					平行クタキ目、削直		ナメ、削直	E 20 36-10

第22図 1号住居跡出土遺物

須恵器 6 は壊の破片である。丸味をもつ体部下端から、ほぼ直線的に外傾している。8 は壊の底部で、径8.8cmである。回転糸切り痕（「前引き糸切り」）^註が認められる。7 は有段口縁の壊の一部と推定したが、高台付壺の高台部分の可能性もある。

研磨痕のある須恵器片 9・10 は須恵器壺の体部破片に研磨痕の認められるものである。9 は平坦な割れ口の両側縁端部に研磨痕がある。10 は外面に線状の研磨痕が走り、切り込まれ薄くなっている。金属性の底石として転用したものと考えられる。

註) 小川貴司 (1979) 「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』101 P.21~41

第6表 住居跡出土遺物破片集計表

微別	器種	部位	種	形	洞	蓋	1層	2層	焼	鉄	ビット1(個数)	ビット2(個度)	床	面	計
土 壺	口	横	ナ	テ	ミ	ガ	キ	(褐色)	1						1
	縫	ミ	ガ	キ	ミ	ガ	キ	(褐色)	4						4
	蓋	ミ	ガ	キ(無色)	ミ	ガ	キ(褐色)		3						3
	体	ミ	ガ	キ	ミ	ガ	キ(褐色)	1	7	2	1			11	
	脚	ミ	ガ	キ(無色)	ミ	ガ	キ(褐色)	1	1			2		4	
	部	不	明	ミ	ガ	キ(褐色)		3							3
陶 壺	身	手持ヘラズリ	ミ	ガ	キ(褐色)		2	4							6
	脚	不	明	ミ	ガ	キ(褐色)		2					1		3
	地	体部	ナ	テ	ミ	ガ	キ		1	1	1				3
	蓋	ナ	テ	ミ	ガ	キ		24	1	2					27
	部	体	ナ	テ	朝	毛	目		3						3
	脚	ナ	テ	ミ	ガ	キ	ヘラナ	デ	1						1
土 甕	不	明	ナ	テ				17							17
	小	明	不	明				8			4				12
	脚	ナ	テ	ミ	ガ	キ	ヘラナ	デ	1						1
	部	木	棗	茎				3							3
	合	全	断		4	83	5	3	6	1	102				
	病	日影	ナ	テ	ミ	ガ	キ		2						2
土 甕	口縫	ロ	クロ	ミ	ガ	キ		1							1
	腹部	ロ	クロ	ミ	ガ	キ							1		1
	体	平行クタキ	青	森	文		1	4					1		6
	脚	平行クタキ	ナ	テ			8	2					10		
	部	四輪ケズリ	ミ	ガ	キ		1						1		
	小	合	断		1	16	2	0	0	2	21				
土 甕	合	計	計		5	99	7	3	6	3	123				

掘立柱建物跡（第14図）

V層上面まで削平されているグリッドA列の部分でピットが4個検出された。掘り込み面はさらに上層である可能性が高い。P₁～P₃はA-5・6・7グリッドに位置し、東西方向に並んでいることより、調査区外に伸びる掘立柱建物跡の一部であると考えられる。柱間はP₁-P₂が3.75m、P₂-P₃が3.50mである。各ピットの形状は、P₁（掘り方：径40cmの円形・柱痕跡：径17cmの円形、深さ35cm）P₂（掘り方：38×45cm楕円形・柱痕跡：径20cm円形、深さ35cm）P₃（掘り方：30×44cm楕円形・柱痕跡：径20cm円形、深さ20cm）である。P₄はA-1グリッドに位置し、周辺にはピットがないことより調査区外へ伸びる建物跡の南東隅柱と考えられる。掘り方：40×60cm楕円形・柱痕跡：径20cm円形、深さ60cmであり、抜き取り痕跡がある。

遺物は第7表に示すとおりP₁・P₂より出土している。遺物の中にロクロ使用の土師器が出土していないこと、周辺から古墳時代遺構・遺物がみられないことから、P₁～P₃で示される

建物跡は奈良時代のものと考えたい。

第7表 柱穴出土遺物

ピット 1 出土遺物		ピット 2 出土遺物	
柱 痕 跡	土 壁 崩(环)——体部破片(ミガキ—ミガキ崩) 1点	柱 底 跡	土 前 崩(环)——体部破片(不 明—不 明) 3点 土 前 崩(要)——底部破片(不 明—ナ デ) 1点
掘り方埋土	底 壁 崩(环)——体部破片(ロクロ—ロクロ) 2点	掘り方埋土	土 前 崩(環)——体部破片(不 明—不 明) 1点 須 壁 崩(环)——口縫部破片(ロクロ—ロクロ) 1点 須 壁 崩(崩)——体部破片(平行クキ—ナデ) 1点

6. 繩文時代の遺構と遺物

(1) Ⅲ層上面検出の土坑

12号土坑（第24図）

E・F-2グリッドに位置する。長さ155cm、幅95cmの長方形である。深さは最大37cmで、壁面の立ち上がりは急である。底面は平坦で、長さ125cm、幅65cmの長方形で中央部にピットがある。堆積土は8層に分けられ、砂が主体であり壁近くに粘土が混じる。

底面のピットは20×15cmの楕円形で深さ60cmである。中央部には径7cm、長さ43cmの棒状の痕跡が認められる。

13号土坑（第24図）

E・F-3グリッドに位置する。長さ145cm、幅80cmの中央がくびれた長方形である。深さは最大78cmで、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、北東壁はオーバーハングする。底面は長さ130cm、幅70cmの長方形で中央部が盛り上がり3個のピットがある。堆積土は6層に分けられ、砂主体であり、壁と底面の近くに粘土が混じる。

底面盛り上がり部を截ち割ったところピットに対応して棒状痕跡が認められた。No.1は径9cm、長さ38cm、No.2・3は径6cm、長さ50cmである。掘り方は認められなかった。

14号土坑（第24図）

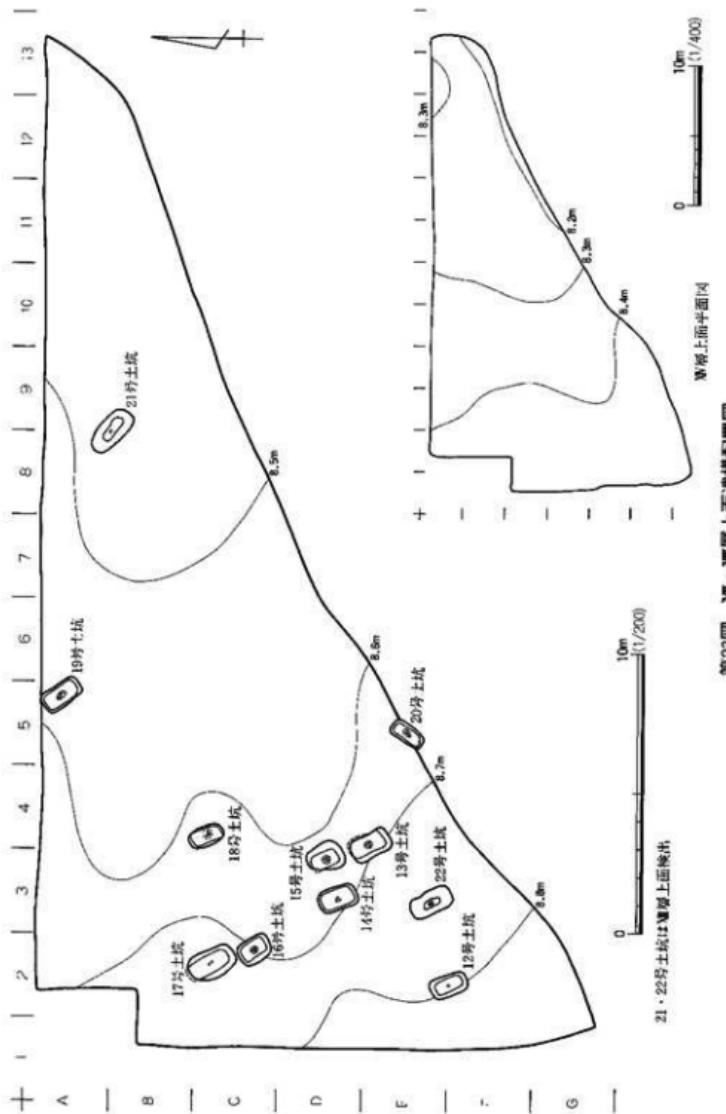
D-3グリッドに位置する。長さ140cm、幅80cmの長方形である。深さは最大45cmで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は長さ130cm、幅70cmの長方形で中央部が盛り上がり3個のピットがある。堆積土は6層に分けられ、壁近くと底面上に粘土と砂の混在層がある。

底面の盛り上がり部を截ち切ったところ、ピットに対応して棒状痕跡とそれらの掘り方が認められた。No.1は径5cm、長さ25cm、No.2は径5cm、長さ45cmであり、No.3は棒状痕跡が認められなかった。

出土遺物は、③より剥片が1点出土している。石材は珪質頁岩で、焼けはじけが著しい。

15号土坑（第24図）

D-3・4グリッドに位置する。長さ130cm、最大幅105cmのダルマ形である。深さは最大32cmで、壁は急に立ち上がり上端部はながらかになる。底面は長さ115cm、幅55cmの長方形で中央



第23図 XX・廻廊上面遺構配置図

部が5cm程盛り上がり、ピットが4個ある。堆積土は6層に分けられ、 ℓ 1～3は砂層、 ℓ 4は砂と粘土の混在層、 ℓ 5は堅く締まった粘土層、 ℓ 6が砂層である。土坑上端が大きく広がっていることからみて、 ℓ 5は壁が崩落した際の層と考えられる。

底面盛り上がり部を截ち割ったところ、ピットに対応した棒状痕跡とそれらの掘り方が認められた。棒状痕跡は、No.1は径3cm、長さ48cm、No.2は径3cm、長さ55cmで、No.3・4には認められなかった。No.1は東に傾く。掘り方は径32cmの円形で深さ55cmをはかる。

16号土坑（第25図）

C-2グリッドに位置する。長さ130cm、幅110cmの長方形である。深さは最大42cmで、壁面は急に立ち上がる。底面は長さ110cm、幅65cmの長方形で、中央部がわずかに盛り上がりピットが3個ある。堆積土は5層に分けられ、上層が砂、底面近くが砂と粘土の混在層である。

底面盛り上がり部を截ち割ったところ、ピットに対応して棒状痕跡とそれらの掘り方が認められた。棒状痕跡はNo.1が径5cm、長さ30cmでやや東に傾き、No.2は径4cm、長さ40cmでやや南に傾き、No.3は径6cm、長さ40cmでやや西に傾く。掘り方は径20cmの円形で深さ40cmである。

出土遺物は、 ℓ 5より剝片が4点出土している。いずれも焼けはじけが著しい。うち1点はD-2グリッドⅢ層出土剝片と焼けはじけ面で接合する。石材は珪質頁岩である。

17号土坑（第25図）

B・C-1グリッドに位置する。長さ175cm、幅115cmの楕円形である。深さは最大120cmであり、壁面はほぼ垂直に立ち上がり北壁はオーバーハングする。底面は長さ160cm、幅75cmの長方形で、中央部にピットがある。堆積土は15層に分けられ、砂が主体で壁近くや底面上には砂と粘土の混在層がある。

底面のピットは径25cmの円形で深さ50cmである。検出面に小孔が2個あり、截ち割ったところ小孔に対応して棒状痕跡が認められた。No.1は径4cm、長さ45cmでやや東に傾き、No.2は径6cm、長さ43cmである。

出土遺物は、 ℓ 12より土器片1点、剝片3点が出土している。土器は文様不明の細片で、厚さ約7mmである。剝片はいずれも焼けはじけがある。石材は珪質頁岩である。

18号土坑（第25図）

B・C-4グリッドに位置する。長さ140cm、幅110cmの楕円形である。深さは最大55cmで、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、北東隅と南西隅がオーバーハングする。底面は長さ130cm、幅70cmの長方形で、中央部が盛り上がりピットが3個ある。堆積土は7層に分けられ、砂が主体で壁近くに粘土が混じる。

底部盛り上がり部を截ち割ったところ、ピットに対応して棒状痕跡が認められ、それらの掘り方が認められた。棒状痕跡はNo.1が径4cm、長さ35cm、No.2が径5cm、長さ36cm、No.3が径

6 cm、長さ38cmである。いずれもほぼ垂直に立つ。掘り方は径20cmの円形で、深さ40cmである。

第19号土坑（第25図）

A - 5・6グリッドに位置する。長さ125cm、幅9cmの長方形である。深さは最大27cmで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は長さ120cm、幅85cmの長方形で、中央部がわずかに盛り上がり、ピットが3個ある。堆積土は6層に分けられ、砂が主体となる。

底面盛り上がり部を截ち割ったところ、ピットに対応した棒状痕跡と、それらの掘り方が認められた。棒状痕跡は、No.1が径7cm、長さ65cmでやや北に傾いており、No.2・3は径4cm、長さ20cm前後である。掘り方は径25cmの円形で、深さ65cmである。

出土遺物は、ℓ 4より土器片が1点出土している。文様不明で、厚さ約4mmである。

第20号土坑（第26図）

E - 5グリッドに位置する。南東部が1号河川跡に切られているが、長さ120cm、幅55cmの長方形と考えられる。深さは最大38cmで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は、長さ105cm、幅40cmの長方形で、中央部でわずかに盛り上がり、ピットが2個ある。堆積土は4層に分けられ、砂が主体である。

底部盛り上がり部を截ち割ったところ、ピットに対応する棒状痕跡とそれらが掘り方が認められた。棒状痕跡は残存状況が悪く、径2cm、長さ30cm程度と推定される。掘り方は径18cmの円形で深さ34cmである。

(2) Ⅲ層上面検出の土坑

21号土坑（第26図）

A・B - 8・9グリッドに位置する。長さ160cm、幅90cmの長楕円形である。深さは最大78cmで、壁面は急に立ち上がる。底面は、長さ100cm、幅30cmの長方形で、中央部にピットがある。堆積土は7層に分けられ、粘土が主体でわずかに砂層がはさまる。

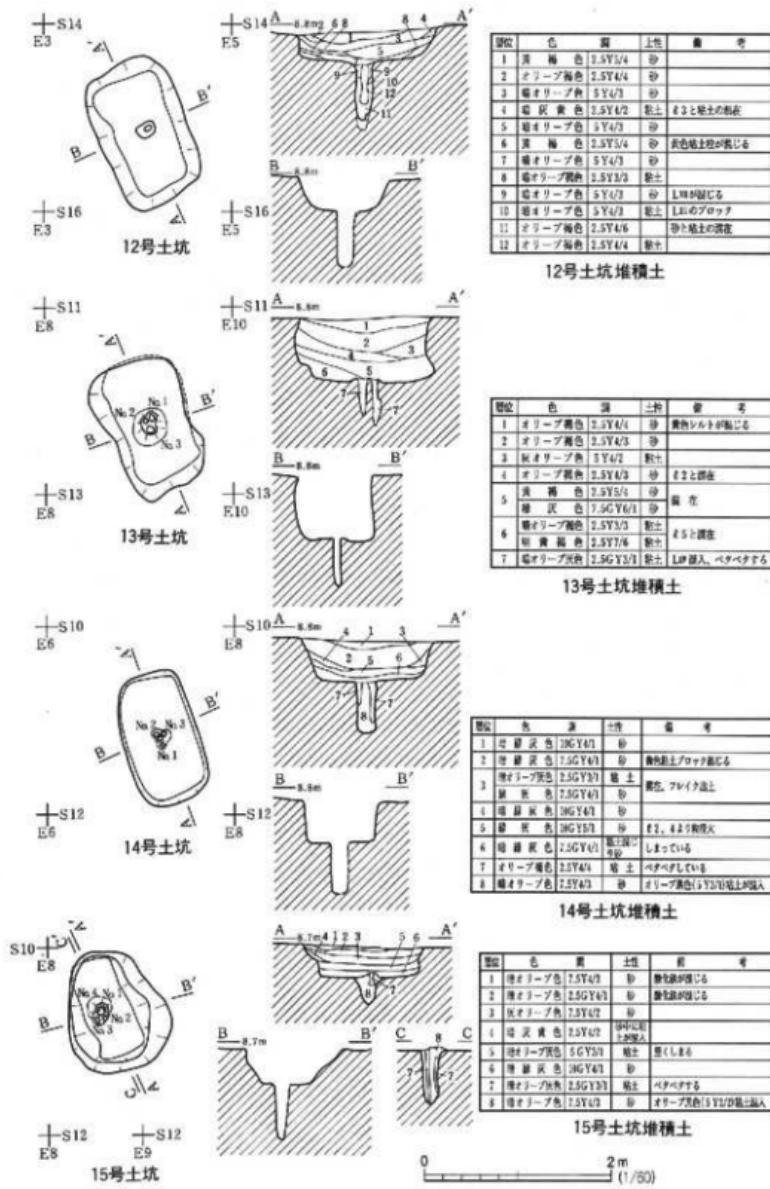
底面のピットは27×20cmの楕円形で、深さ15cmである。ピット内には石が埋まっており、棒状痕跡の有無は確認できないが、ピット底面には径4cm、深さ15cmの小孔がある。

22号土坑（第26図）

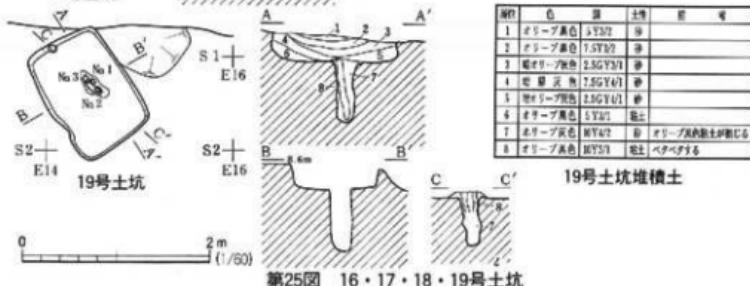
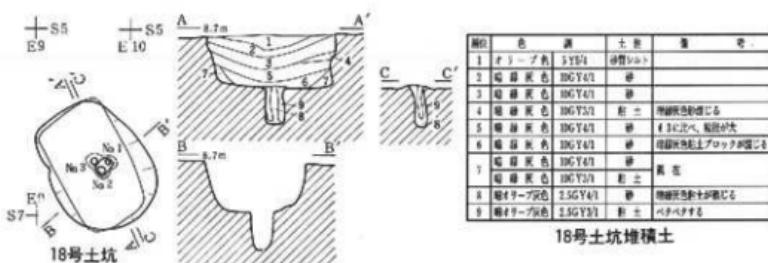
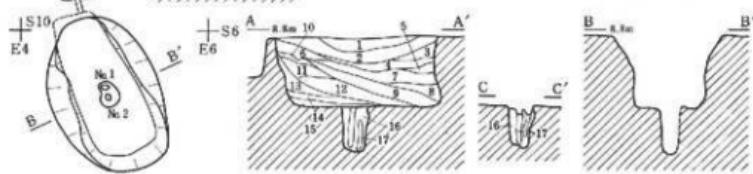
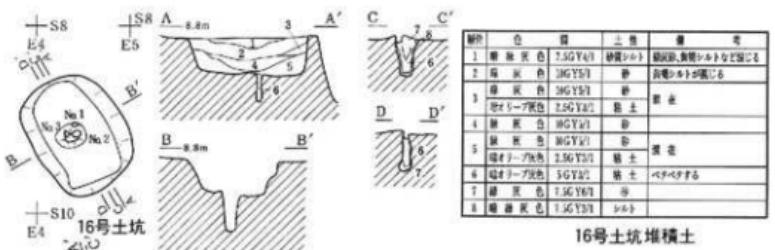
E・F - 3グリッドに位置する。長さ160cm、幅80cmの長楕円形である。深さは最大88cmで壁面は急に立ち上がる。底面は長さ70cm、最大幅30cmの不整形で、北側が一段下がりピットがある。堆積土は9層に分けられ、粘土が主体でわずかに砂層がはさまる。

底面のピットは径20cmの円形で深さ20cmである。ピット上面に小孔が3個あり、そのうち2個はピット底面まで続く。1つは径3cm、深さ30cm、もう1つは径3cm、深さ26cmである。

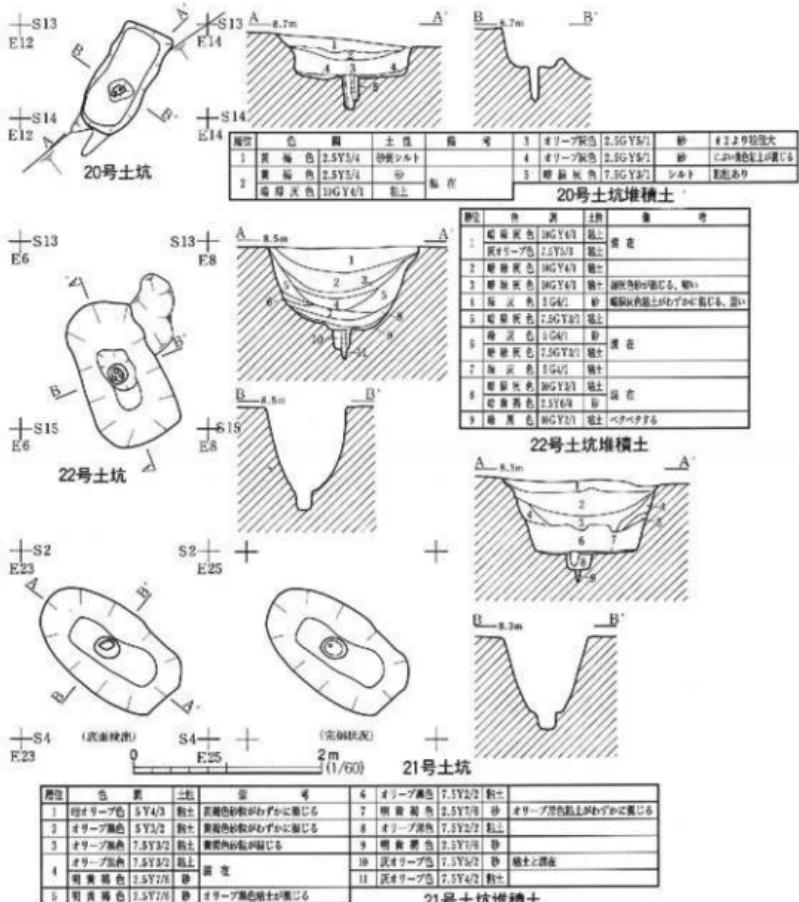
II章 調査の成果



第24図 12・13・14・15号土坑



第25図 16・17・18・19号土坑



第26図 20・21・22号土坑

第8表 土坑計測表

No.	手	面	形	長	輪	短	輪	底	面	形	長	輪	短	輪	深	さ	掘り方	形	括	幅	方向	
12	長	方	形	155	95	長	方	形	125	65	37	椭	円	形	20×15	60	1	N23°W				
13	長	方	形	145	86	長	方	形	130	70	78						3	N22°W				
14	長	方	形	140	80	長	方	形	130	70	45	円	形	?	24	55	3	N14°W				
15	グルマ	形	130	105	長	方	形	115	55	32	円	形	?	32	55	2~4	N24°W					
16	長	椭	円	130	110	長	方	形	110	65	42	円	形	?	20	40	3	N28°W				
17	椭	円	形	175	115	長	方	形	160	75	120	椭	円	形	?	26	50	2	N21°W			
18	椭	円	形	140	110	長	方	形	130	70	55	円	形	?	20	40	3	N28°W				
19	長	方	形	125	90	長	方	形	120	65	27	円	形	?	25	65	3	N33°W				
20	長	方	形	120	55	長	方	形	105	40	38	円	形	?	18	34	2?	N25°E				
21	椭	円	形	160	80	不	規	則	70	30	88	円	形	?	20	20	2or3	N21°W				
22	長	椭	円	160	90	長	方	形	100	30	78	椭	円	形	27×20	15	1	N56°W				

注1) センチメートル単位

注2) 方向は真北を基準とする。

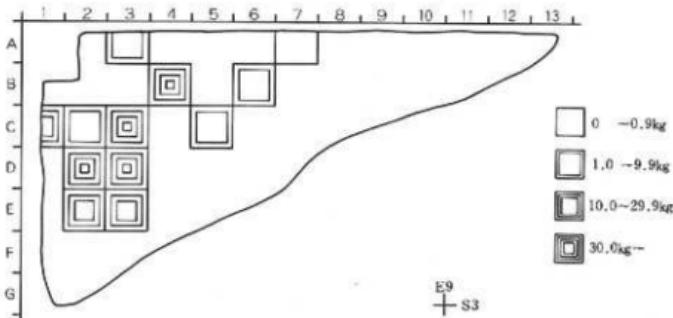
(3) XIII層上面の集石

XIII層を掘り下げるところ、XII層上面において礫が多量に出土した。しかし調査員の不手際により、記録をとる以前に礫が移動してしまった。そのため、グリッド単位で礫を採集したのみである。分布範囲は調査区の西半分で、特にC・D・E-2・3グリッドに集中する。礫は亜角礫、亜円礫が主で、重さは1~5kgにわたる。焼けた痕跡の明瞭なものはない。

集石には石核および礫石器が混じっている。第61図2は石核である。自然礫の平坦面を打面とし連続的な剝離を行っている。石材は砂岩である。第62図3・4は磨石であり、いずれも棱に磨面を持つ。第62図5、第63図1・2も磨石である。

まとめ

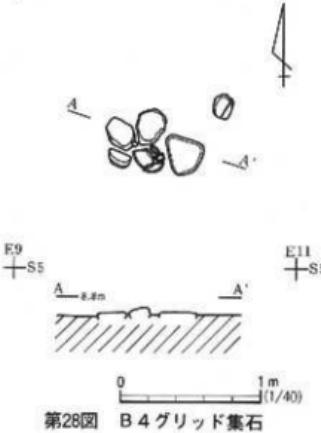
XII・XIII層は繩文早期の土器を包含する層である。XII層上面の遺構は繩文早期のものと考えられる。XII層上面の遺構は、繩文早期かそれ以前、後期前葉までのものと考えられる。



第27図 XII層上面礫平面分布図

第9表 LXIII上面検出礫集計表(礫石器を含む)

グリッド	0~69E	500~699E	700~899E	5,000E~	計	總重量(kg)
A3	3		3		6	6.1
A7		1			1	0.5
B4	2	1	5	2	10	30.6
B6			1		1	1.2
C1	2	3	1	6	16.7	
C2	1		2		3	4.4
C3	2		2	3	7	39.7
C5		1		1	4.7	
D2		1	7	4	12	45.0
D3	1	15	2	18	47.6	
E2			3	2	5	16.1
E3	1			6	14.4	
計	7	7	47	14	75	225.6



第28図 B 4 グリッド集石

7. 時期不明の遺構と遺物

ここでは、検出された遺構のうち所属時期に幅をもつものをとりあげた。

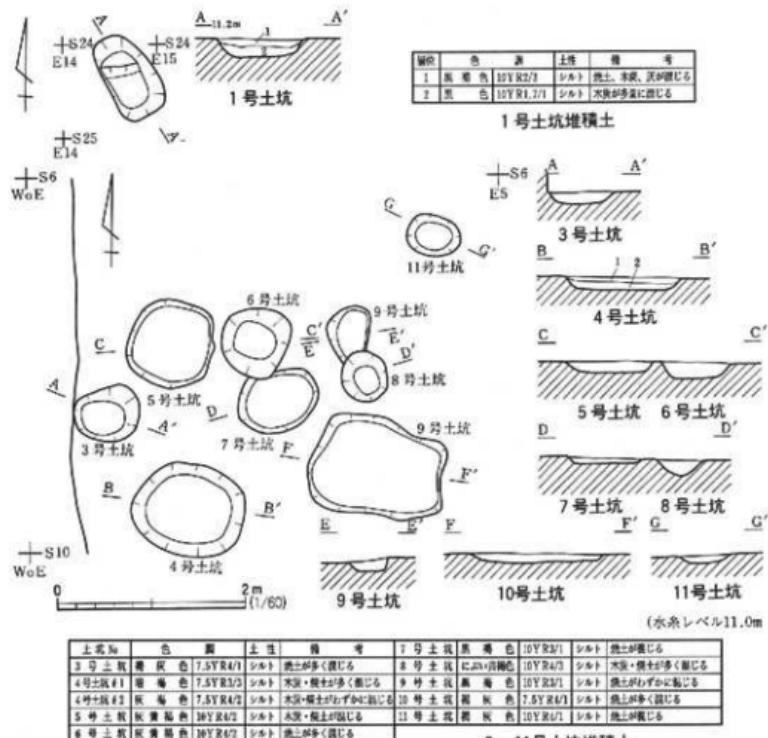
(1) 土坑

1号土坑(第29図)

I-5・6グリッドの1号河川跡A層上面で検出された。長さ92cm、幅52cmの隅丸長方形である。深さは25cmで壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸が多く、北半が高まる。堆積土は2層に分けられ、 ℓ 2には木炭が多量に混じる。出土遺物はない。

3~11号土坑(第29図)

C-D-1・2グリッドのV層上面まで削られている部分で、1号住跡跡掘り方を切って検出された。平面形、規模は下表に示す。堆積土は焼土・木炭を多く含んでいる。



第29図 1・3~11号土坑

第10表 3~11号土坑計測表

土坑	性質	下限	西壁	長(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	測定者	圖号
3号土坑	C 1 不整圓形	76	60	15				
4号土坑	D 1 圓丸或方形	120	97	14			8.1: 上部器皿底部 (ナゲーナデ)	
5号土坑	C 1 圓丸或方形	95	88	12			土器底盤底部 (ナゲーナデ)・底部 (木製底)・鋸口跡 (ヨコナザーガコチデ)	
6号土坑	C 1 圓丸形	75	—	18			7号を切る	
7号土坑	C 1 圓丸形	89	63	6				
8号土坑	C 2 圓門形	56	51	16			9号を切る	
9号土坑	C 2 圓円形	(54)	45	11				
10号土坑	C・D 2 不整圓或長方形	137	107	10			土器底盤底部 (ヘラケツリーミガキ: 黑色底盤)	
11号土坑	C 2 圓円形	55	44	9				

まとめ

1号土坑は、河川が埋めし終った近世以降のものである。3~11号土坑は1号住居跡を切っていることから、奈良時代以降のものである。

(2) 溝跡

1号溝跡 (第30・32図)

D-E-9~11グリッドの1号河川跡A層上面で検出された。北西-南東北向に延び、北西部を倉庫工事により、南東部を旧川により削られている。残存長8.2m、幅6m、深さ40cmで底面は平坦である。壁の立ち上がりはゆるやかである。西壁部分に、長さ7m、幅1.5m、深さ約20cmにわたり溝状に落ち込む部分があり、一時期古い溝の可能性がある。堆積土は2層に分かれしており、E 2が落ち込み部分の堆積土である。

出土遺物は、E 2より須恵器壺底部片 (第30図1)、焼瓦片 (2) が出土している。

3号溝跡 (第30図)

A-9・10グリッドのV層上面で検出された。南北方向にのび、南部は1号河川跡に切られ北部は調査区外に延びる。残存長3m、幅55cm、深さ50cmで、壁の立ち上がりは急である。堆積土は2層に分けられる。出土遺物はない。1次調査における4号溝跡に連続する可能性がある。

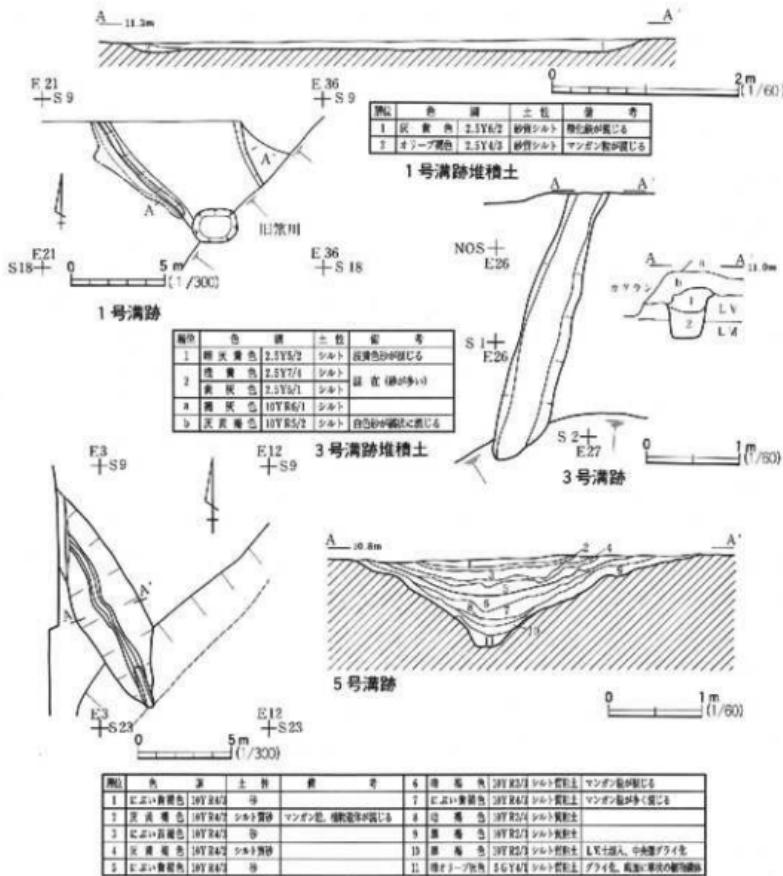
4号溝跡 (第14図)

A-4・B-3・C-2・D-1グリッドのV層上面で検出された。北東-南西方向であり、両端とも調査区外に延びる。1号住居跡掘り方より古く、5号溝より新しい。残存長約15m、最大幅50cm、深さ約15cmで、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層のみである (土色・土性不明)。出土遺物は縄文土器の細片4点である。

5号溝跡 (第30・32図)

D-1、E-F-G-1-2、H-2グリッドのV層上面で検出された。北西-南東方向で、南東部は1号河川跡に切られ、北西部は調査区外に延びる。4号溝より古く。残存長約10.5m、上端幅3.5m。断面形はV字形に掘った後さらに掘り下げる形で、掘り下げ部上端幅50cm、下

端幅30cmである。底面は北から南へ傾斜しており、北端の深さは87cm、南部で120cm、南端は一段掘り下げられ、深さは140cmである。堆積土は11層に分けられ、 ℓ 1～5がシルトと砂の互層、 ℓ 6～11がシルト質粘土である。底面には草状の植物遺体が貼り付いていた。出土遺物は、底面・壁面より縄文土器が出土している（第32図3～10）。文様の特徴から、縄文時代後期南境式にあたると考えられる。

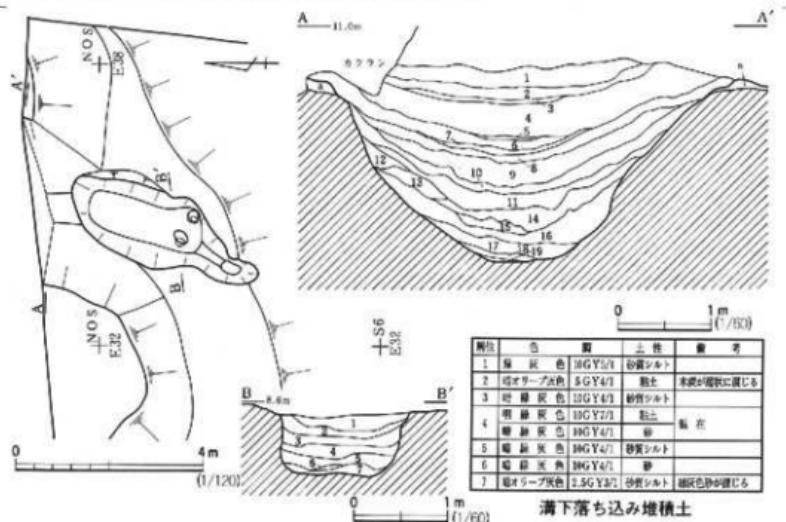


第30図 1・3・5号溝跡

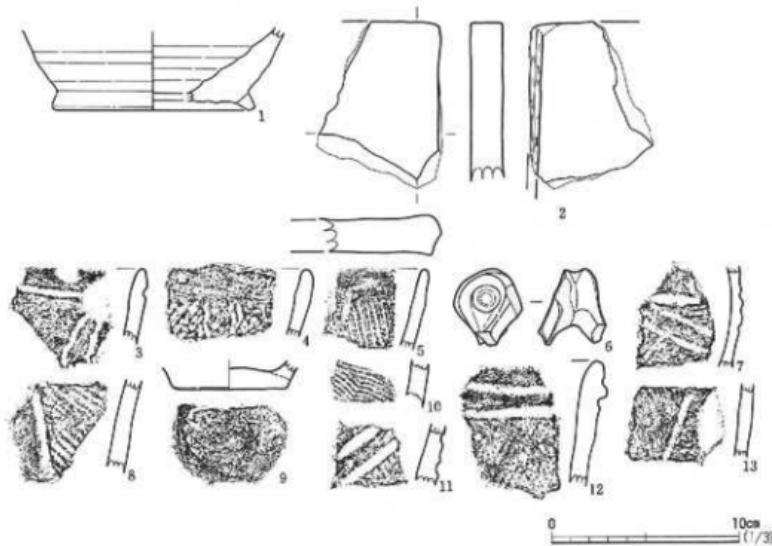
6号溝跡（第31・32図）

A・B-12グリッドに位置する。検出層位はV層より上の層であるが、搅乱を受けており基本層序と対応できない。ほぼ南北方向で、南部は1号河川跡に切られ、北部は調査区外である。残存長2m、上端幅3.5m、下端幅60cm、深さ2mである。堆積土は19層に分かれ、砂・シルト・シルト質粘土が細かく重なり合った状況である。底面の南部には長さ1.6m、幅1.6m、深さ60cmの楕円形の落ち込みがある。底面には2個のビットがあり、西が深さ60cm、東が30cmである。また、落ち込みから南へ溝状に延びる部分がある。堆積土は砂とシルトの互層で、7層に分けられる。

出土遺物は、溝の底面および落ち込み部より縄文土器が出土している（第32図11-12）。いずれも摩滅が著しい。縄文時代後期に所属すると考えられる。



層位	色	土性	標号	法
1	白 黄褐色	砂質シルト	6-102-12	(4) (60)
2	青褐色	シルト		
3	黄褐色	シルト		
4	黄褐色	シルト		
5	透明白色	砂	6-102-13	
6	透明白色	シルト		
7	透明白色	砂		
8	黄褐色	砂		
9	黄褐色	砂		
10	透明白色	シルト		
11	透明白色	シルト		
12	透明白色	シルト		
13	透明白色	シルト		
14	透明白色	シルト		
15	透明白色	シルト		
16	透明白色	シルト		
17	透明白色	シルト		
18	透明白色	シルト		
19	透明白色	シルト		
20	透明白色	シルト		
21	透明白色	シルト		
22	透明白色	シルト		
23	透明白色	シルト		
24	透明白色	シルト		
25	透明白色	シルト		
26	透明白色	シルト		
27	透明白色	シルト		
28	透明白色	シルト		
29	透明白色	シルト		
30	透明白色	シルト		
31	透明白色	シルト		
32	透明白色	シルト		
33	透明白色	シルト		
34	透明白色	シルト		
35	透明白色	シルト		
36	透明白色	シルト		
37	透明白色	シルト		
38	透明白色	シルト		
39	透明白色	シルト		
40	透明白色	シルト		
41	透明白色	シルト		
42	透明白色	シルト		
43	透明白色	シルト		
44	透明白色	シルト		
45	透明白色	シルト		
46	透明白色	シルト		
47	透明白色	シルト		
48	透明白色	シルト		
49	透明白色	シルト		
50	透明白色	シルト		
51	透明白色	シルト		
52	透明白色	シルト		
53	透明白色	シルト		
54	透明白色	シルト		
55	透明白色	シルト		
56	透明白色	シルト		
57	透明白色	シルト		
58	透明白色	シルト		
59	透明白色	シルト		
60	透明白色	シルト		
61	透明白色	シルト		
62	透明白色	シルト		
63	透明白色	シルト		
64	透明白色	シルト		
65	透明白色	シルト		
66	透明白色	シルト		
67	透明白色	シルト		
68	透明白色	シルト		
69	透明白色	シルト		
70	透明白色	シルト		
71	透明白色	シルト		
72	透明白色	シルト		
73	透明白色	シルト		
74	透明白色	シルト		
75	透明白色	シルト		
76	透明白色	シルト		
77	透明白色	シルト		
78	透明白色	シルト		
79	透明白色	シルト		
80	透明白色	シルト		
81	透明白色	シルト		
82	透明白色	シルト		
83	透明白色	シルト		
84	透明白色	シルト		
85	透明白色	シルト		
86	透明白色	シルト		
87	透明白色	シルト		
88	透明白色	シルト		
89	透明白色	シルト		
90	透明白色	シルト		
91	透明白色	シルト		
92	透明白色	シルト		
93	透明白色	シルト		
94	透明白色	シルト		
95	透明白色	シルト		
96	透明白色	シルト		
97	透明白色	シルト		
98	透明白色	シルト		
99	透明白色	シルト		
100	透明白色	シルト		
101	透明白色	シルト		
102	透明白色	シルト		
103	透明白色	シルト		
104	透明白色	シルト		
105	透明白色	シルト		
106	透明白色	シルト		
107	透明白色	シルト		
108	透明白色	シルト		
109	透明白色	シルト		
110	透明白色	シルト		
111	透明白色	シルト		
112	透明白色	シルト		
113	透明白色	シルト		
114	透明白色	シルト		
115	透明白色	シルト		
116	透明白色	シルト		
117	透明白色	シルト		
118	透明白色	シルト		
119	透明白色	シルト		
120	透明白色	シルト		
121	透明白色	シルト		
122	透明白色	シルト		
123	透明白色	シルト		
124	透明白色	シルト		
125	透明白色	シルト		
126	透明白色	シルト		
127	透明白色	シルト		
128	透明白色	シルト		
129	透明白色	シルト		
130	透明白色	シルト		
131	透明白色	シルト		
132	透明白色	シルト		
133	透明白色	シルト		
134	透明白色	シルト		
135	透明白色	シルト		
136	透明白色	シルト		
137	透明白色	シルト		
138	透明白色	シルト		
139	透明白色	シルト		
140	透明白色	シルト		
141	透明白色	シルト		
142	透明白色	シルト		
143	透明白色	シルト		
144	透明白色	シルト		
145	透明白色	シルト		
146	透明白色	シルト		
147	透明白色	シルト		
148	透明白色	シルト		
149	透明白色	シルト		
150	透明白色	シルト		
151	透明白色	シルト		
152	透明白色	シルト		
153	透明白色	シルト		
154	透明白色	シルト		
155	透明白色	シルト		
156	透明白色	シルト		
157	透明白色	シルト		
158	透明白色	シルト		
159	透明白色	シルト		
160	透明白色	シルト		
161	透明白色	シルト		
162	透明白色	シルト		
163	透明白色	シルト		
164	透明白色	シルト		
165	透明白色	シルト		
166	透明白色	シルト		
167	透明白色	シルト		
168	透明白色	シルト		
169	透明白色	シルト		
170	透明白色	シルト		
171	透明白色	シルト		
172	透明白色	シルト		
173	透明白色	シルト		
174	透明白色	シルト		
175	透明白色	シルト		
176	透明白色	シルト		
177	透明白色	シルト		
178	透明白色	シルト		
179	透明白色	シルト		
180	透明白色	シルト		
181	透明白色	シルト		
182	透明白色	シルト		
183	透明白色	シルト		
184	透明白色	シルト		
185	透明白色	シルト		
186	透明白色	シルト		
187	透明白色	シルト		
188	透明白色	シルト		
189	透明白色	シルト		
190	透明白色	シルト		
191	透明白色	シルト		
192	透明白色	シルト		
193	透明白色	シルト		
194	透明白色	シルト		
195	透明白色	シルト		
196	透明白色	シルト		
197	透明白色	シルト		
198	透明白色	シルト		
199	透明白色	シルト		
200	透明白色	シルト		
201	透明白色	シルト		
202	透明白色	シルト		
203	透明白色	シルト		
204	透明白色	シルト		
205	透明白色	シルト		
206	透明白色	シルト		
207	透明白色	シルト		
208	透明白色	シルト		
209	透明白色	シルト		
210	透明白色	シルト		
211	透明白色	シルト		
212	透明白色	シルト		
213	透明白色	シルト		
214	透明白色	シルト		
215	透明白色	シルト		
216	透明白色	シルト		
217	透明白色	シルト		
218	透明白色	シルト		
219	透明白色	シルト		
220	透明白色	シルト		
221	透明白色	シルト		
222	透明白色	シルト		
223	透明白色	シルト		
224	透明白色	シルト		
225	透明白色	シルト		
226	透明白色	シルト		
227	透明白色	シルト		
228	透明白色	シルト		
229	透明白色	シルト		
230	透明白色	シルト		
231	透明白色	シルト		
232	透明白色	シルト		
233	透明白色	シルト		
234	透明白色	シルト		
235	透明白色	シルト		
236	透明白色	シルト		
237	透明白色	シルト		
238	透明白色	シルト		
239	透明白色	シルト		
240	透明白色	シルト		
241	透明白色	シルト		
242	透明白色	シルト		
243	透明白色	シルト		
244	透明白色	シルト		
245	透明白色	シルト		
246	透明白色	シルト		
247	透明白色	シルト		
248	透明白色	シルト		
249	透明白色	シルト		
250	透明白色	シルト		
251	透明白色	シルト		
252	透明白色	シルト		
253	透明白色	シルト		
254	透明白色	シルト		
255	透明白色	シルト		
256	透明白色	シルト		
257	透明白色	シルト		
258	透明白色	シルト		
259	透明白色	シルト		
260	透明白色	シルト		
261	透明白色	シルト		
262	透明白色	シルト		
263	透明白色	シルト		
264	透明白色	シルト		
265	透明白色	シルト		
266	透明白色	シルト		
267	透明白色	シルト		
268	透明白色	シルト		
269	透明白色	シルト		
270	透明白色	シルト		
271	透明白色	シルト		
272	透明白色	シルト		
273	透明白色	シルト		
274	透明白色	シルト		
275	透明白色	シルト		
276	透明白色	シルト		
277	透明白色	シルト		
278	透明白色	シルト		
279	透明白色	シルト		
280	透明白色	シルト		
281	透明白色	シルト		
282	透明白色	シルト		
283	透明白色	シルト		
284	透明白色	シルト		
285	透明白色	シルト		
286	透明白色	シルト		
287	透明白色	シルト		
288	透明白色	シルト		
289	透明白色	シルト		
290	透明白色	シルト		
291	透明白色	シルト		
292	透明白色	シルト		
293	透明白色	シルト		
294	透明白色	シルト		
295	透明白色	シルト		
296	透明白色	シルト		
297	透明白色	シルト		
298	透明白色	シルト		
299	透明白色	シルト		
300	透明白色	シルト		
301	透明白色	シルト		
302	透明白色	シルト		
303	透明白色	シルト		
304	透明白色	シルト		
305	透明白色	シルト		
306	透明白色	シルト		
307	透明白色	シルト		
308	透明白色	シルト		
309	透明白色	シルト		



番号	遺 墓	層位	鉢 瓶	外 面 図 形				内 面 図 形				堆 積 層
				1	2	3	4	5	6	7	8	
1 1 号 溝	1 号 溝	底面	口クロナデ					口クロナデ				R21
2 1 号 溝	2 層	瓦	いはし					いはし				F1
3 5 号 溝	壁・底	沈跡	A29	35-8	9	10	5 号 溝	壁・底	深掘か (約 1 m)			A35
4 5 号 溝	壁・底	結束をもつ縄文 (R L R L R L)	A35	35-9	11	5 号 溝	壁・底	縄文か?、沈跡				A36
5 5 号 溝	壁・底	鈎状文 (L)	A31	35-10	11	6 号 溝	壁・底					A37 35-14
6 5 号 溝	壁・底	ナゾ	A32	35-11	12	6 号 溝下落ちこみ	壁・底					A38 35-15
7 5 号 溝	壁・底	縄文?、沈跡	A33	35-12	13	6 号 溝下落ちこみ	壁・底	縄文 (L R)、沈跡				A39
8 5 号 溝	壁・底	縄文 (R L) → 一回鋸→ミガキ	A34	35-13								

第32号 溝跡出土遺物

まとめ

1号溝跡は1号河川跡埋没後のものであり、近世以降のものである。3～5号溝跡の出土遺物の縄文土器であるが、検出層位が弥生時代以降の堆積層と考えられることから、弥生～奈良時代の幅におさまると考えられる。6号溝跡も出土遺物は縄文土器であるが、検出層位から弥生時代以降と考えられる。

なお、5号溝跡は断面形が「V」字形を呈する特徴を持っており、弥生時代の環濠集落の環濠の断面形に類似している。

第11表 5・6号溝出土遺物集計表

5 号 溝		6 号 溝	
部 位	文 標	部 位	文 標
口 線 部	無文、折り返し口縁	1 1	口 線 部
	縄文 (?) + 沈跡	1	沈跡
	沈跡	1	斜行縄文 (L R)
体 部	斜行縄文 (L R)	1	斜行縄文 (R L)
	縄文 (?)	14	羽状縄文 (R L)
	鈎状文	1	縄文 (?)
	無文	3	縄文 (?) + 沈跡
	(不明) + 刺文	4	無文
底 部		1 1	(不明)
		27	23
		16	

8. 各層の出土遺物

(1) III層出土遺物 (第34図1~3・第12表)

III層からは土師器・須恵器・弥生土器・縄文土器が出土している。細片が主で、図示できるものは3点のみである。第34図1は土師器壺である。丸味をもった胴部から外反する口縁部へ続く。調整は口縁部の内外面横ナデ、胴部外面へラケズリ、内面ナデである。2は須恵器の底部破片で、一次調査VI層出土の壺に類似する(第33図)。外面に平行する波状沈線が3段引かれる。底部には断面三角形の高台が付く。3は弥生土器片である。2の所属時期は底部のみであり判断しづらいが、1次調査の資料に似ることから、7世紀~8世紀前半の年代が与えられよう。1の土師器も、ほぼ同じ頃にあたると考えられる。他に出土している土師器は、ロクロ不使用のものである。

註) 古川一明氏より8世紀代の可能性が高いとの御教示を得た。

(2) IV層出土遺物 (第34図4・5)

IV層からは弥生土器片2点、縄文土器片5点が出土している。第34図4は外反する口縁部で口唇部が直立気味になる。外面に撚糸文(L)が施文される。縄文土器は撚糸文(R)のものと無文のものがある。

(3) V層出土遺物 (第34図6・7)

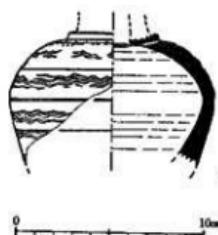
V層からは弥生土器、縄文土器が出土している。第34図6は弥生土器壺の上半部である。丸味をもった胴部から口縁部が外反するものである。口唇部と胴部には縄文(RL)が施文される。頭部には梢円形の刺突文が施される。内面調整は横方向のミガキである。所属時期は弥生時代中期楕形壺式かそれ以前にあたると考えられる。7は縄文土器深鉢である。破片で出土したものを図上で復元している。復元口径20.2cm、器高18.1cm、最大径21.3cm、底径5.3cmをはかる。口唇部には刻みがある。胴部には縄文(LR)が5段にわたり施文される。内面はミガキ調整がなされ、炭化物が付着する。所属時期は縄文時代晩期と考えられる。

(4) VI層出土遺物 (第35~40図・第13表)

VI層からは縄文土器454点、石器9点、土製品4点が出土している。

土器 小破片が大部分で器形がうかがえないため、文様に主眼をおき記述する。

口縁部資料: 第35図1~6は主に沈線による文様をもつものである。1・2は口縁部が「く」の字に屈曲し、突起をもつ。突起には2個の盲孔があり、胴部には沈線によるワラビ手文が描



第33図 一次調査 VI層出土須恵器

かれる。4は磨消し部をもつものである。

第35図7～14は隆線が施されるものである。8には逆「C」字状の貼付がされる。

第35図15～18、第36図1は撚糸文が施文されるものである。15は突起を有し、口縁部外面は粗く磨かれる。1は絡状体圧痕文と撚糸文が施文される。

第36図2・3は撚文が施文される。

第36図4～7は無文のもので、7は丁寧に磨かれており、胴部に細い沈線が見られる。

第36図8は綴の乱雑な沈線が引かれる。9は受け口状の特殊な器形のものである。10・11は渦巻状の貼付文である。

胴部資料：第36図12～18は縄文を地文とし沈線を施すものである。12・13には蛇行沈線が見られる。14～20は沈線間が磨消される。

第37図1～3は集合沈線が施される。

第37図4～7は隆線をもつものであり、いずれも横方向である。

第37図8・9は網目状撚糸文、10・11は撚糸文が施文される。

第37図12には条線文が見られる。

底部資料：第36図13は底径14cmをはかる大形のもので、木葉痕が残る。14には網代らしい痕跡が残る。

土製品 第38図1は小形の壺である。口縁部は小波状をなす。2～4は土製円盤である。

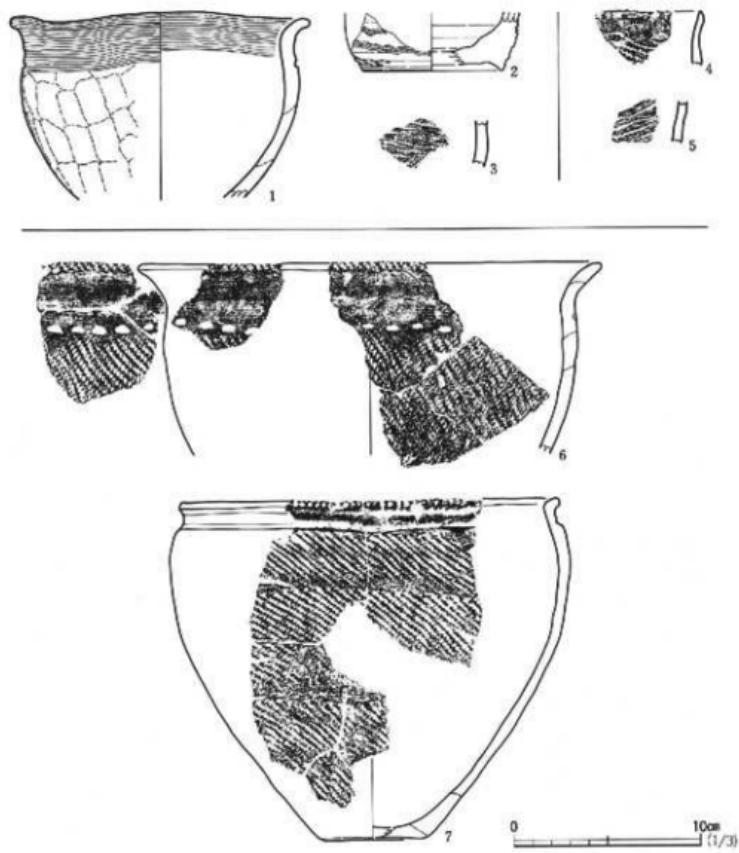
剝片石器 第39図1・2は石鎌であり、いずれも有茎である。3は不定形石器で、表面右縁に連続的な二次加工を施している。

礫石器 第39図4は扁平な礫の両端を打ち欠いたもので、石鎌と考えられる。第40図1は凹石で、表裏に凹み部をもつ。2～4は磨石である。5は石皿の破片であり、多孔質の凝灰岩を用いている。

まとめ VI層出土の土器は、「く」字状に屈曲する口縁部をもつものや、地文上に沈線によるワラビ手文、蛇行文などがあり、磨消縄文による文様が描かれる、といった特徴から、縄文時代後期前葉の南境式にあたると考えられる。同時期の資料は、当調査区の西の下ノ内浦2次調査区、山口遺跡、南の六反田遺跡で多量に出土していることから、笊川流域においても当時の人々が盛んに活動していたことがうかがわれる。土器に用いられる地文であるが、縄文と撚糸文の割合は点数ではほぼ1:1である。ただし、沈線が加えられたり磨消されたりする際の地文は縄文が大多数である。

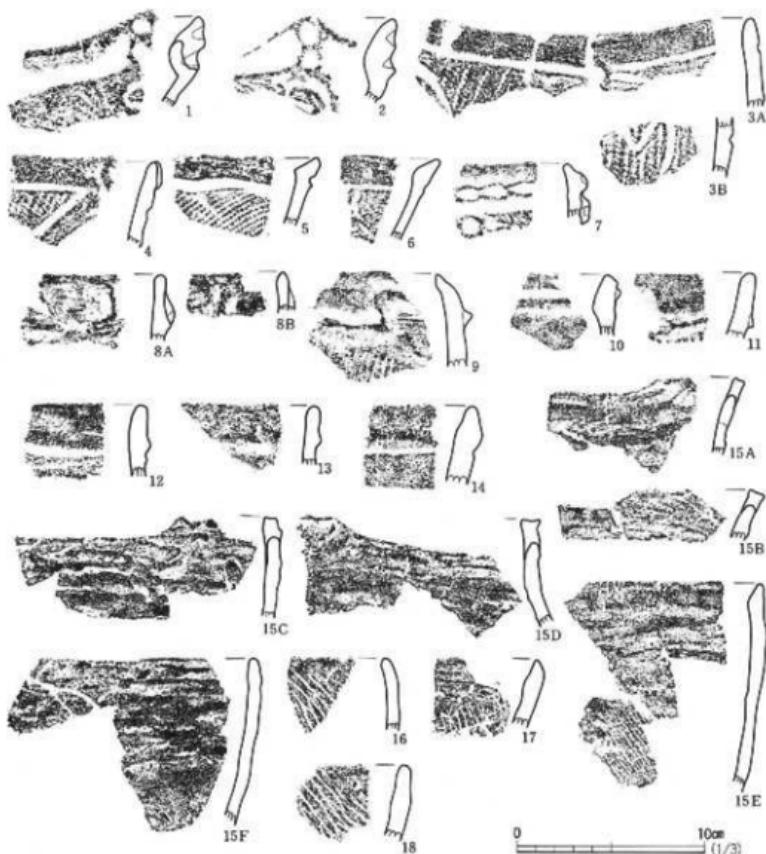
(5) VII層出土遺物（第39・41図）

VII層からは縄文土器10点、剝片石器1点が出土している。土器は地文のみのものと、無文のものである（第41図）。第39図5は不定形石器で、表面右縁にわずかに二次加工が施される。



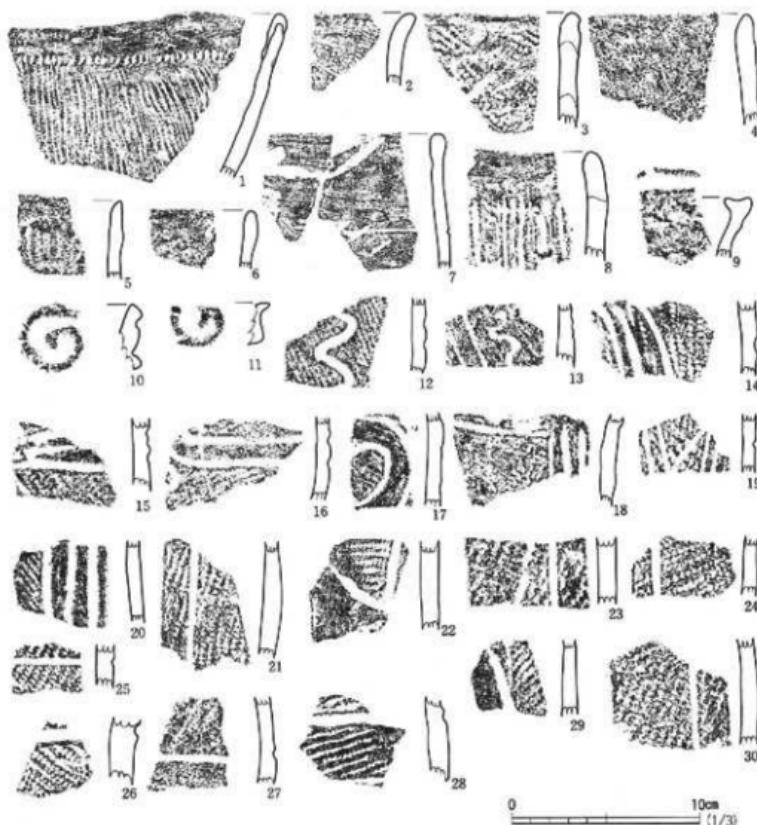
番号	層位	器種	法 盆	外 面 洞 縫	内 面 四 齒	セ 説 写 真
1	Ⅲ 横 土 泥 基 裂	口径: 15.9cm	ヘラケズリ→横ナグ		ナグ→横ナグ	C 8 36-12
2	Ⅲ 横 割部器質?	底径: 3.7mm	波状波縞文、糸切りか?		ハグロナグ	E 21 36-11
番号	層位	器種	文様・調 織	登 鮎 字 対	番号	層位
3	Ⅲ 横	格子文 (L)		B 7 36-13	6	V層
4	N層	格子文 (L)		B 8 36-14	7	V層
5	N層	格子文 (R)		B 9 36-15		

第34図 III・IV・V層出土遺物



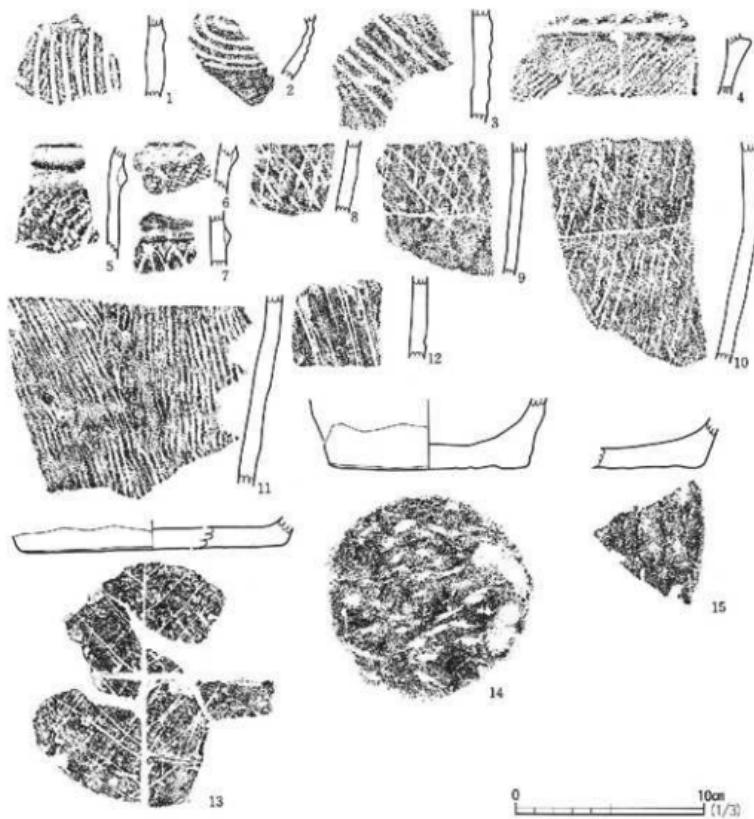
番号	器種	文様・測定	発見場所	写真	番号	器種	文様・測定	発見場所	写真
1	陶 細	尖底盤に直孔、縦文→沈縫	A41	37-2	10	陶 細	陰溝上に直孔	A50	
2	陶 細	尖底盤に直孔、沈縫（フタビ手文）	A42	37-3	11	陶 細	陰溝	A51	37-12
3A	陶 細	施文（L.R.?）→沈縫	A43	37-4A	12	陶 細	陰溝下に沈縫	A52	37-13
3B	陶 細	施文（L.R.）→沈縫（V字状文）	A43	37-4B	13	陶 細	陰溝	A53	
4	陶 細	円形點付文、施文（L.R.）→沈縫	A44	37-5	14	陶 細	陰溝下に沈縫	A54	
5	陶 細	施文（L.R.）→沈縫	A45	37-6	15	陶 細	突起あり、体部施文（R）	A55	37-14
6	陶 細	沈縫（蛇行）	A46	37-7	16	陶 細	施文（R）	A56	37-15
7	陶 細	施縫→斜溝、円形點付状、沈縫	A47	37-8	17	陶 細	圓点文	A57	
8	陶 細	施縫	A48	37-9-10	18	陶 細	圓点文	A58	37-17
9	陶 細	施縫、圓点文	A49	37-11					

第35図 VI層出土土器(1)



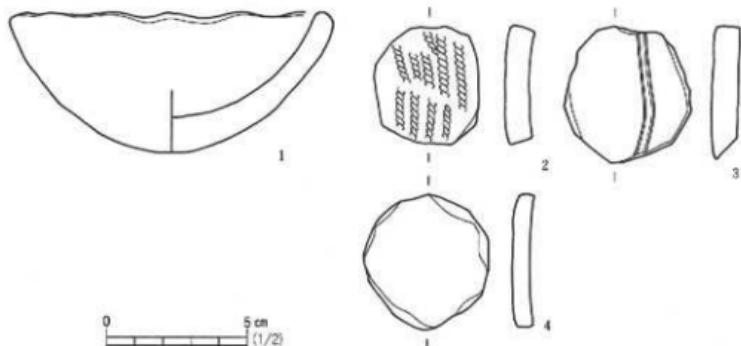
番号	器種	文様・調査	發達度	年	月	番号	器種	文様・調査	發達度		
1	深 裂	結状体在裏、撫奈文(R)	A59	37	15	16	深 裂	沈跡	A74	37	27
2	深 裂	椭文(L,R)一比較	A60	37	18	17	深 裂	沈跡・ミガキ	A75	37	28
3	深 裂	椭文(L,R)	A61	37	19	18	深 裂	沈跡、撫文	A76	37	29
4	深 裂	椭文	A62	19			深 裂	椭文(L)→比較	A77	37	30
5	深 裂	椭文か?	A63	20			深 裂	比較、撫文	A78	37	31
6	深 裂	椭文	A64	21			深 裂	椭文(L,R)→沈跡	A79	38	1
7	深 裂	Lガキ、比較	A65	37	20	22	深 裂	椭文(L,R)→沈跡	A80		
8	深 裂	粗い沈跡	A66	37	21	22	深 裂	沈文、沈跡	A81		
9	钵	椭文、受口口状	A67	24			深 裂	椭文(L,R)→比較	A82	38	2
10	深 裂	椭緑(椭文)	A68	37	22	25	深 裂	椭文(L,R)→沈跡	A83	38	4
11	深 裂	椭緑(椭文)	A69	37	23	26	深 裂	椭文(L,R)→沈跡	A84		
12	深 裂	椭文(L,R)一比較(施行)	A70	37	24	27	深 裂	椭文、沈跡	A85		
13	深 裂	椭文一比較(施行)	A71	37	25	28	深 裂	椭文(L,R)→沈跡	A86	38	3
14	深 裂	椭文(L,R)→沈跡→ナデ	A72	37	26	29	深 裂	椭文(L,R), 沈跡→Lガキ	A87		
15	深 裂	沈跡、撫文(L,R)	A73	30			深 裂	椭文(L,R)→沈跡→ミガキ	A88		

第36図 VI層出土土器(2)



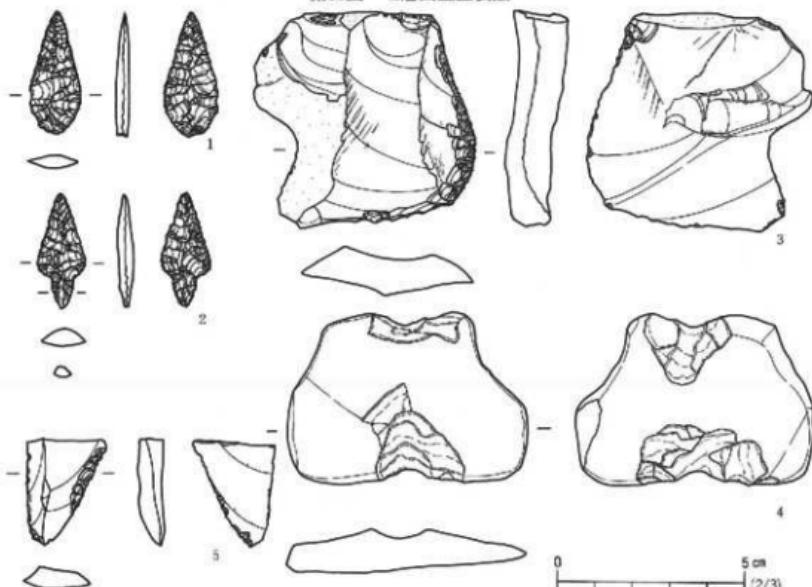
番号	器種	文様・施紋	登録写真番号	器種	文様・施紋	登録写真
1	陶 筋	楕文 (L,R) 一沈縫	A98	38-5	9	陶 筋
2	鉢	弦縫	A98	10	陶 鉢	網目状捺余文 (R)
3	陶 筋	弦縫	A98	11	陶 筋	網目状捺余文か?
4	深 筋	楕文 (L,R)	A92	12	陶 筋	38-6 (手造竹管か?)
5	深 筋	楕紋、楕文 (L,R)	A93	38-6	13	木炭灰
6	深 筋	楕紋、楕文 (L,R)	A96	14	14	網目状文か?
7	深 筋	網縫・網目状捺余文 (R)	A95	38-7	15	ナデ
8	深 筋	網目状捺余文 (R)	A96	38-8		A103

第37図 VI層出土土器(3)



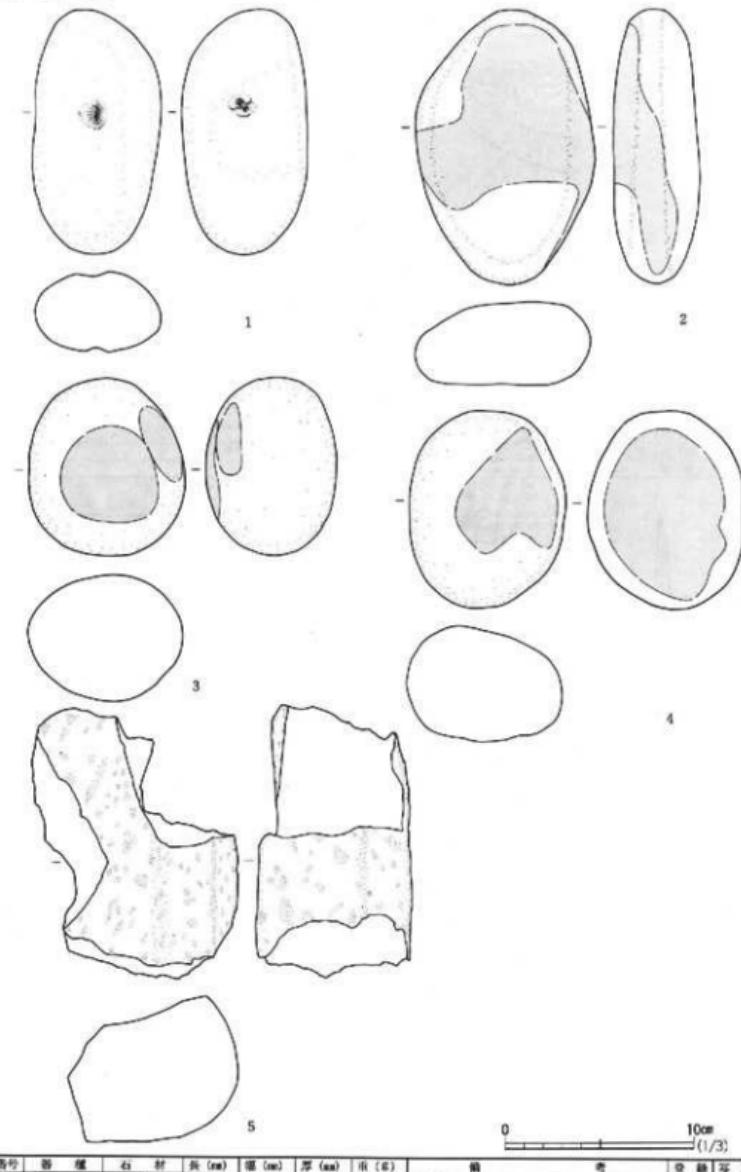
番号	器種	口径	底面	文様・調査			登録	年月
				文	様	調		
1	碗	11.5cm	5cm	波状口縁、内外側えがき			P 2	38-11
2	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (mm)	重 (kg)		登録	年月
3	土瓶円盤	42	37	8	58.1	調査 (L.R.)	P 3	38-12
4	土瓶円盤	48.5	45	9.5	23.2	波紋、網文の痕跡	P 4	38-13
4	土瓶円盤	48	44	6	15.4		P 5	38-14

第38図 VI層出土土製品



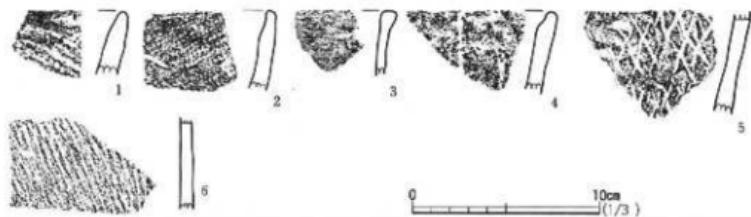
番号	層	器種	石片	長 (cm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (kg)	調査		登録	年月
								形	所		
1	青	石	黒 理質質物	33.1	13.5	3.7	1.4	单面砍砸、アスファルト付着		K16	38-20
2	青	石	黒 理質質物	30.8	12.8	4.1	1.1			K11	38-21
3	青	石	不規形 理質質物	55.0	69.4	14.4	44.7	刃部内60°		K12	38-22
4	青	石	安山岩	44.7	64	12.2	41.8			K13	38-23
5	青	石	不規形 (削成ハサキ)	31.2	19.5	6.8	2.5	上刃欠損、刃部角10°		K14	38-24

第39図 VI・VII層出土剥片石器



番号	形 種	石 材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	備 考	登 録 年 月
1	圓 石	凝灰角巖岩	130	66	43	530	四み2面	K15 38-25
2	磨 石	安山岩	146	94	45	800	磨面1面	K16 38-66
3	磨 石	花崗岩	95	82	67	740	磨面1面	K17 38-22
4	磨 石	安山岩	106	82	63	740	磨面?面	K18 38-28
5	石 器	凝灰岩	(144)	(100)	(77)	1,040	破損品	K19 38-29

第40図 VI層出土石器



番号	器種	文様・調査		番号	器種	文様・調査		番号
		登録	写真			登録	写真	
1	縄鉢	縄文 (L.R)	A104	38-15	4	縄鉢	無文	A107
2	深鉢	縄文 (L.R)	A105	38-16	5	深鉢	網目状縦文 (R)	A108
3	深鉢	ナゲ	A106	38-17	6	深鉢	網文	A109

第41図 VII層出土土器

第12表 III層出土土器集計表

土 器 部 (外面一面内面)			土 器 部			土 器 部			
环	口縁部	横ナゲ——ミガキ(黒色) 4 ミガキ ——ミガキ(黒色) 2 ミガキ(黒色) ——ミガキ(黒色) 5 不 明 ——ミガキ(黒色) 2	13	口縁部	ロクロ ——ロクロ 3 体 部	ロクロ ——ロクロ 1 肩 部	ロクロ ——ロクロ 1 ヘラ切り 縄目状切り持周縁手持ヘラケズリ 1	6	
	体 部	不 明 ——ミガキ(黒色) 12 手持ヘラケズリ ——ミガキ(黒色) 1		高 台 部	ロクロ ——ロクロ 4	高 台 部	ロクロ ——ロクロ 4		
	肩 部	ミガキ(黒色) ——ミガキ(黒色) 1 不 明 ——ミガキ(黒色) 3		口縁部	ロクロ ——ロクロ 3 平行タタキ ナゲ 22	口縁部	ロクロ ——ロクロ 4		
	横ナゲ	横ナゲ 12		肩 部 不明	不明	肩 部 不明	不明		
	口縁部	不 明 不 明 8		合 計			48		
	体 部	ナゲ ——ナゲ 3 ナゲ 不 明 25 ヘラケズリ ——ナゲ 8		糞 生 土 壁			2		
	高 部	木葉模 不 明 4 不 明 不 明 213		糞 文 土 壁			9		
	高 壁 固 部	朱影・「ハ」の字に大きく描く 1		糞 文 (LR)	1	糞 文 (RL)	3		
	高 壁 固 部	朱影・「ハ」の字に大きく描く 1		糞 文 (R)	1	糞 文 (R)	1		
	合 计	336		不 明	4				

第13表 IV層出土土器集計表

部位	文様・調査		部位	文様・調査		部位	文様・調査	
	点数	部位		点数	部位		点数	部位
体 部	無 文	17	427	糞 文 (?)	10	427	糞 文 (LR, 硬皮あり)	3
	沈 縫 文	14		糞 文 (L)	11		糞 文 (R)	26
	集 縫 文	7		糞 文 (R)	22		糞 目状縦文 (R)	1
	網 文	2		糞 目状縦文 (?)	1		糞 文 (?)	1
	縄 文 (LR) + 沈 縫 文	7		糞 文 (L)	24		糞 文 (ミガキ)	24
	縄 文 (R) + 沈 縫 文	5		糞 文 (R)	10		糞 文 (ナゲ)	10
	縄 文 (?) + 沈 縫 文	1		糞 文 (LR)	2		糞 文 (タタキ)	2
	糞 文 (?) + 沈 縫 文 + 腹 孔	1		糞 文 (R)	140		糞 文 (不 明)	140
	沈 縫 文 + 腹 孔	1		不 明	16		ミガキ	2
	沈 縫 文 + 沈 縫	1		不 明	6		不 明	6

(6) III・IV層出土遺物 (第42~63図)

III・IV層からは、縄文土器と石器が出土しているが、後述するように遺物は混在している可能性が高いため、両層あわせた分類規準を設けた。記述にあたってはとり上げ層位ごととする。

土器 第Ⅲ層より122点、第Ⅳ層より45点の計167点が出土している。いずれも破片で、器形をうかがえるものはない。また、摩滅しているものも少なくない。文様によりI～IV類に分けた。

I類 押型文の施文されるもの

II類 沈線文のみ施文されるもの

III類 条痕文の施文されるもの（沈線文もつものをIIIa、条痕のみのものをIIIbとする）

IV類 無文のもの

第Ⅲ層出土土器（第42～44図） 第42図1はII類土器で、平行沈線を境に斜位沈線が方向を変えて描かれる。2～5はIIIa類土器である。2は口唇部に刻みをもち、内外面には条痕が施され、外面には細沈線が引かれる。3は外面には沈線による三角形状の区画内に平行する沈線が引かれる。内面には条痕がみられる。4・5は外面に太く粗い沈線が斜位に引かれ、内面には条痕がみられる。6～10は条痕のみ施文されるIIIb類である。13～22はIV類の口縁部資料である。13・14は口唇部が尖り、その下がわずかに肥厚する形態である。他の口唇形状は、15～17・20～22は外削ぎ状で、18・19は丸みをもつ。20～22は比較的厚手のもので、大形品であろう。

それ以外に無文および文様不明の胴部片を図示した（第43～44図）。胴部片の厚さは4mm～14mmの幅があり、平均器厚は9mmである。第44図27・28は胴下部の破片とみられ、丸底が尖底を思わせるカーブを描く。29は平底の底部片である。

土器胎土はいずれも砂粒を含む。植物繊維は含むものもあるが、含有量はごく微量である。第Ⅳ層出土土器（第45・46図） 第45図1はI類土器である。外面に平行線状文が横走し、2本一組の縦割文の間に重層山形文が描かれる。平行線状文と重層山形縦割文が同一原体上のものか別のものは不明である。内面はナデ調整。器厚は約9mmで、胎土は砂粒を多く含むが繊維は含まない。2～4はIV類土器である。口唇部形状は、2・4は丸みをもち、3は尖る。

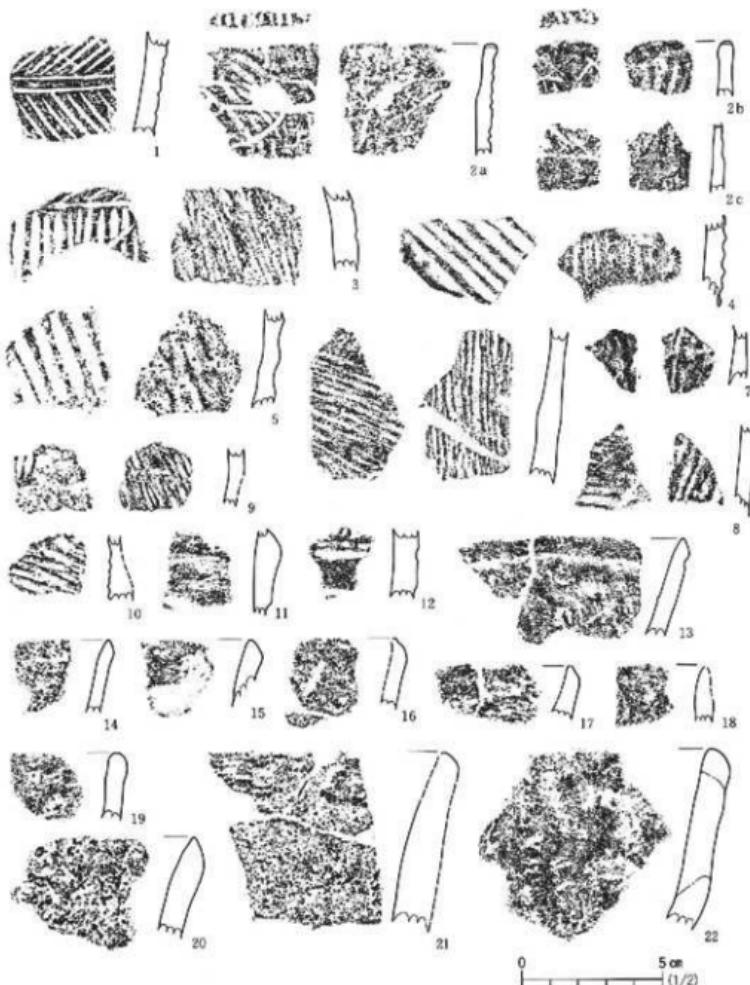
他に無文および文様不明の破片がある（第45図5～22、第46図）。胴部片の器厚は4mm～14mmの幅があり、平均は8mmである。第45図22は器厚13mmをはかる大形のものである。第46図5・6は平底の底部資料である。胎土、繊維については第Ⅲ層同様である。

石器 石器は第Ⅲ層より87点、第Ⅳ層より44点、計131点が出土している。ここでは、まず分類規準、計測規準を明らかにし、次に層位ごとに記述する。

分類 石鎌・尖頭器・石匙を定形石器としてとり出し、それ以外のものを不定形石器として刃部の形状から細分した。

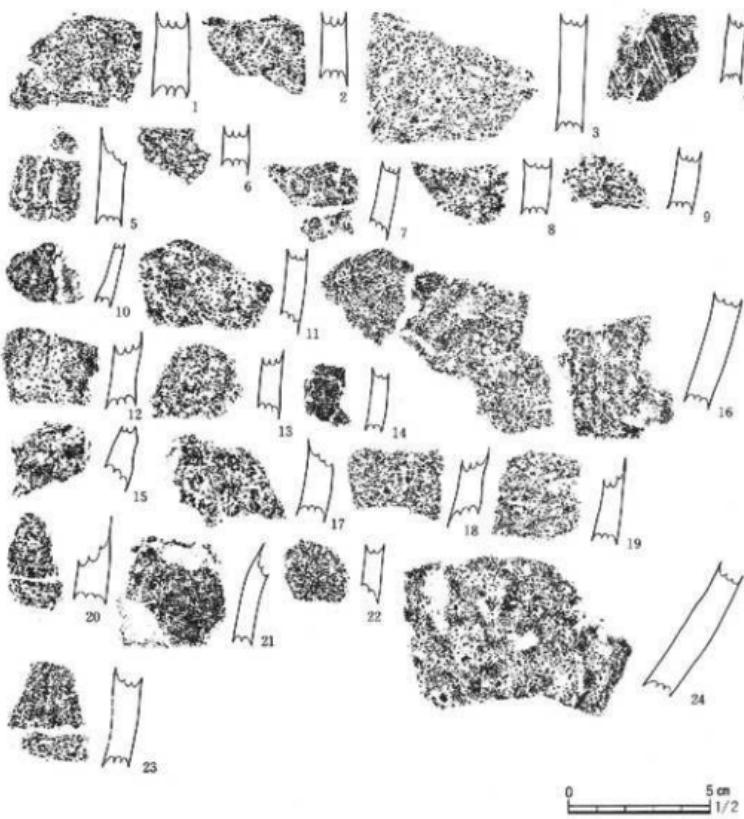
石鎌 尖端の作り出しが明瞭で、基部整形がなされており、かつ両縁が完全に整形されている剥片石器。その形態からI類：凹基のもの、II類：平基のもの、III類：細長いもので基部が雁又状のもの、IV類：その他、に分類する。

尖頭器 石鎌と同様の調整を施すが、最大長が4cmをこえるもの



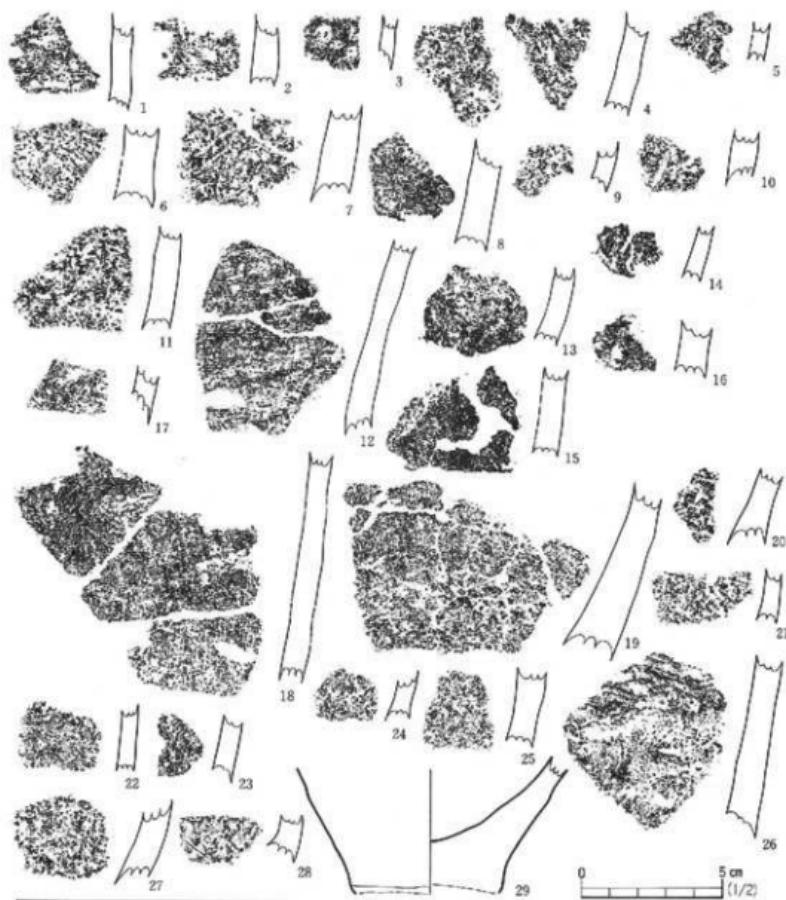
番号	層位	グリッド	文様・調査	黒 細 真 織	層位	グリッド	文様・調査	黒 細 真
1	Ⅲ	B 3	(外) 沢縞、(内) モザイク?	A102 39-1 11	Ⅲ	A11	(外) 沢縞? (内) モザイク?	A156 39-13
2 a	Ⅲ	A11	口唇重み、(内) 条縞-横縞 (内) 条縞	A157 39-2 12	Ⅲ	B 2	(外) 沢縞 (内) ナゾ?	A140 39-12
2 b	Ⅲ	A11	口唇重み、(内) 条縞-横縞 (内) 条縞	A158 39-3 13	Ⅲ	D 2	(外) 沢縞、ケツリ	A269 39-14
2 c	Ⅲ	A11	(内) 条縞-横縞 (内) 条縞	A159 39-4 14	Ⅲ	E 5	(外) 沢縞	A230 39-15
3	Ⅲ	B 6	(外) 沢縞 (内) 条縞	A163 39-5 15	Ⅲ	C 1		A183
4	Ⅲ	A10	(外) 沢縞 (内) ケツリ de 条縞	A155 39-6 16	Ⅲ	D 5		A215
5	Ⅲ	B 8	(外) 沢縞 (内) 条縞	A176 39-7 17	Ⅲ	F 2	(外) ケツリ (内) ナゾ?	A234 39-16
6	Ⅲ	C 6	(外) 沢縞 (内) 条縞	A203 39-8 18	Ⅲ	A 2	麻縞紋鑑	A151 39-17
7	Ⅲ	B 10	(外) 沢縞 (内) 条縞	A179 39-9 19	Ⅲ	C 8		A199 39-18
8	Ⅲ	B 10	(外) 沢縞 (内) 条縞	A178 39-10 20	Ⅲ	E 1		A224 39-19
9	Ⅲ	B 9	(外) 沢縞 (内) 条縞	A177 39-11 21	Ⅲ	C 6	(内) ナゾ?	A205 39-20
10	Ⅲ	A 4	(内) 条縞	39-12 22	Ⅲ	E 5	(外) モザイク (内) モザイク	A231 39-21

第42図 VII層出土土器(1)



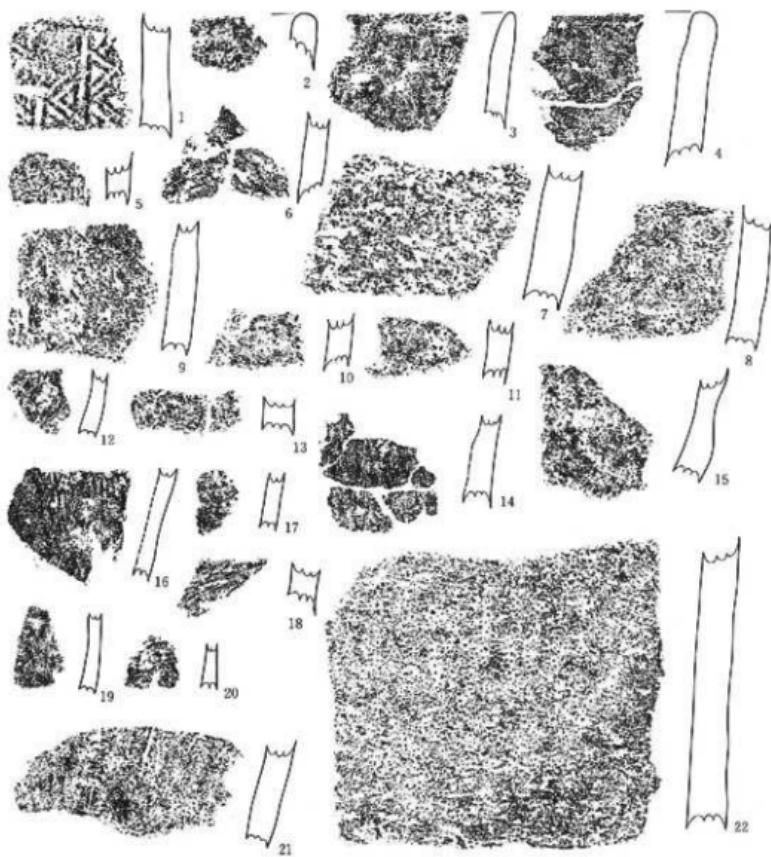
番号	層位	グリッド	文様・調査	形	写真	番号	層位	グリッド	文様・調査	形	写真
1	III	A 6		A153	13	■	C 1				A184
2	III	A 7		A154	26-23	14	■	C 3	(外)ミガキ		A186
3	III	B 7		A164		15	■	C 3	(内)ナデ?	(P)	A187
4	III	B 7	(外)ミガキ	A166	26-22	16	■	C 3-D 3	(内)ナデ?	(P)	A188 39-26
5	III	B 7		A167		17	■	C 5	(P)ミガキ		A190
6	III	B 7		A170		18	■	C 5	(P)ミガキ?		A191
7	III	B 7	(内)ナデ?	A172		19	■	C 6	(内)ナデ?		A192
8	III	B 8		A173		20	■	C 6			A193
9	III	B 8		A174		21	■	C 7	(内)ナデ?	(P)	A194 39-24
10	III	B 8	(外)ミガキ?	A175		22	■	C 7	(内)ナデ?	(P)	A195 39-25
11	III	B 11	(外)ミガキ	A180		23	■	C 8	(P)ミガキ調査用具		A196
12	III	B 11		A181		24	■	C 8	(内)ナデ?		A197

第43図 VII層出土土器(2)



番号	層位	グリッド	文 織 + 調査	推定	可 見	断面	層位	グリッド	文 織 + 調査	推定	可 見
1	Ⅲ	C 8	(内)ナデ?	A198	16	Ⅹ	E 1				A221
2	Ⅲ	C 8	(内)ナデ?	A209	17	Ⅹ	E 1	(内)ナデ?織部微見			A222
3	Ⅲ	C 8		A201	18	Ⅹ	E 1+E 2	(内)ミガキ (内)ミゼキ織部微見	A223	40-1	
4	Ⅲ	C 8	(内)ナデ?	A202	19	Ⅹ	E 2	(内)ナデ? (内)ミゼキ織部微見	A225	39-25	
5	Ⅲ	C 8		A204	20	Ⅹ	E 2			A227	
6	Ⅲ	D 1	織部微見	A206	21	Ⅹ	E 4			A228	
7	Ⅲ	D 2	(内)ミガキ (内)ナデ?	A207	22	Ⅹ	E 4	(内)ナデ?		A229	
8	Ⅲ	D 2		A211	23	Ⅹ	E 5			A232	
9	Ⅲ	D 3		A212	24	Ⅹ	F 3	(内)ミガキ (内)ミガキ		A236	
10	Ⅲ	D 4	(内)ナデ?	A223	25	Ⅹ	F 3	(内)ナデ? (内)ナデ?		A237	
11	Ⅲ	D 4	(内)ナデ?	A234	26	Ⅹ	F 3			A238	39-30
12	Ⅲ	D 5	(内)ミガキ (内)ナデ?織部微見	A216	29-32	27	Ⅹ	B 2 (内)ミガキ		A241	40-2
13	Ⅲ	D 5	(内)ナデ? (内)カゲリ?	A217	28	Ⅹ	D 2			A242	40-3
14	Ⅲ	D 5	(内)カゲリ? (内)ナデ?織部微見	A219	29	Ⅹ	E 2			A225	40-41
15	Ⅲ	D 7	(内)ミガキ	A220	39-29						

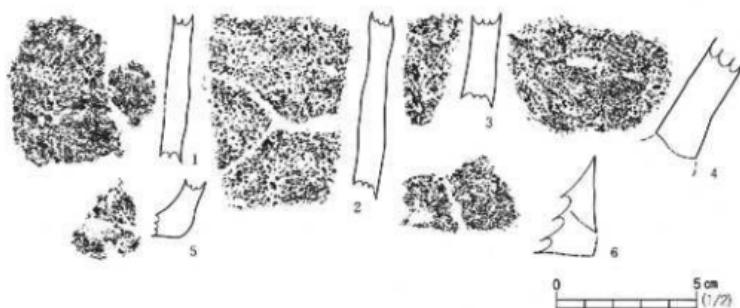
第44図 XII層出土土器(3)



0 5 cm
(1/2)

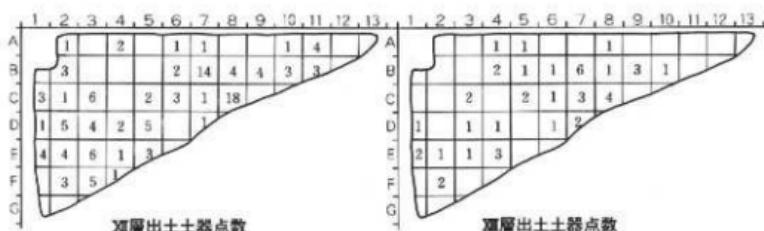
番号	地名	グリッド	文 標・調 集	施 繖	字 真 型 号	露 空	グリッド	文 標・調 集	施 繖	字 真
1	三	C 8	(外)神社文 (内) ナデ	A261	40-5 12	三	B 9			A253
2	三	B 4	(外)ナデ? (内) ナデ	A243	40-6 13	三	C 6			A257
3	三	B 9	(外)ナデ? (内) ナデ織物痕	A252	40-7 14	三	C 6	(外)ケズリテ→ミガキ?		A258 40-14
4	三	D 7	(外)ミガキ? (内) ミガキ?	A267	40-8 15	三	C 7	(外)ナデ? (内) ミガキ?		A259 40-13
5	三	A 4	(外)ナデ?	A240	40-9 16	三	C 7	(外)ケズリテ→ミガキ		A260 40-12
6	三	A 5	(外)ミガキ? (内) ナデ?織物痕	A241	40-10 17	三	C 6			A261
7	三	A 6	(内)ミガキ	A242	40-9 18	三	D 1	(内)ミガキ?		A263
8	三	B 5	(内)ナデ?	A245	40-11 19	三	D 3	(内)ナデ?		A264
9	三	B 7	(内)ナデ? (外) ミガキ?	A248	40-10 20	三	D 4	(内)ナデ? 織物痕		A265
10	三	B 7	(外)ミガキ? 1) 同一固体	A249	40-11 21	三	D 6	(内)ミガキ		A266 40-16
11	三	B 7		A250	40-12 22	三	E 1	(内)ケズリテ		A268 40-15

第45図 三層出土土器(1)



番号	層位	グリット	文様・調査	色	編	年	地質	層位	グリット	文様・調査	色	編	年
1	堆	E.3	(P)E.1ガキ? 鋸歯微波	A.260	40-17	4	XII	E.4	(P)E.1ガキ?	A270	40-18		
2	堆	E.4		A.271		5	■■	B.6	(P)E.ナフ?	A286	40-19		
3	堆	F.2		A.272		6	■■	B.7	(P)E.ナフ?	A292	40-20		

第46図 XII層出土土器(2)



第47図 土器平面分布図

石匙 両側縁から作出される凹部によりつまみ部を有するもの

不定形石器 主に長さ 2 mm 以上の二次加工が施されるもの

I類 連続した規則的な二次加工により刃部が作出されるもの

I A 表裏両面から二次加工が施されるもの

I B 片面加工が全周に及ぶもの

I C 片面加工が一～二側縁に施されるもの

I D 二次加工により尖頭部を作出するもの

I E 折れ面に二次加工が施されるもの

II類 両極剥離痕をもつもの

III類 刃部の平面形が鋸齒状になるもの

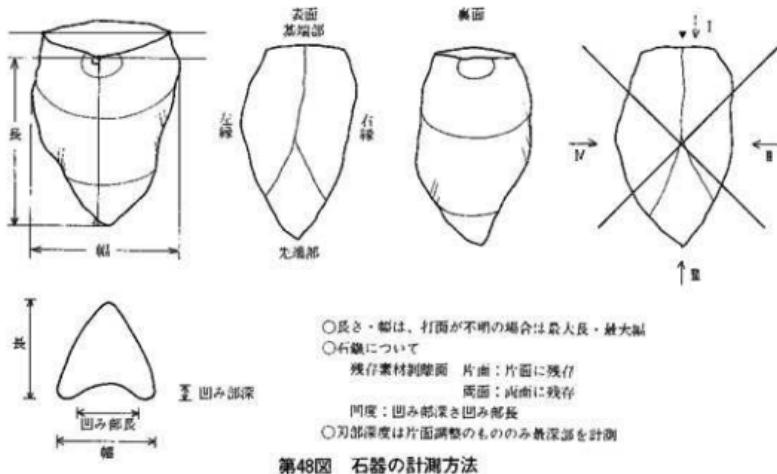
IV類 凹部を作出するもの

二次加工ある剝片 上記以外の二次加工をもつもの

不明石器 二次加工をもつもののうち、破損などによって本来の形を失っているもの

微細剝離痕ある剝片 連続した微細剝離痕（長さ 2 mm未満）をもつもの

砾石器は、凹部あるものを凹石、磨面あるものを磨石、凹部と磨面をあわせもつものを磨凹石とする。



第48図 石器の計測方法

Ⅲ層出土石器（第49～55・59～62図）

石鎌（第49図1～12） 12点出土している。いずれも無茎で、1～5がI類、6～9がII類、10がIII類、11がIV類にあたる。

石匙（第49図13） 横長剝片を素材とし、側縁につまみを有する。表面端部、腹面基部に対照的な二次加工が施される。

不定形石器 I A類（第49図14・15） 14は裏面左縁に両面より、右縁に表面より二次加工が施される。15は大形の剝片を素材としており、表面右縁に両面加工、左縁に片面加工がされる。

不定形石器 I B類（第50図1） 表面全周に二次加工が施され、橢円形に成形される。刃部角は大きい。

不定形石器 I C類（第50図2～6、第51図1～10、第52図1～3） 第50図2・4～6は1側縁に、3は側縁から端部にかけ二次加工が施される。第51図1は1側縁に丸みをもつ刃部をもつ。

2・3は端部を欠くが、直線的な刃部をもつ。4は火熱により破損しているが、9とともに丸みをもった刃部である。10は二側縁に小さな二次加工をもつ。第52図1～3は、裏面にも二次

加工が施されるもので、1は裏面端部、2は表裏の左縁に、3は裏面縁部に刃部をもつ。

不定形石器Ⅰ D類（第52図4・5） 4は表面の、5は裏面の二次加工により端部に尖頭部を作っている。

不定形石器Ⅰ E類（第52図6・7） 折れ面への加工方向は裏面からである。

不定形石器Ⅱ類（第52図8） ピエス・エスキューである。一端は欠損するが、直交する二対の刃部を有するとみられる。

二次加工ある刺片（第52図9～12、第53図1～16） 20点出土している。

不明石器（第54図1～5） 5は交互剝離が全周にめぐりそりであり、範状石器とみられる。

微細剝離ある刺片（第54図6～13・第55図） 22点出土している。刺片の縁部、端部に使用によるものとみられる微細剝離痕をもつ。

礫石器（第62図1） 四石が1点出土している。扁平な礫の片面に凹部をもつ。一部が黒変している。

石核（第59図6・7、第60図1） 6・7は刺片素材の石核である。1は自然礫の平坦面を打面とし、連続的な剝離を行っている。

堆層出土石器

石鎌（第56図1～7） いずれも無茎である。1～6はⅠ類、7はⅡ類である。

尖頭器（第56図8） 他の石鎌に比べ特に大きいためとり出した器種である。表面には深い調整、裏面には浅い調整がされる。裏面に素材面を大きく残す。

不定形石器Ⅰ C類（第56図9～14、第57図1～3・6） 9・13・14は裏面の側縁に二次加工が施される。10・12・1・2は表面に刃部をもつ。11は二次加工後に破損したものである。3は表裏の左縁に対照的な刃部を有する。6は5と接合する資料だが、破損後に二次加工を施している。上半（5）には微細剝離痕がみられる。

不定形石器Ⅲ類（第57図4） 表面右縁に鋸歯状の刃部をもつ。打面部は除去されている。

不定形石器Ⅳ類（第57図8） 破損品であるが、裏面からの二次加工による凹部をもつ。

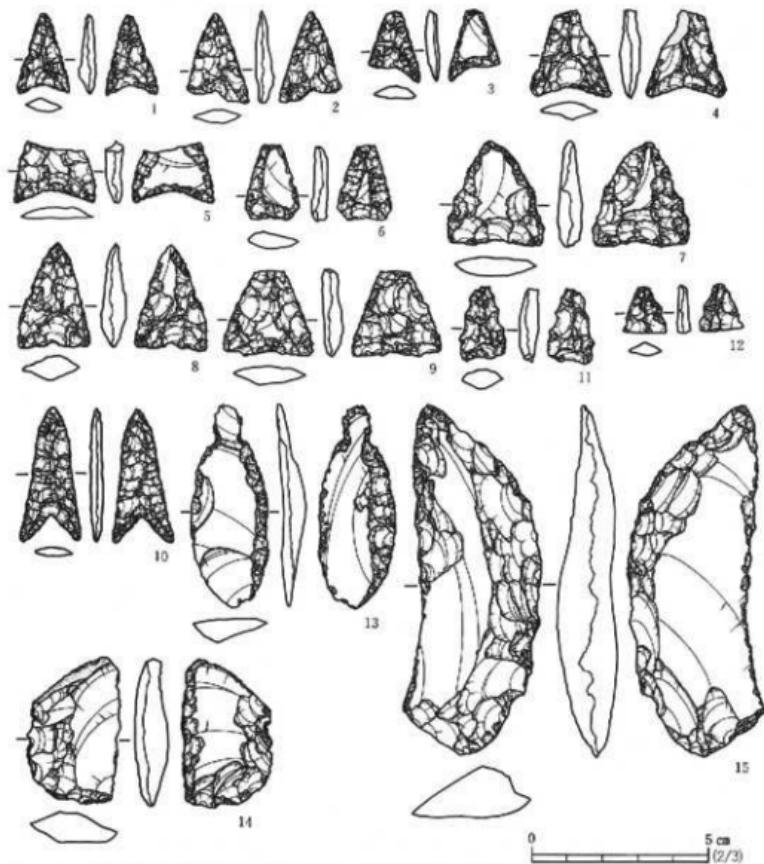
二次加工ある刺片（第57図9～12、第58図1～4） 8点出土している。

不明石器（第58図5～7） 5・7は両面加工による立面観鋸歯状の刃部を有する。6は破損した石鎌であろう。

微細剝離ある刺片（第58図8～15、第59図1～5） 火熱痕のあるものが多い。15の大きい破片は堆層出土のものである。3は折れ面に微細剝離痕がある。

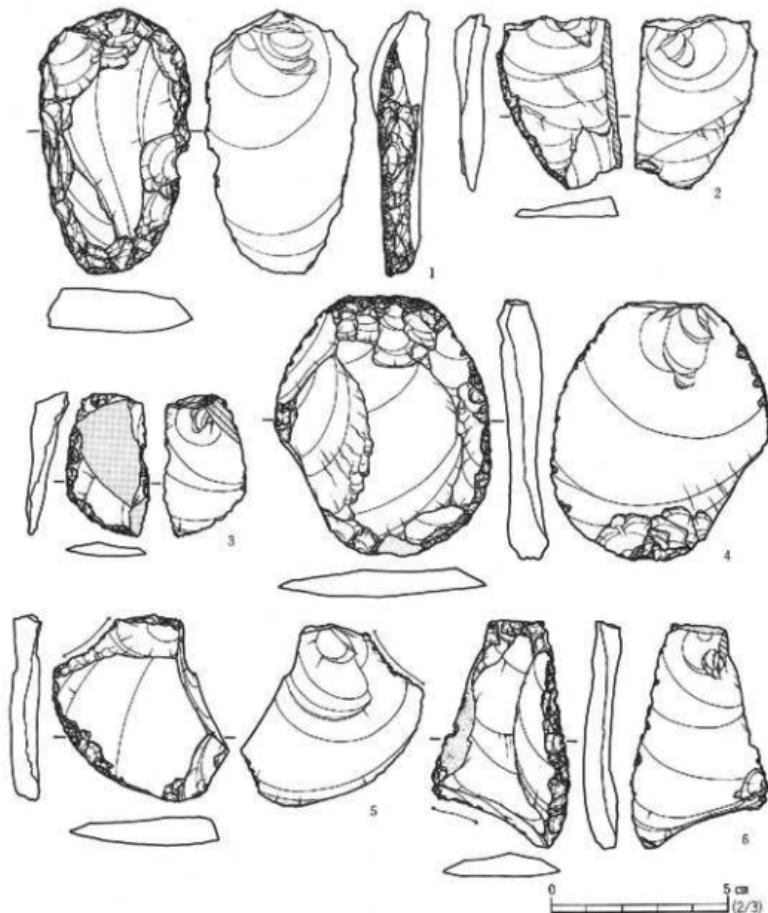
礫石器（第62図2） 片面に磨面と凹部をもつ。一端は欠損している。

石核（第60図1・2） 1は作業面を2面もち、周辺から求心的な剝離が行われる。2は作業面を3面もち、表と裏では打面が90°転移する。いずれも珪質頁岩の刺片素材の石核である。



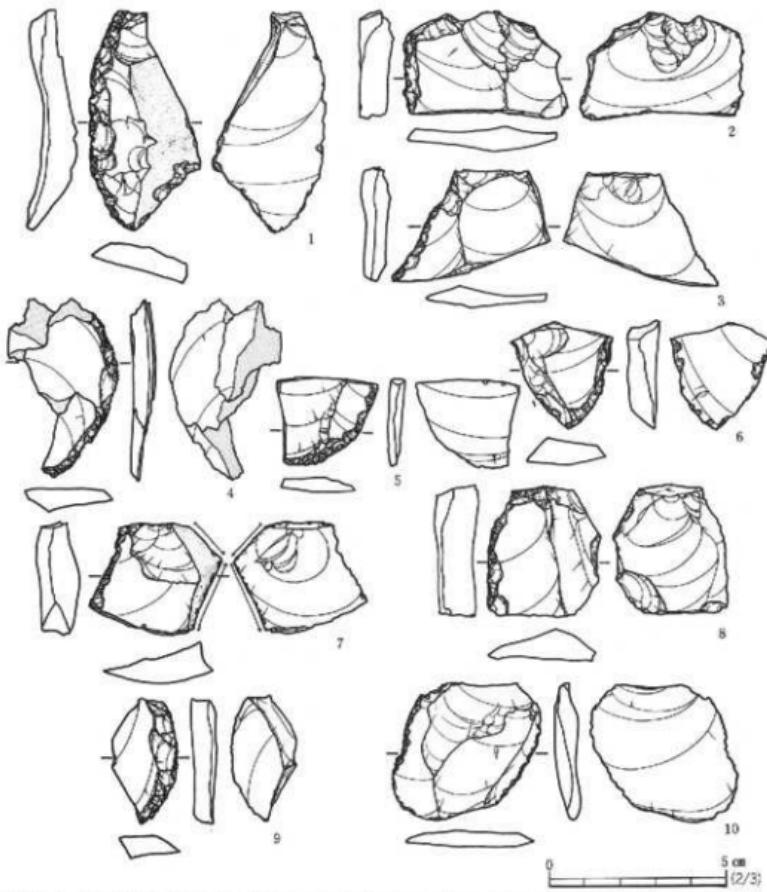
番号	形状	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	打削	剥離	剥離部位	保存状態	凹み深さ	凹み長さ	凹み幅	角度	備考	筆者	参考文献	
1	B 4	石 砕	I	22.2	14.5	4.9	0.5	堆積頁岩	凹面	—	美	向	14	2.4	0.171		K54	41-1	
2	B 8	石 砕	I	(25.4)	(17.0)	4.9	1.5	堆積頁岩	凹面	蒸	薄	片	曲	—	—		K56	41-2	
3	C 3	石 砕	I	(19.9)	(13.9)	3.5	0.5	堆積頁岩	凹面	蒸	薄	片	曲	—	—		K72	41-3	
4	C 8	石 砕	I	(24.4)	(22.2)	5.3	1.5	堆積頁岩	凹面	蒸	薄	片	曲	—	—		K89	41-4	
5	F 2	石 砕	I	(17.1)	22.4	4.4	1.5	チャート	凹面	先	美	向	圓	21.5	3.9	0.181		K126	41-5
6	A 11	石 砕	II	(20.0)	15.3	4.5	1.1	堆積頁岩	凹面	蒸	薄	片	曲	—	—		K49	41-6	
7	D 3	石 砕	II	28.9	27.1	6.2	4.5	堆積頁岩	凹面	蒸	薄	片	曲	—	—		K107	41-7	
8	D 4	石 砕	II	29.5	19.9	6.9	2.4	堆積頁岩	凹面	蒸	薄	片	曲	—	—		K108	41-8	
9	D 5	石 砕	II	(24.6)	25.1	5.3	2.9	堆積頁岩	凹面	蒸	薄	片	曲	—	—		K122	41-9	
10	A 4	石 砕	III	32.4	17.0	3.7	1.4	堆積頁岩	凹面	—	片	曲	15	8.6	0.533		K46	41-10	
11	D 4	石 砕	IV	(20.0)	13.9	0.3	1.0	堆積頁岩	凹面	蒸	薄	片	曲	—	—		K109	41-11	
12	D 3	石 砕	V	(12.0)	12.0	3.2	0.4	堆積頁岩	凹面	蒸	薄	片	曲	—	—		K105	41-12	
番号	形状	筆者	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	打削	剥離	剥離部位	保存状態	角	角	刃前深度	備考	筆者	参考文献		
13	C 5	石 砕	57.1	21.3	6.1	5.6	堆積頁岩	—			可逆性 脱離	45°	45°	4	4	K83	41-13		
14	D 2	不定形	I A	40.9	25.1	6.9	9.2	堆積頁岩	—	1		可逆性 脱離	60°	60°	5		K94	41-14	
15	D 6	不定形	I A	99.4	42.7	16.6	48.9	堆積頁岩	—	3		可逆性 脱離	55°	55°	13		K116	41-15	

第49図 Xishan出土剥片石器(1)



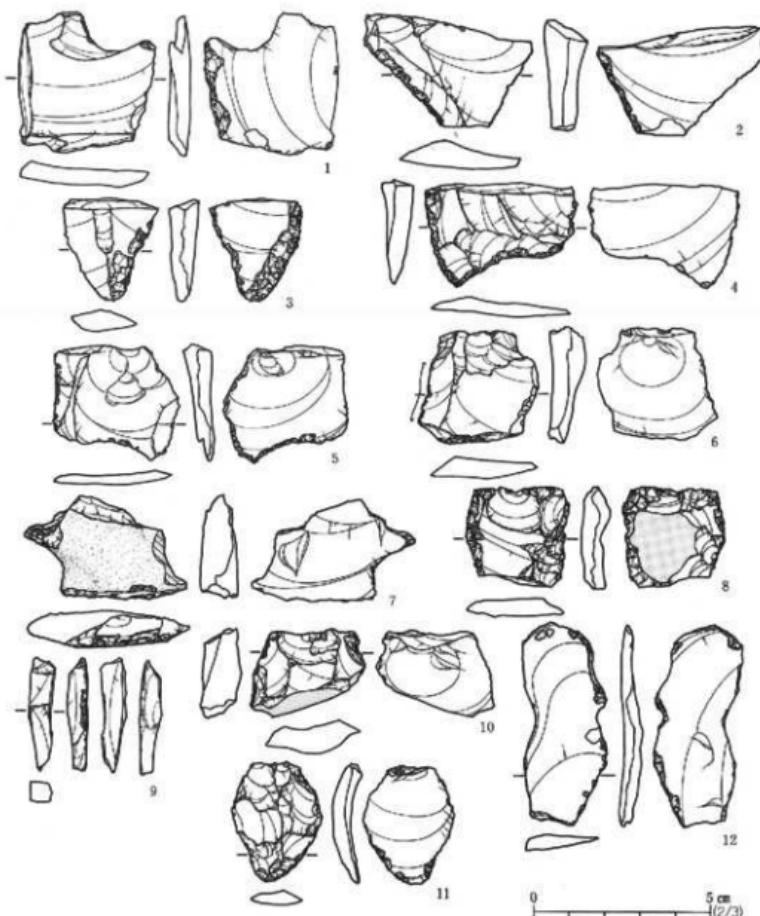
番号	F1 x F	器 形	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石 材	打 凿	表面の凹凸感	破損部位	刃 角	刃部傾度	磨 水	目 極	圖 番
1	B11	不定形	1.8	65.0	37.9	15.5	46.6	縫隙質岩	剥	I + II		左=67°, 右=67°	16	K50	41-17
2	A11	不定形	1.0	44.3	36.8	9.3	11.2	縫隙質岩	剥	I + II		60°	4	K51	41-18
3	D3	不定形	1.0	34.8	23.8	8.1	5.2	縫隙質岩	剥4	II	奥面	35°	3	K52	41-26
4	B11	不定形	1.0	71.8	51.1	19.1	46.8	縫隙質岩	剥	I + II		60°	4	K53	41-39
5	D2	不定形	1.0	51.0	31.4	8.1	17.4	縫隙質岩	剥	I + II		60°	5	K59	41-31
6	E1	不定形	1.0	62.0	39.0	7.2	18.7	縫隙質岩	自	Ⅲ + I + Ⅱ + Ⅳ		45°	5	K138	41-19

第50図 難層出土剥片石器(2)



番号	形	種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石	打面	尖端の面構成	取剥部位	刃	角	刃削角度	備考	層	経年層
1	P 2	不定形	1 C	39.0	21.6	10.2	15.6	細粒閃石岩	斜面	I + II	右縁	57°	6	K132	41-22	
2	A 6	不定形	1 C	35.6	48.9	7.7	11.2	細粒閃石岩	斜面	I	先端	57°	5	K42	41-23	
3	A 6	不定形	1 C	29.9	43.7	7.0	6.1	細粒閃石岩	斜面	I	先端	37°	3	K43	41-25	
4	A 11	不定形	1 C	58.5	31.5	6.5	6.9	細粒閃石岩	一	I	基盤	97°	6	K50	41-24	
5	D 3	小穿孔	1 C	24.1	25.7	4.1	3.0	細粒閃石岩	一	I	基盤・芯跡	45°	4	K104	41-26	
6	C 3	不定形	1 C	39.1	25.4	8.1	6.8	細粒閃石岩	一	I	基盤	70°	3	K69	41-1	
7	D 5	不定形	1 C	29.5	36.5	10.2	16.8	細粒閃石岩	斜面	I + IV	先端	45°	3	K110	42-2	
8	E 4	不定形	1 C	32.1	32.4	11.7	13.8	細粒閃石岩	斜面	I + II	先端	50°	6	K126	42-3	
9	F 3	不定形	1 C	35.6	17.9	7.2	4.1	細粒閃石岩	一	I	基盤	50°	7	K137	42-4	
10	C 1	不定形	1 C	47.1	36.1	5.2	8.3	細粒閃石岩	一	I	基盤	左45°・右60°	2/2-4/1	K61	42-5	

第51図 3層出土剝片石器(3)



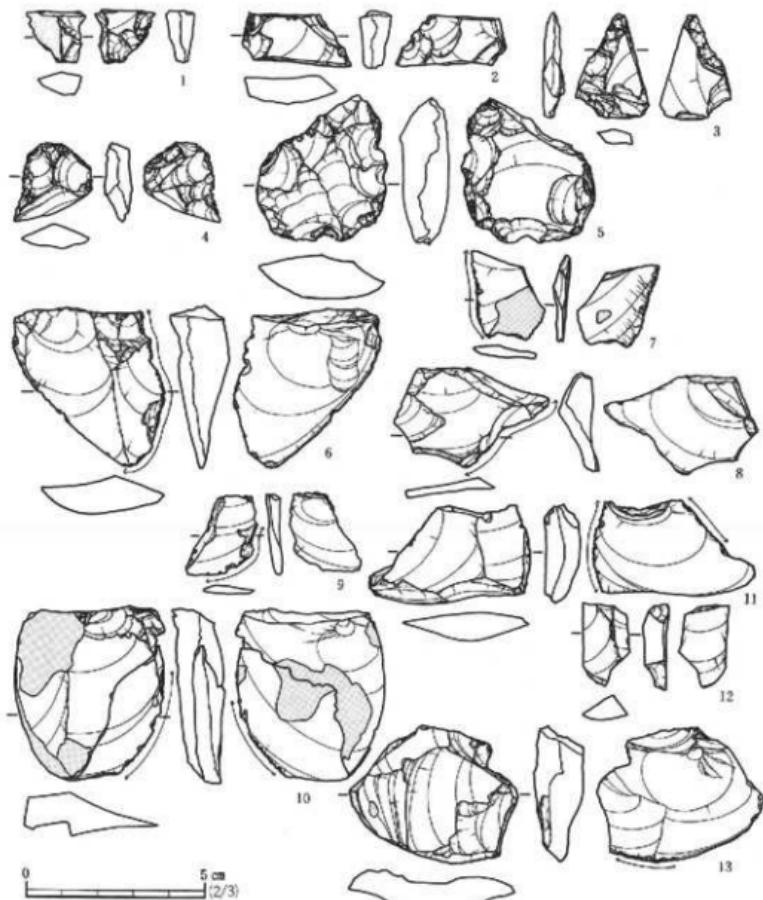
番号	グリット	高さ	幅(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 片	打痕	尖端の剥離状況	破損部位	刃 角	刃部深度	備 考	型 紙		
1.	A10	不定形	1 C	45.5	44.0	5.5	5.7	地質質地	-	H	無理	40°	5	K45	42-6	
2.	B9	不定形	1 C	48.3	28.6	8.7	10.4	地質質地	-	I+N	基盤・先端 剥むき・側面	側2・裏2		K58	42-8	
3.	F3	不定形	1 C	28.1	35.7	8.0	4.5	地質質地	-	I	基盤	奥むき・側面	側5・裏6	K134	42-7	
4.	C3	不定形	1 D	42.0	28.9	6.7	7.1	地質質地	-	H	基盤	45°	4	K69	42-9	
5.	E3	不定形	1 D	31.6	35.2	6.4	5.0	地質質地	N	I+II	-	45°	1	K124	42-11	
6.	B8	不定形	1 E	28.9	33.8	7.6	8.2	地質質地	剝	I	-	80°	2	K55	42-10	
7.	D2	不定形	1 E	47.6	27.7	9.8	10.1	地質質地	-	頭端	無理	80°	3	K38	42-12	
8.	F2	不定形	II	28.0	32.7	7.1	6.3	地質質地	-	-	下端	-	-	端熱	K128	42-13
9.	A6	二次加工削片	III	31.1	6.7	5.5	1.5	地質質地	-					K46	42-14	
10.	C1	二次加工削片	III	38.7	33.2	9.6	7.0	地質質地	剥2					K62	42-15	
11.	C2	二次加工削片	III	30.4	25.8	4.7	3.8	地質質地	剥3					K54	42-16	
12.	C3	二次加工削片	III	57.0	34.8	5.1	6.2	地質質地	-					K55	42-17	

第52図 旗層出土剝片石器(4)



番号	グリッド	形	幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石種	打削	調査部位	参考	登録	図版
1	C 3	二次加工剥片	39.8	24.6	9.4	6.7	瑪瑙質 灰岩	一	明 部	折れ曲にm, I.	K66	42-18
2	C 3	二次加工剥片	53.3	35.4	8.3	10.5	瑪瑙質 灰岩	一	暗 部	表面心臓にm, I.	K74	42-22
5	E 3+C 5	二次加工剥片	39.5	36.5	7.5	8.1	瑪瑙質 灰岩	一	暗 部	表面左縁上半の裂隙は鋭い	K65-6	42-21
6	C 5	二次加工剥片	36.2	34.8	12.9	19.3	瑪瑙質 灰岩	一	暗部・暗部		K84	42-23
7	C 8	二次加工剥片	22.1	19.3	5.7	1.9	瑪瑙質 灰岩	一			K87	42-24
8	C 8	二次加工剥片	41.6	19.5	7.9	9.4	瑪瑙質 灰岩	一			K88	42-25
9	C 8	二次加工剥片	35.1	17.4	3.6	1.4	瑪瑙質 灰岩	側	暗 部		K90	42-26
10	C 8	二次加工剥片	21.4	12.5	3.8	0.7	瑪瑙質 灰岩	一	暗 部		K91	42-27
11	C 9	二次加工剥片	31.8	22.0	6.1	2.5	瑪瑙質 灰岩	一	暗 部	破壊	K92	42-28
12	D 1	二次加工剥片	36.4	22.8	3.8	3.2	瑪瑙質 灰岩	一	暗 部	破壊	K93	42-29
13	D 2	二次加工剥片	36.0	33.7	3.6	9.3	瑪瑙質 灰岩	直状	暗部	基盤部にm, I.	K96	42-30
14	D 5	二次加工剥片	46.6	23.2	9.5	6.8	瑪瑙質 灰岩	一	端部・端部		K112	42-31
15	E 5	二次加工剥片	28.5	18.4	4.2	1.9	瑪瑙質 灰岩	一	暗 部	先端部にm, I.	K127	42-32
16	E 3	二次加工剥片	36.5	29.6	3.7	4.0	瑪瑙質 灰岩	側			K123	42-33

第53図 上層出土剥片石器(5)



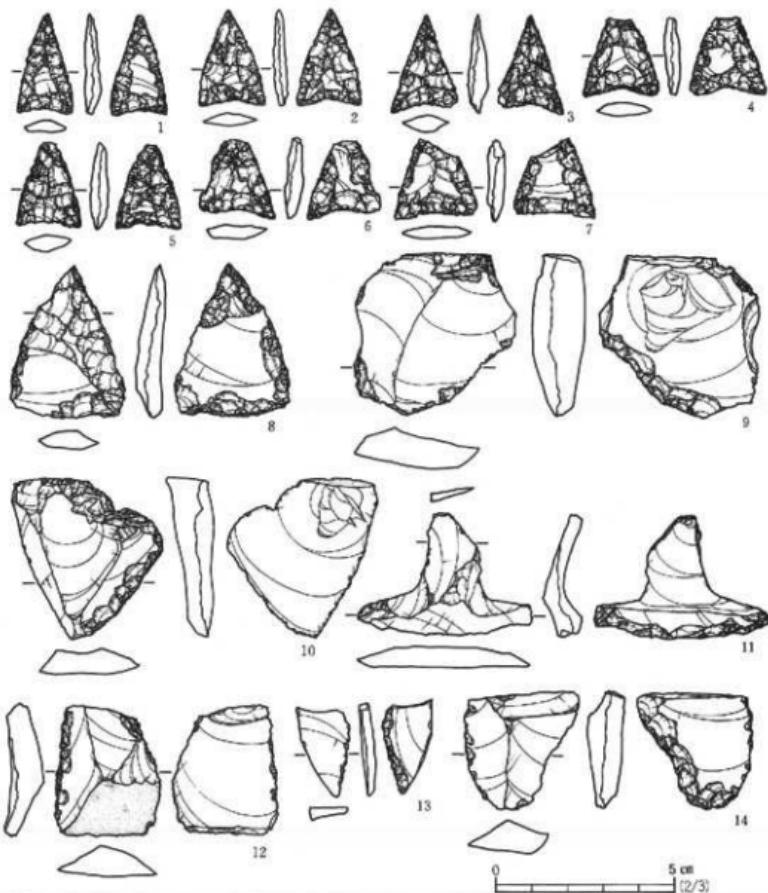
番号	グリット	面	共(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重(㎏)	石材	打削	断面形状	備考	重(㎏)	回数
1	A II	不明石器	19.7	14.6	7.5	1.5	珪質頁岩	-	麻部	刃角50°	K52	42-24
2	D 3	不明石器	30.3	19.0	7.9	3.9	珪質頁岩	側	麻部	刃角55°	K103	42-26
3	E 1	不明石器	29.0	19.9	5.6	2.6	珪質頁岩	-	麻部	石器未製品か	K137	42-37
4	F 2	不明石器	25.9	18.7	7.4	2.8	珪質頁岩	-	-	-	K130	42-28
5	F 3	不明石器	45.0	35.4	13.6	18.7	珪質頁岩	-	麻部	ヘラ状右唇被削品か	K136	42-39
6	A 6	板状剥離皮	35.9	41.2	12.1	17.4	珪質頁岩	側	鶴四	-	K44	
7	A 5	板状剥離皮	28.8	18.9	2.9	1.5	珪質頁岩	-	麻部	破壊	K41	
8	A 6	板状剥離皮	43.4	29.3	5.2	5.4	珪質頁岩	-	麻部	-	K45	
9	A 9	板状剥離皮	20.0	20.5	3.7	0.5	珪質頁岩	側	鶴四	-	K47	
10	B 2+E 2	板状剥離皮	45.0	42.3	13.3	21.9	珪質頁岩	側	麻部	破壊により破損	33/13	42-40
11	B 9	板状剥離皮	21.8	44.8	8.5	9.2	珪質頁岩	側	鶴四	-	K57	
12	C 1	板状剥離皮	24.1	14.7	6.4	1.8	珪質頁岩	-	麻部	-	K63	
13	C 3	板状剥離皮	33.1	46.9	13.3	18.4	珪質頁岩	側	鶴四	破壊	K71	42-41

第54図 第6層出土剥片石器(6)



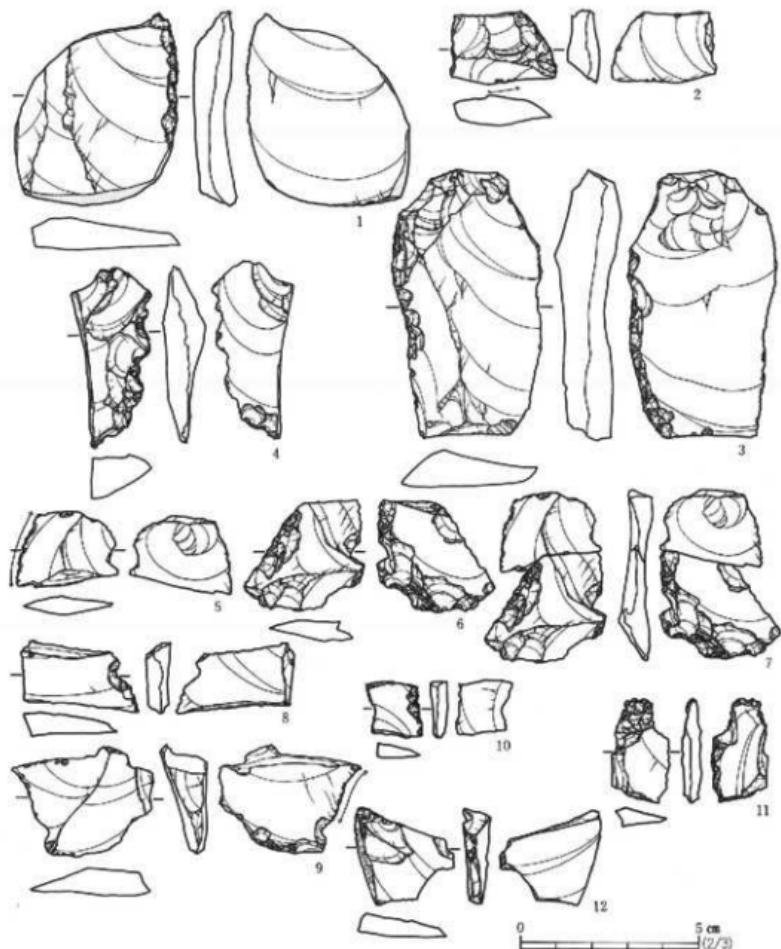
番号	グリッF	物 品	長(m)	幅(m)	厚(m)	重(g)	石 材	打 出	調査部位	備 考	登録	図 版
1	C 3	破損剥離底	52.2	37.8	10.1	17.0	珪質頁岩	周面	縫 部		K72	42-42
2	C 4	破損剥離底	31.2	23.1	5.5	3.1	珪質頁岩	—	縫 部		K81	
3	D 2	破損剥離底	23.2	16.3	5.9	1.5	珪質頁岩	—	縫 部		K100	
4	D 3	破損剥離底	23.4	13.7	3.5	0.8	珪質頁岩	—	縫 部	被熱	K106	
5	D 5	破損剥離底	30.8	21.5	4.7	2.4	珪質頁岩	—	縫 部	被熱	K111	
6	D 5	破損剥離底	41.0	30.8	6.0	6.3	珪質頁岩	調2	縫部・縫部	表面左側の調整は鋭い。	K113	
7	D 6	破損剥離底	29.6	40.3	7.8	10.0	珪質頁岩	—	縫 部		K115	
8	D 7	破損剥離底	21.9	39.8	12.9	10.8	珪質頁岩	調2	縫 部		K116	
9	E 2	破損剥離底	25.2	14.4	8.8	2.3	珪質頁岩	—	縫 部	被熱	K119	
10	E 4	破損剥離底	50.6	45.6	12.7	27.7	珪質頁岩	周面	兩端部		K125	42-43
11	F 2	破損剥離底	14.3	26.7	9.7	3.1	珪質頁岩	調8	縫 部		K129	
12	F 2	破損剥離底	32.5	27.2	4.1	2.1	珪質頁岩	—	縫 部	被熱	K131	
13	F 3	破損剥離底	36.2	14.1	3.5	2.2	珪質頁岩	調2	縫 部		K133	
14	C 3	破損剥離底	41.4	24.6	5.9	3.5	珪質頁岩	—	縫 部	被熱	K187	

第55図 Ⅹ層出土剥片石器(7)



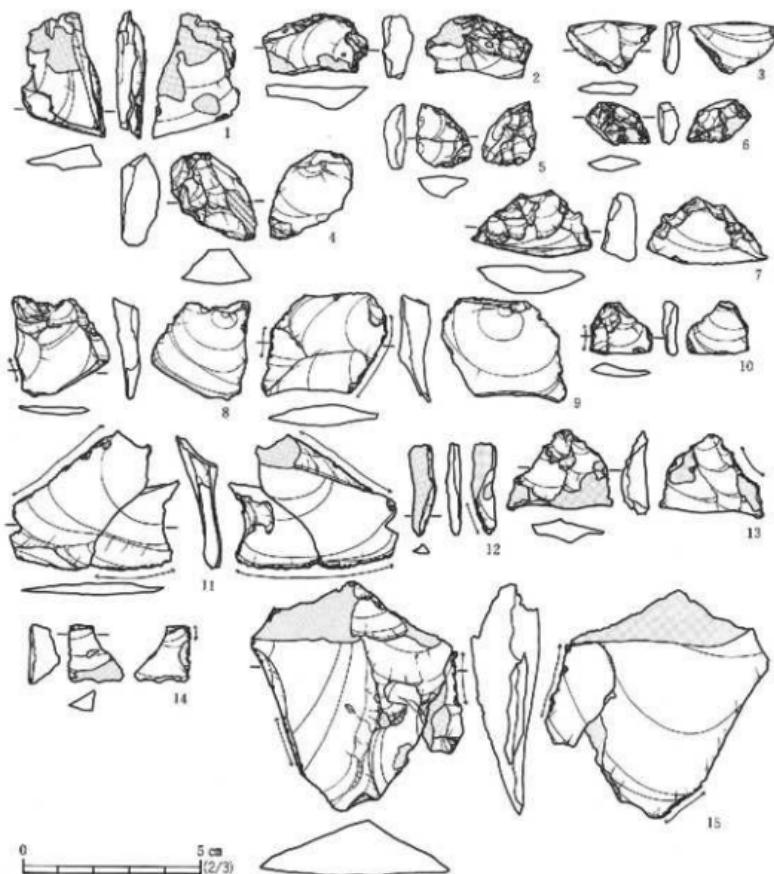
番号	チャット	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形(6)	石材	打削	破損部位	磨耗部位	磨耗面積	刃部	刃厚	刃幅	刃長	備考	筆者	写真
1	A 4	石 細	I	27.8	15.1	4.5	1.3	地質 寸石	表面	—	圓 面	13	1.3	0.1	尖端角40°	K138	4-1	
2	B 11	石 細	I	36.9	17.9	3.9	1.2	地質シルト岩	表面	—	圓 面	14.3	1.6	0.112	尖端角50°	K149	4-2	
3	C 3	石 細	I	67.2	(38.6)	5.5	1.2	地質 寸石	表面	—	—	—	—	—	尖端角40°	K122	4-3	
4	D 4	石 細	I	21.7	20.9	4.0	1.5	地質 寸石	表面	先端部	圓 面	19	—	0.118		K171	4-4	
5	E 5	石 細	I	63.4	17.7	4.5	1.5	地質 寸石	表面	先端部	圓 面	17	2.1	0.088		K169	4-5	
6	F 2	石 細	I	62.1	(39.9)	4.3	1.6	地質 寸石	表面	先端-断面	圓 面	—	1.5	—		K181	4-6	
7	B 4	石 細	H	62.6	22.1	4.5	1.8	地質 寸石	表面	先端部	圓 面	—	—	—		K144	4-7	
8	F 4	大型器		42.7	31.5	6.8	2.3	地質 寸石	表面	—	圓 面	—	—	—	尖端角55°	K163	4-8	
番号	チャット	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形(6)	石材	打削	破損部位	磨損部位	刃部	刃角	刃幅	刃長	備考	筆者	写真	
9	B 5	不定形	I C	42.1	44.3	14.5	29.4	地質 寸石	斜面	1+刃	—	40°	6			K145	4-9	
10	B 5	不定形	I C	42.9	40.8	9.1	15.3	地質 寸石	斜面	1+刃	—	50°	5			K147	4-10	
11	A 4	不定形	I C	33.7	49.0	8.0	6.2	地質 寸石	—	I	様 斜	80°	4	調整後缺	K139	4-11		
12	B 5	不定形	I C	35.4	29.0	9.0	9.7	地質 寸石	—	1+刃+刃	基部・側面	40°	3			K146	4-12	
13	C 4	不定形	I C	27.5	13.5	3.7	1.1	地質 寸石	—	II	基 面	55°	3			K160	4-12	
14	E 4	不定形	I C	38.1	30.6	9.4	8.5	地質 寸石	—	I	基 面	50°	7			K179	4-14	

第56図 四層出土剥片石器(1)



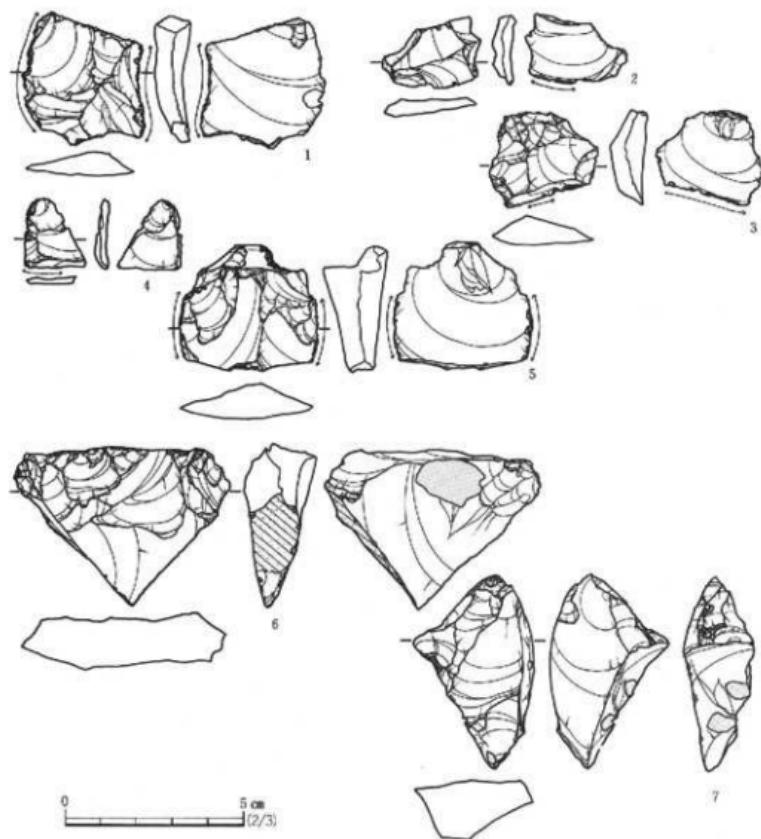
番号	アーチ.	型	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	度(%)	石	形態	表面の崩壊	破損部位	万	度	角	刃物側面	標	考	生	質	年	
1	E 3	不定形	1.C	48.3	44.1	9.8	23.4	燧 貝 岩	—	I	基 端	45°	3	建物	K178	43-15				
2	F 2	不定形	1.C	22.6	26.6	8.8	5.3	燧 貝 岩	—	I+II+III	基 端	58°	11		K182	43-16				
3	A 8	不定形	1.D	72.3	41.7	12.1	9.7	燧 貝 岩	—	I+N	先 端	底面・裏60°	表6裏6		K142	43-18				
4	D 6	不定形	■	50.5	23.1	11.6	9.1	燧 貝 岩	—	I	基端・左縫	55°	10		K174	43-17				
5	C 3	無削新規模	22.0	38.1	9.5	2.9									L層生土	K80	43-19			
6	D 6	不定形	1.C	20.2	36.6	7.7	3.6								表55・裏40	表7裏12			K175	43-19
7				45.0	33.1	7.7	8.5	燧 貝 岩	剥	H								K84/15	43-21	
8	D 3	不定形	N	36.0	24.5	6.6	4.0	燧 貝 岩	—	N	先端・左縫	45°	3	建物	K169	43-22				
9	B 7	加工	原	45.0	37.0	6.6	4.0	燧 貝 岩	剥						② 有 鳞	薄 鳞				
10	C 3	二次加工	剥片	40.5	29.6	11.3	9.6	燧 貝 岩	—	剥削	表面が鋸にN.				K148	43-23				
11	C 7	二次加工	剥片	30.2	18.7	5.5	2.7	燧 貝 岩	剥	剥削					K164	43-25				
12	D 2	二次加工	剥片	31.5	25.7	6.5	4.4	燧 貝 岩	剥						K167	43-26				

第57図 ■層出土剝片石器(2)



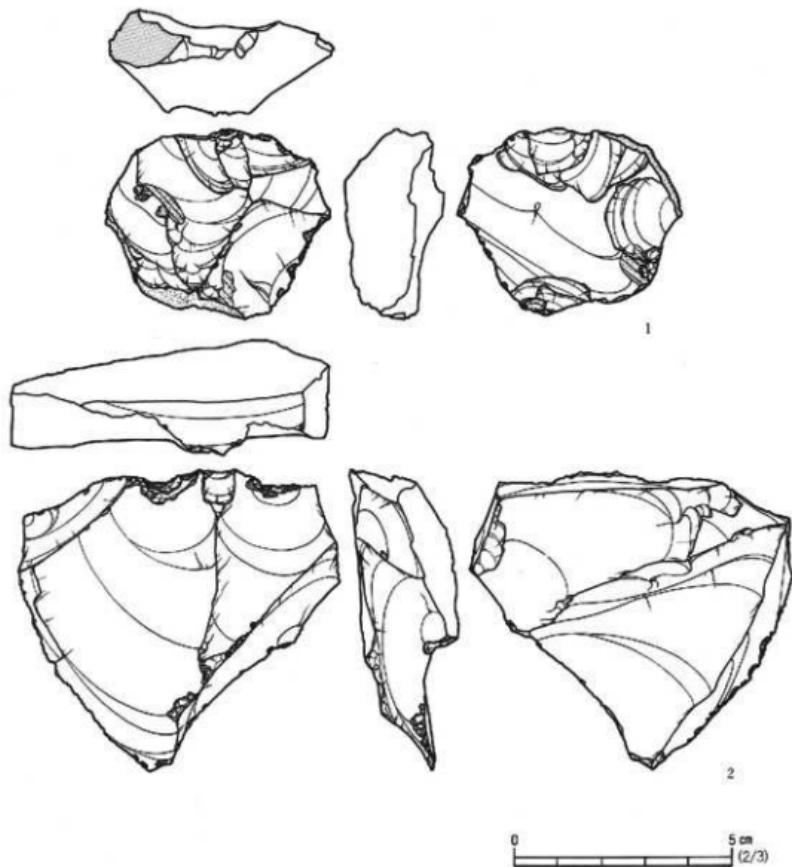
番号	グリット	種類	長(㎜)	寛(㎜)	厚(㎜)	重(㎏)	石材	打痕	剥離部位	備考	生産国	
1	D 2 + D 3	二次加工剥片	37.2	23.0	7.5	4.2	珪質頁岩	原面	縫隙	無により破損	K10・G3	43-27
2	D 4	二次加工剥片	29.1	28.5	7.3	3.2	珪質頁岩	裏面	縫隙	被熱	K172	43-28
3	F 4	二次加工剥片	34.9	14.4	3.2	1.0	珪質頁岩	-	縫隙		K184	43-29
4	C 2	二次加工剥片	29.1	23.5	10.5	4.5	石英安山岩	剝離	縫隙・縫隙		K158	43-30
5	C 2	不明 石 剥	19.6	14.1	6.0	1.3	珪質頁岩	-			K150	43-31
6	C 3	不明 石 剥	18.8	10.7	5.3	0.7	珪質頁岩	-		被熱・石鹼の結片？	K158	43-32
7	C 6	不明 石 剥	33.4	18.6	8.4	4.5	珪質頁岩	-	縫隙		K163	43-33
8	A 6	後 鋸 刃 鮫	24.8	27.6	4.8	3.2	珪質頁岩	剝離	縫隙		K149	43-34
9	A 6	後 鋸 刃 鮫	25.3	34.9	6.6	5.9	珪質頁岩	剝離	縫隙部		K141	43-35
10	B 3	後 鋸 刃 鮫	15.5	17.1	3.6	0.6	黑 磷 石	剝離	縫隙		K143	43-37
11	C 3	後 鋸 刃 鮫	49.4	39.3	8.3	8.0	珪質頁岩	-	縫隙・縫隙	被熱	K153	43-36
12	C 3	後 鋸 刃 鮫	25.0	5.9	3.3	0.4	珪質頁岩	-	縫隙	被熱	K154	
13	C 3	後 鋸 刃 鮫	29.0	21.9	7.3	3.2	珪質頁岩	-	縫隙	被熱	K155	
14	C 3	後 鋸 刃 鮫	20.3	14.4	8.4	1.2	珪質頁岩	-	縫隙	被熱	K157	
15	C 3 + C 4	後 鋸 刃 鮫	64.5	63.0	18.5	39.4	珪質頁岩	原面	縫隙	被熱、大がC 3・L III上	K17+II	43-38

第56図 Ⅲ層出土剥片石器(3)



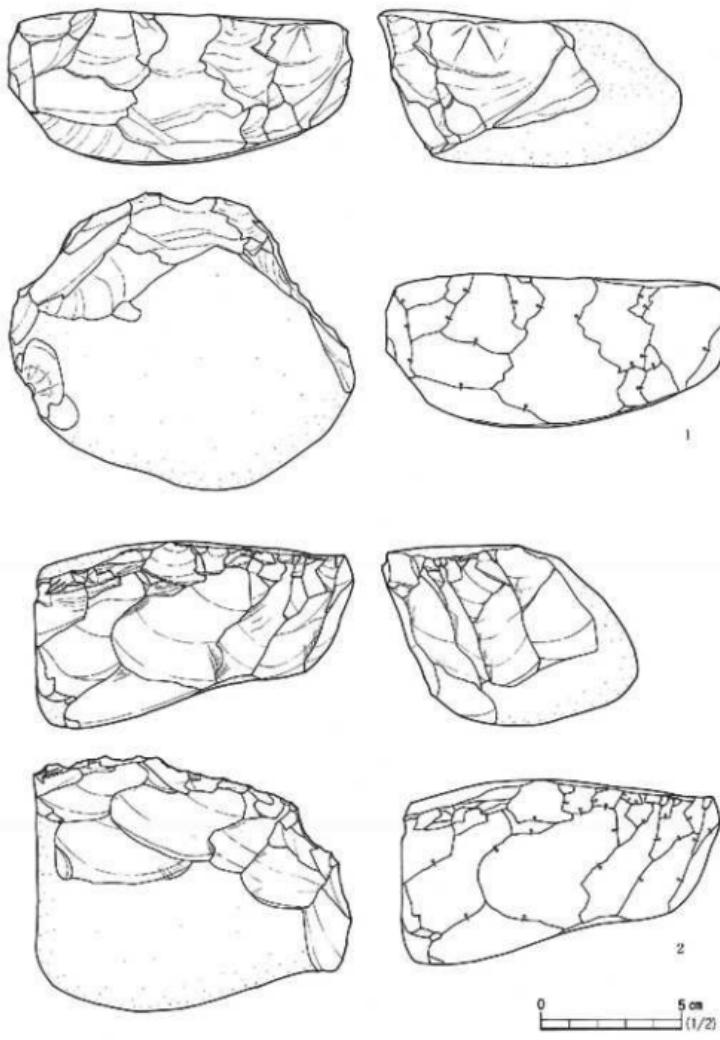
第59図 雄層出土剥片石器(4), 石核(1)

番号	グリッド	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(Kg)	石材	打削	断面形	器種	考	重(Kg)	回数
1	C 8	破壊側面核	43.3	26.6	6.8	9.6	珪質頁岩	—	尖端形	基盤部は側面での折れ	K156	43-39	
2	D 2	側面側面核	28.3	17.8	4.4	1.8	珪質頁岩	—	尖端		K158		
3	D 5	側面側面核	23.2	30.5	9.4	6.1	珪質頁岩	圖7	端部	折れ面にm, f.	K123	43-40	
4	E 2	側面側面核	22.8	16.4	2.4	0.8	珪質頁岩	—	端部		K126		
5	E 3	側面側面核	33.5	39.0	16.3	15.5	珪質頁岩	圖4	尖端形		K177	43-41	
6	C 3	石核	60.0	44.4	16.6	37.1	珪質頁岩	—	L面出土、被削		K67	42-44	
7	C 3	石核	54.7	33.8	17.8	20.8	珪質頁岩	—	L面出土、被削		K79	42-45	



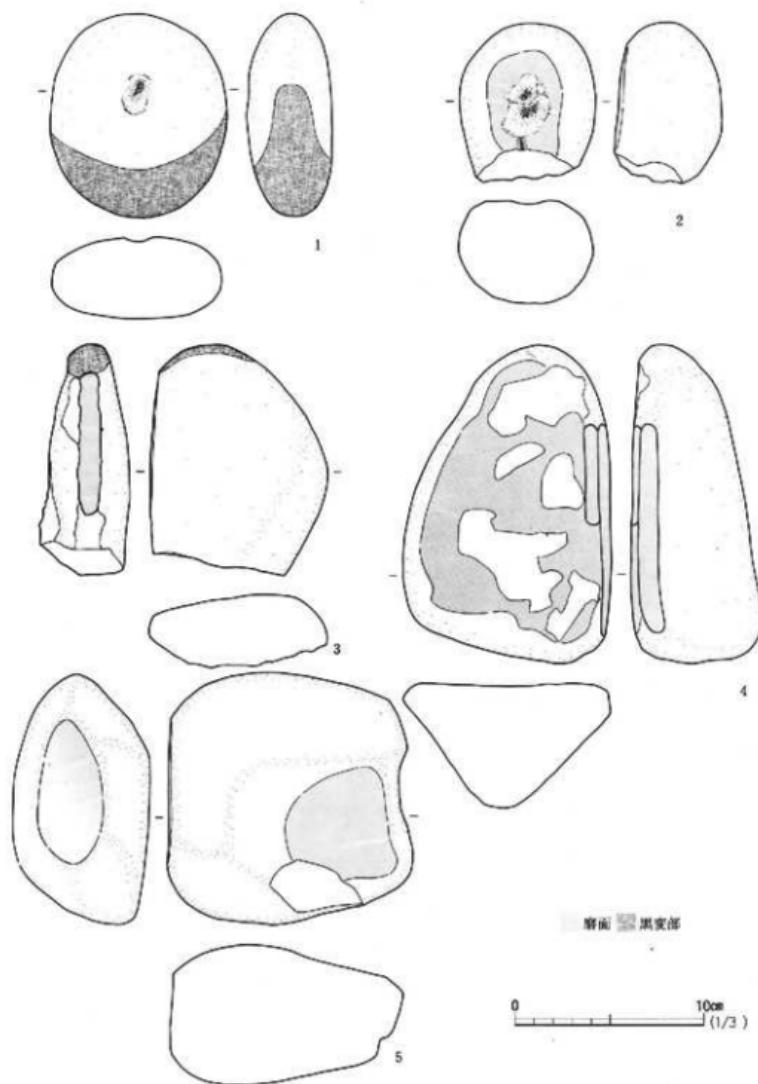
番号	グリップ	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材	備考	登録	回収
1	C3,LB	石核	42.9	51.1	19.5	40.6	珪質頁岩	焼けはじめあり	K151	44-1
2	C3,LB	石核	67.5	72.8	22.3	92.6	珪質頁岩		K159	44-2

第60図 這層出土石核(2)



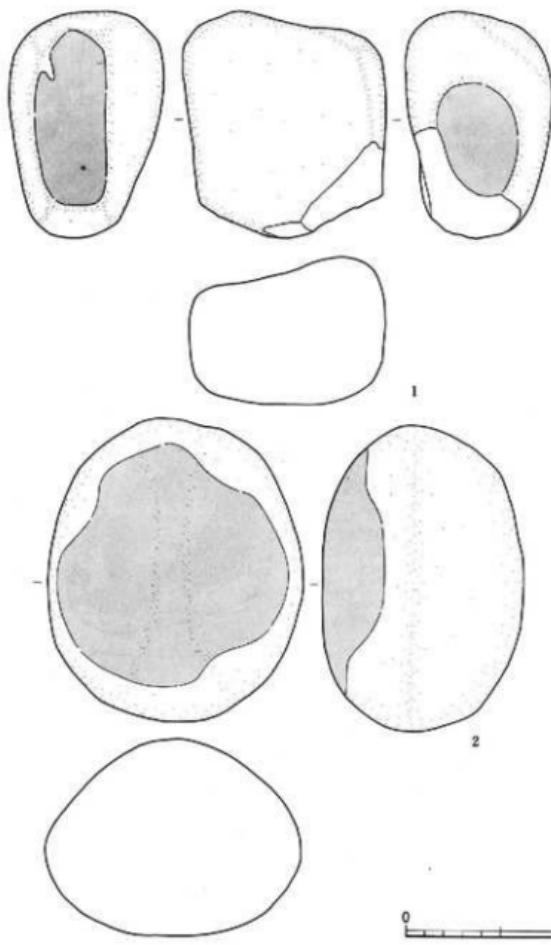
第61図 石 核(3)

番号	グリット	層位	面	長(m)	幅(m)	厚(m)	重(t)	石 材	備 考	登録 号
1	A9	直	石 核	55	121	107	840	緑色凝灰岩		K189 44-3
2	C3	Ⅱ上	右 核	67	112	90	650	砂 岩		K190 44-4



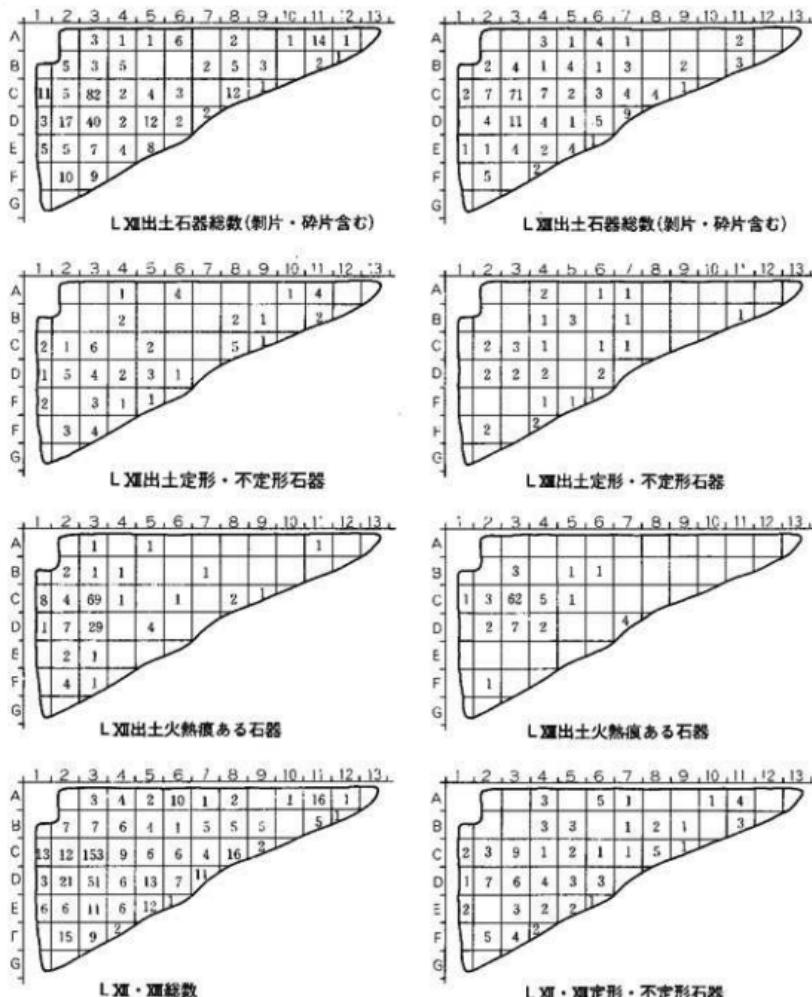
番号	グリップ	部位	形	種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石 材	備 考	走 線	回 取
1	B 4	直	圓	石	108	93	53	660	安山岩	高密度あり	K191	44-5
2	A 7	直	圓凹	石	880	71	55	500	安山岩	破損	K192	44-6
3	D 3	直上	圓	石	118	93	35	580	安山岩	破損、黒変部あり	K193	44-7
4	D 2	直上	圓	石	168	109	76	1520	安山岩	鉋面あり	K194	44-8
5	D 3	直上	圓	石	134	130	75	2800	安山岩		K195	44-9

第62図 磕石器(1)



番号	グリッド	層位	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材	備考	登録	回収
1	D 3	地上	磨石	114	104	74	1550	緑色凝灰岩		K196	
2	D 3	地上	磨石	162	135	105	2820	安山岩		K197	44-19

第63図 磨石器(2)

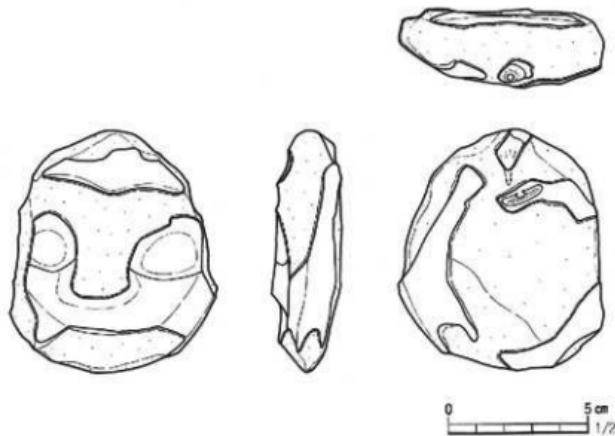


第64図 石器のグリッド別出土状況

(8) 層位不明の遺物（第65図）

西壁の一部が雨で崩れた際に出土した土偶頭部である。全体に破損が著しく、輪郭は不明である。表面は眼が浅くなつて表現されており、剥落痕があることから眉・鼻は貼付けられて表現されていたであろう。口は沈線により表現されるようである。裏面も剥落著しいが胸部から顔面が飛び出すように接合されていたと推定される。頭頂部の後ろには深さ1cm程度の穴が上からあけられている。

崩落土中のため伴出遺物はないが、VI層に含まれていた可能性は高い。縄文時代後期に所属するものであろう。



第65図 土偶

下ノ内浦遺跡より出土の植物種子の鑑定報告

東北大學 星 川 清 親

平安時代末期から鎌倉時代初期の間の遺構と考えられる掘立柱建築の柱痕跡より、17粒の植物種子炭化物が出土した。

鑑定の結果、それらのうち15粒はオオムギ（皮麦）の穀粒であり、1粒は米粒、1粒は不明（オオムギ破片か？）であった（写真1、2を参照）。

粒形はオオムギについては下表に示すごとくであり、その平均値は現在の栽培品種とくらべてほぼ等しいものであった。米粒は現在の栽培品種とくらべて短かく、丸形であった。これは日本型稻と判断される。

表1. 出土穀類の大きさ測定値 (mm)

穀 粒 (炭 化)	粒 長	粒 幅	粒 厚
オ オ ム ギ 平 均	5.8	2.8	2.5
米	3.7	2.7	2.1

(編集者註) 編集者が星川教授に鑑定依頼した当時は、建物跡の時期について上記のように考えていたが、その後の分析の結果、近世頃の建物跡と結論づけた。ここに訂正する。

Ⅲ章 考 察

(1) 奈良時代の遺構と遺物

奈良時代の遺構には竪穴住居跡1軒と掘立柱建物跡があるが、ここでは、出土資料の多い竪穴住居跡の遺物の年代決定を中心として若干の検討を行ない、整理する。

住居跡出土の遺物としては、土師器壺・壇・甕、須恵器壺・甕・壺?がある。これらの遺物の大部分(約80%)は2層下部の床面直上から出土したものである。床面出土のものは少ないが、堆積層の状況や土器の特徴から、住居廃絶後から埋没終了までには大きな時期差は無いと考えられ、住居跡の時期決定に有効な共伴資料として捉えることが可能である。

出土量の多い土師器壺をみると、(1)クロ不使用 (2)丸底のものと丸底風の平底のものがある (3)底部から口縁部にかけて屈曲がなく、スムーズに丸味をもって立ち上がる (1)のみ屈曲する (4)体部に段・沈線のあるものとないものがある (5)外面はヘラケズリ後ヘラミガキ(94%)で、内面はヘラミガキ・黒色処理であるという特徴をもっている。このような土師器壺は国分寺下層式に比定され、奈良時代-8世紀代に位置付けられている。^{註1)}

仙台市内で、本住居跡の国分寺下層式と同様の特徴をもつ壺は、本遺跡1次調査第1号住居^{註2)}跡、大反田遺跡^{註3)}6次調査第7号住居跡にみられる。また、土師器甕については、本住居跡のもので図示できたものはないが、破片は全てヘラナデであり、刷毛目は認められない。この甕外面の特徴も二者と同様であり、ほぼ同一時期であることを示唆している。

次に、実年代の決定のために須恵器壺をみると、本住居跡のものは底部だけであるが、底径8.8cmと大きく、回転糸切り、無調整であるのに対して、前二者のものは平底で、体部下端に丸味をもち、体部下端から底部全面に回転ヘラケズリの施されているものである。本住居跡のものと同様の須恵器壺を出土している窯跡としては、松山町次橋窯跡、利府町磯沢窯跡がある。次橋1号窯では計10点出土しており、底径の平均値8.5m(7.5~10.4cm)、磯沢窯跡ではB2窯3点、B15窯1点、B2~4灰原1点の計5点出土しており、底径の平均値8.2cm(7.7~8.8cm)であり、本住居跡のものの底径に近似している。この壺は、両方の窯跡とも共伴する他の壺群を含めた総体として、8世紀中葉の年代を与えている。このことから、本住居跡の壺も、同様の年代を与えることが妥当であり、1次調査第1号住居跡出土の回転ヘラケズリの壺の年代として8世紀中葉の年代を与えていることと矛盾しない。以上のことから、本住居跡は奈良時代中頃、8世紀中葉の住居跡であると考えられる。^{註4)}^{註5)}

註1) 氏家和典(1967):「跡奥国分寺跡出土の丸底壺をめぐって」『柏倉亮古教授還暦記念論文集』

註2) 佐藤・柳沢・工藤(1983):「下ノ内浦遺跡」『仙台市文化財調査報告書第59集』

註3) 佐藤・洋(1987):「六反田遺跡III」『仙台市文化財調査報告書第102集』

- 註4) 古窯跡研究会(1983)：「次橋須恵器窯跡発掘調査報告」『松川町文化財調査報告書第1集』
- 註5) 真山・佐藤(1987)：「硯沢・大沢窯跡ほか」『宮城県文化財調査報告書第116集』
- 註6) 註3報文中では、7号住居跡出土土器を、8世紀前半に位置付けている。これは、六反田遺跡での7号住居跡出土土器の年代観であり、同様の特徴をもつ土器群の存続時期を規定するものではなく、本遺跡での年代と矛盾するものではない。

(2) 繩文早期の遺構と遺物

遺物の取り扱い

繩文早期の遺物は、Ⅲ・Ⅳ層から出土している。各層の上面からは遺構が検出されており、二時期にわたる生活面があったことは明らかである。しかし、層中の遺物のうち受熱資料の出土状況に注目すると、Ⅲ層、Ⅳ層とも同一石材と考えられる資料が同一地点に集中している。また、土器も無文土器片が上下層とも分布している。これらのことから両層の遺物については混在している可能性が強いと考えたい。

土器について

文様によりI～IV類に分けた。それぞれについて從来の編年にしてみる。I類は押型文が施されている、日計式にあたる。貝殻沈線文土器以前の繩文早期前葉とされている。日計式の土器はドノ内浦2次調査の際にも、19a～22層から出土している。但し、今回のものとは文様モチーフは異なり、重層菱形文（矢羽根状文もある可能性あり）のものである。II類は1点のみであるが、早期中葉の沈線文系土器かもしれない。III類は早期後葉の条痕文土器である。型式としては櫛木I式、素山IIa式が設定されているが、いずれとも決め難い。ただし、表面の沈線文が押し引き手法でない点から考え、索山IIa以前のものであろう。IV類は無文土器である。編年位置は不明だが、条痕文以前の可能性を考えたい。口唇部形態には尖るもの丸みをもつもの、外削ぎ状のものの3種がある。

註) 相原淳一氏より、野島式併行期のものではないか、とのご教示を得た。また、太い沈線を引く例として、東北北部のムシリ式があげられる

石器について

石鎌

石鎌はⅢ層より12点、Ⅳ層より7点。計19点が出土している。それらのうち、完形品及び図上復元可能なものの長幅関係を図示した（第66図）。I類は長幅比1.5付近に分布する。II類は例が少ないので幅に差がみられる。素材面を残すものは13点、残さないものは5点である。

長幅分布を富沢遺跡15次（早期末葉～前期初頭）、28次（早期後葉櫛木I式）の資料と比較する（第67図）。28次資料は全体に長軸比が小さくなる。15次資料は当資料に比べ小ぶりのものが多い。

石器組成

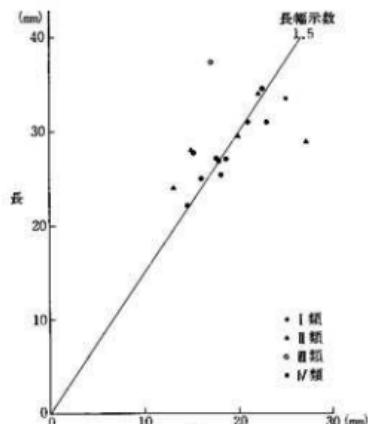
剥片石器のなかで定形石器と不定形石器・二次加工ある剝片・不明石器の比率は、22.3%対77.7%となる。不定形石器の中では、I C類とした一~二側縁に片面加工を施すものが主体を占めている。礫石器には磨石、磨凹石、凹石がある。磨石には、礫の平坦面に磨面をもつもの他に、棱に磨面をもつ、いわゆる「特殊磨石」が含まれる。

石材について

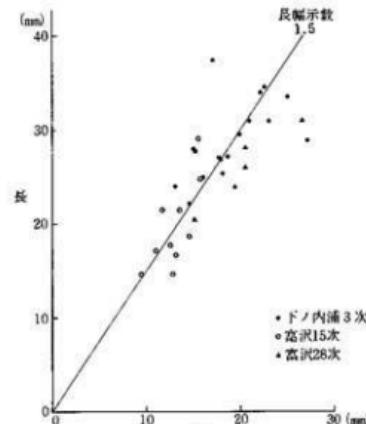
剥片石器では、珪質頁岩、チャート、石英安山岩、シルト岩、珪質シルト岩、凝灰岩、珪質凝灰岩、黒曜石の8種類がある。微細剝離痕もつものも含めた129点中120点が珪質頁岩であり、93%を占める。石核には、珪質頁岩4点、緑色凝灰岩・砂岩各1点が用いられる。ただし緑色凝灰岩・砂岩は石器として使われていない。礫石器では、安山岩、玢岩、緑色凝灰岩が用いられ、安山岩が多い。

受熱資料について

受熱資料は石器・剝片に見られるが、特に剝片が多い。剝片における受熱資料は点数で59.5%、重量比で67.9%を占める。その多くはC 3グリッドから出土しており、当グリッドの剝片・チ



第66図 石鎚長幅関係図



第67図 他遺跡との比較

第14表 石器組成表(1)

器種 部位	心	尖	石	不定形石器					あ ら わ し て ん	不 規 則 石 器	磨 石 器	小 石	剝 片	石 核	小 計	合 計			
				A	B	C	D	E											
L 鎚	12	1	2	1	28	2	2	1	18	5	24	1	87	211	3	214	301		
L 磨	7	1			28				1	1	7	3	13	1	44	137	2	139	183
磨石												5	5		1	1	6		
計	19	1	1	2	1	28	2	2	1	1	25	8	37	7	136	348	6	354	490

数字は六数を示す

第15表 石器組成表(2)

分類	相位	L XI	L XII	合計
剝片	一定形	13(21.0)	9(26.7)	21(33.3)
岩塊	不定形・二次加工・不明	49(79.0)	22(73.3)	71(77.7)
合計	計	62	30	94

() 内は層ごとの百分比

第16表 剥片・チップにおける受熱資料

分類	数量(枚)			重量(g)		
	正 常	受 热	合 計	正 常	受 热	合 計
L XI	88	123	211	122.35	299.3	412.65
(41.7)	(58.3)			(29.6)	(70.4)	
L XII	53	84	137	92.8	164.25	257.05
(38.7)	(61.3)			(36.3)	(63.9)	
合計	141	207	348	215.15	434.55	669.7
(40.5)	(59.5)			(32.1)	(67.9)	

() 内は層ごとの百分比

ブ・破片の96.4%が受熱している。受熱資料はC 3・D 3グリッドを中心にⅢ・Ⅳ層にわたり分布するが、その集中部分はⅢ層上面砾の集中部と重なる。このことから、Ⅲ層上面集石の場で、火を用いた行為が行われた可能性は高いと考えられる。

土坑について

Ⅲ層上面で9基、Ⅳ層上面で2基、合計11基の土坑が検出されている。いずれも平面形は長楕円形で、壁が急で深く、底面にピットをもつものである。このような形態は從来より陥穴と呼ばれる土坑に類似している。

分類

底面の長軸、短軸、深さの関係から四大別される(第68図)。

A類 21・22号土坑。Ⅲ層上面検出のもの。底面形は長楕円形で、深さは70cm以上。長軸方向は北西。

B類 12・14・15・16・18号土坑。Ⅲ層上面検出。底面形は長方形で、深さは32~55cm。長軸方向は北西。

C類 13・17号土坑。Ⅲ層上面検出。底面形は長方形で、深さ70cm以上。長軸方向は北西。

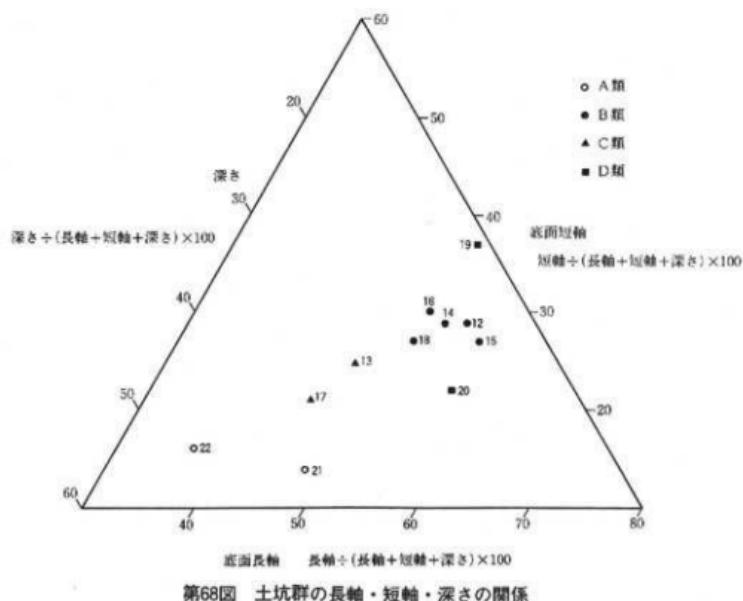
D類 19・20号土坑。Ⅲ層上面検出。底面形は長方形で、深さ27cmと38cm。長軸方向は19号が北西、20号が北東。

配置

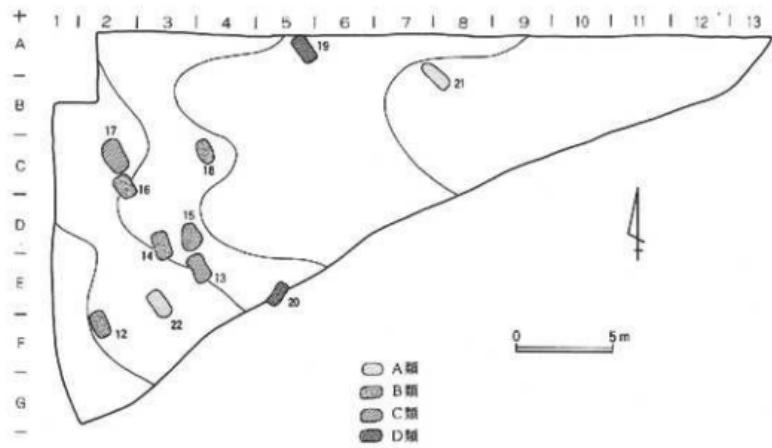
土坑は主に西側に集中する。13・15号土坑と16・17号土坑は特に近接する。長軸方向は20号土坑以外は北西方向であるが、これは等高線に沿っている。陥穴とされる土坑は、数mの間隔をおいて列状に並ぶ例が紹介されるが、ここでは狭い範囲のため判断できない。

底面施設

全ての土坑の底部中央にはピットが認められ、截ち割りの結果棒状痕跡であるものが大部分であった。そのなかで、13・22号土坑以外の9基の棒状痕跡には掘り方方が認められた。このことより、底面に穴を掘り、数本の棒状のものを埋め込んだものと考えられる。棒状のものについては、「棒や綱によって動物の足を拘束して外へ出られないようにする仕掛けの一部」とか、^{註1)}「逆茂木」^{註2)}という解釈が出され、実際に木杭が出土した例もある。今回の土坑群においても杭状のものが立てられていたと考えられる。



第68図 土坑群の長軸・短軸・深さの関係



第69図 土坑群の分類

- 註1) 今村啓爾「霧ヶ丘遺跡の上塙群に関する考察」『霧ヶ丘』P.131~159 1973
 註2) 菊地実「縄文時代の陥し穴調査法と派生する諸問題 大原II遺跡・村主遺跡検出の陥し穴群分析から」『研究紀要』4 勘定馬保埋蔵文化財調査事業団 P.15~28 1987
 註3) 北海道東野幌4遺跡17号ピット、福島県郡山市赤沼遺跡1号陥し穴状土坑

土坑群の時期

土坑群の検出されたⅢ・Ⅳ層は縄文早期前葉～後葉の遺物が混在していることから、土坑群は早期後葉もしくはそれ以降の時期のものと考えられる。但し、Ⅳ層上面のA類土坑は早期前葉～後葉の巾の中に位置づけられよう。

参考文献

- 赤堀直志 (1948) 「神奈川県野島貝塚」『考古学集刊』第1冊 東京考古学会
 相原淳一 (1982) 「概説 日計式上器群の成立と解体」『赤い本』創刊号
 相原淳一 (1985) 「縄文条痕土器群の諸段階について」『赤い本～片倉信光氏追悼論文集』
 伊東信雄 (1940) 「宮城県遠田郡不動堂村森山貝塚調査報告」奥羽史料調査部研究報告第二
 伊東信雄 (1952) 「古代史」『宮城県史』第1卷
 伊東・須藤 (1977) 「瀬野遺跡－青森県下北部臨野沢村瀬野遺跡の研究」東北考古学会
 今村啓爾 (1983) 「陥穴（おとし穴）」『縄文文化の研究』2
 氏家和典 (1957) 「東北土器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
 関田・一条他 (1984) 「先塙遺跡発掘調査報告書（第1次・第2次・第3次・第4次調査）」
 『先塙遺跡発掘調査報告書 大タルミ遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第93集
 霧ヶ丘遺跡調査団 (1973) 『霧ヶ丘』
 後藤勝彦 (1968) 「宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚〔1〕」「仙台湾周辺の考古学的研究」宮城教育大学歴史研究会編
 佐藤・斎野 (1983) 「茂庭」仙台市文化財調査報告書第45集
 白鳥良一 (1980) 「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡研究所研究紀要』VII
 鈴木雄三 (1987) 「赤沼遺跡」郡山東部ニュータウン関連発掘調査報告書1 郡山市教育委員会
 芹沢・林 (1965) 「岩手県蛇王洞洞穴」『石器時代』第7号
 東京国立博物館 (1978) 「日本出土の中国陶磁」
 土岐山 武 (1982) 「松田遺跡」宮城県文化財調査報告書第88集
 東北歴史資料館 (1984) 「里浜貝塚－宮城県鳴瀬町宮戸鳥貝塚西畠地点の調査・研究III－」東北歴史資料館資料集
 9
 丹羽 浩 (1973) 「松山遺跡」宮城県文化財調査報告書第25集
 林 謙作 (1965) 「縄文文化の発展と地域性－東北－」『日本の考古学』II 河出書房新社
 藤沼邦彦 (1977) 「宮城県出土の中世陶器について」『東北歴史資料館研究紀要』第3巻
 藤沼邦彦 (1978) 「中世陶器の紹介」『東北歴史資料館研究紀要』第4巻
 宮城県史編纂委員会 (1981) 『宮城県史』第34巻 (資料編II)
 盛岡市教育委員会 (1983) 「大館遺跡群 大新町遺跡－昭和57年度発掘調査概報－」
 横田・森田 (1978) 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4
 工藤哲司 (1986) 「柳生 土地区画整理事業に伴う柳生地区の遺跡分布調査と、松木遺跡の発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第95集
 佐藤・兼田 (1985) 「宮城県仙台市後河原遺跡」埋蔵文化財調査研究所報告書第1集

まとめ

下ノ内浦遺跡第3次調査においては、縄文時代から近世に及ぶ遺構と遺物が発見された。各時代の遺構と遺物から、調査地点の歴史的変遷をたどりたい。

1. 縄文時代早期と考えられる土坑が発見された。陥し穴とみられるものであり、西方の2次調査区で発見された早期の土坑に類似する。2次調査区・3次調査区を含めた範囲は、狩猟域だった可能性がある。
2. 縄文時代後期前葉の遺物包含層が発見された。遺物は小破片が主で、遺構も伴わないことから、西方にある2次調査区が主な活動拠点で、それらの遺物が3次調査区に流入しているものと考えられる。
3. 弥生時代～奈良時代に機能していたとみられる溝跡が発見された。
4. 奈良時代の住居跡が1軒発見された。北側の1次調査区でもほぼ同時期のものが1軒発見されており、西方の2次調査区でも5軒発見されている。また、笊川を挟んだ下ノ内浦跡・六反田遺跡でも該期の住居跡が発見されており、この周辺に集落が形成されていたと考えられる。
5. 平安時代の藏骨器が発見された。藏骨器内には火葬骨片が存在した。また、平安時代後半以降と考えられる火葬施設も発見された。
6. 近世頃の建物跡が3棟発見され、この時期は居住城だったと考えられる。
7. 調査では、上記の遺構・遺物の他に、縄文時代と平安～中世末頃の河川跡が発見された。現在も調査区の南側に笊川が流れしており、古くから現在に至るまで河川との関わりが深い場所だったことが分かる。

縄文時代早期には陥し穴がつくられ、狩りの場として使われていた。その場で石器も作っていたようである。その後、土砂の堆積が進んだ後、河川の流路となった。やがて河道が移動し、その跡が埋没し終わったのは縄文時代後期前葉頃である。それ以後、比較的安定した地面上に断続的に人間活動の痕跡が残され、奈良時代には集落が営まれた。しかし、平安時代の初め頃には再び河川の流路となり、地面が大きく削られた。その後、流路の移動につれ河道は埋まり始めた。堆積層中には埋没過程を理解する鍵となる灰白色火山灰がみとめられる。この頃には、一部、葬送に関連する場所として使用されたようである。そして、この河川は中世末頃にはすっかり埋まりきってしまった。平坦になった地面には数棟の建物が建てられ、再び生活の場として利用され、現在に至っている。

今後、周辺の調査成果を積み重ねることによって、この地域の歴史的景観の変遷を、より詳しく推定復元していくことができるであろう。

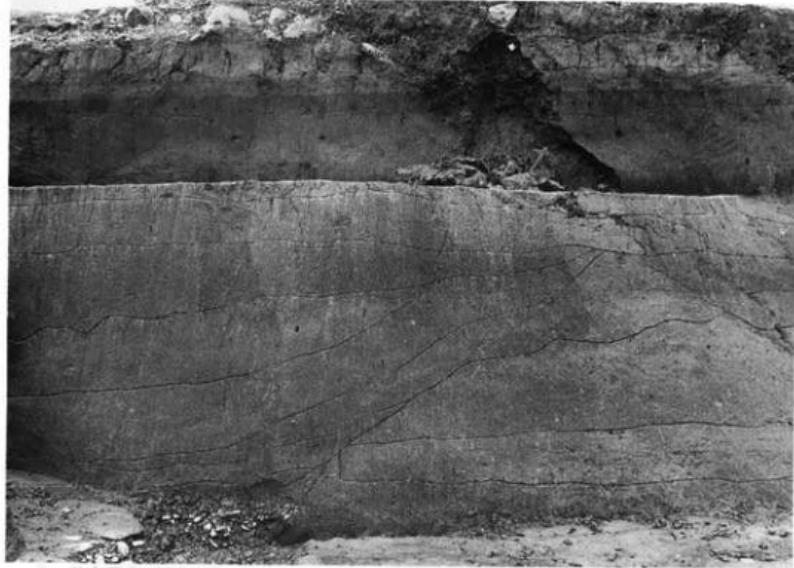
写 真 図 版

写 真 図 版 目 次

1. 調査前全景（南より）	95	37. V・VI層出土遺物	113
2. 基本層序（東より）	95	38. VI・VII層出土遺物	114
3. 1号河川跡（南西より）	96	39. III層出土土器	115
4. 1号河川跡（北東より）	96	40. III・IV層出土土器	116
5. 1号河川跡断面（北東より）	96	41. III層出土剝片石器(1)	117
6. 1号河川跡遺物出土状況（北より）	97	42. III層出土剝片石器(2)	118
7. 2号土坑（北より）	97	43. IV層出土剝片石器	119
8. 藏骨器出土状況（南より）	97	44. III・IV層出土人骨・疊石器	120
9. 2号溝跡（南東より）	97	45. 上側	121
10. III層上面建物群（北より）	98	46. 炭化穀粒	121
11. 2・3号建物跡（北より）	98	47. 火葬骨・2号土坑出土骨片	122
12. 1号建物跡（北より）	98		
13. 三箇室出土状況	98		
14. 1号住居跡	99		
15. V層上面建物跡	100		
16. 3～11号土坑（東より）	100		
17. 1号土坑（南より）	100		
18. 1号溝跡（北より）	100		
19. 3号溝跡（南西より）	101		
20. 4号溝跡（北より）	101		
21. 5号溝跡	101		
22. 6号溝跡	101		
23. III層上面検出土坑群（北より）	102		
24. III層上面検出土坑群（北東より）	102		
25. III層上面検出土坑群（南より）	103		
26. 土坑(1)	103		
27. 土坑(2)	104		
28. 土坑(3)	105		
29. 土坑(4)	106		
30. 遺物出土状況	107		
31. 調査風景	107		
32. 1号河川跡出土遺物(1)	108		
33. 1号河川跡出土遺物(2)	109		
34. 1号河川跡出土遺物(3)	110		
35. 2号河川跡・建物跡・溝跡・藏骨器	111		
36. 1号住居跡・III・IV・V層出土遺物	112		



1 調査前全景（南より）



2 基本層序（東より）



3 1号河川跡
(南西より)



4 1号河川跡
(北東より)



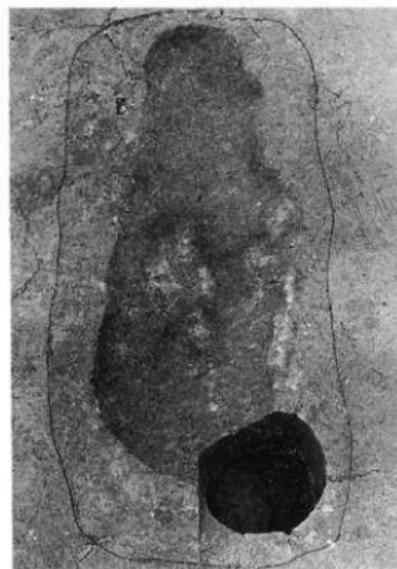
5 1号河川跡断面
(北東より)



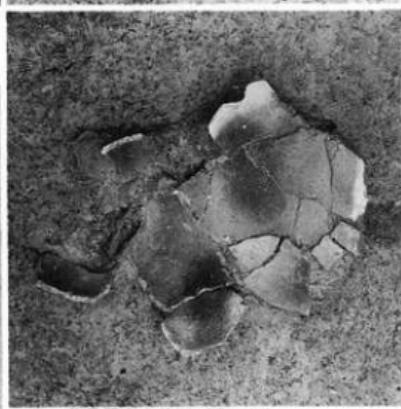
6 1号河川跡遺物出土状況（北より）



6 1号河川跡遺物出土状況（北より）



7 2号土坑（北より）



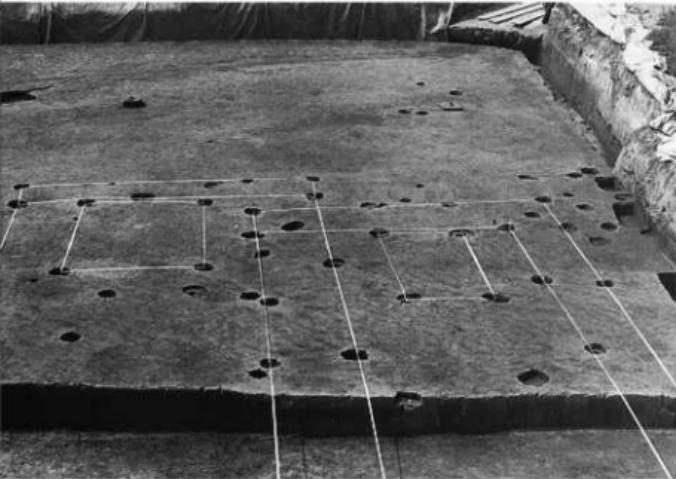
8 藏骨器出土状況（南より）



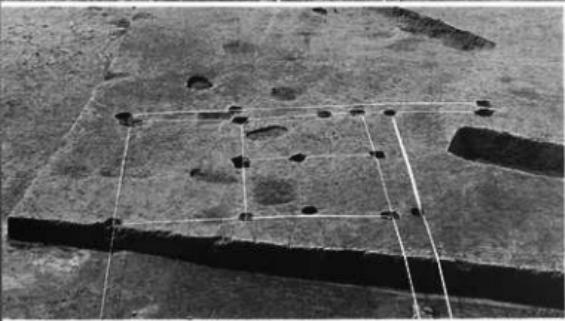
9 2号溝跡（南東より）



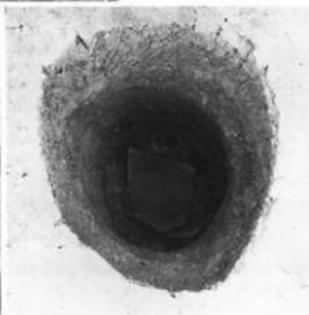
10 Ⅲ層上面建物群
(北より)



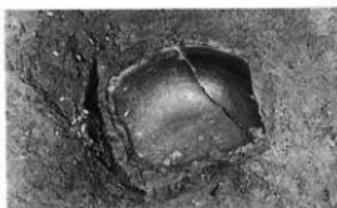
11 2・3号建物跡
(北より)



12 1号建物跡 (北より)



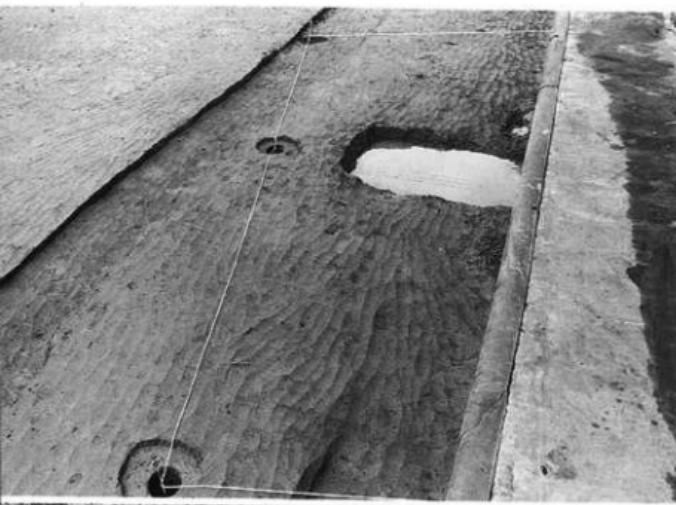
13 三筋壺出土状況



14 1号住居跡

1. 床面検出状況（西より）
2. 墓り方充填状況（北より）

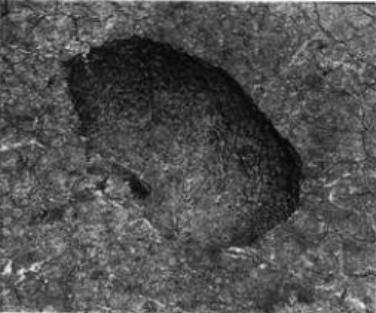
3. 遺物出土状況
4. 遺物出土状況



15 V層上面建物跡
(北東より)



16 3～11号土坑
(東より)



17 1号土坑 (南より)



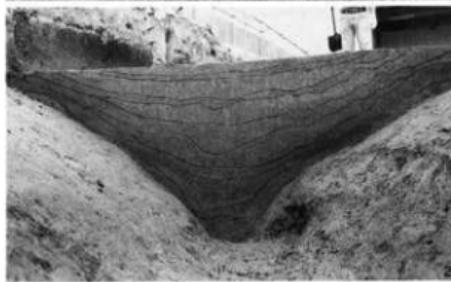
18 1号溝跡 (北より)



19 3号溝跡（南西より）



20 4号溝跡（北より）



21 5号溝跡 1. 全景（南東より）
2. 潜面（南東より）

22 6号溝跡 3. 全景（南より）
4. 全景（南東より）



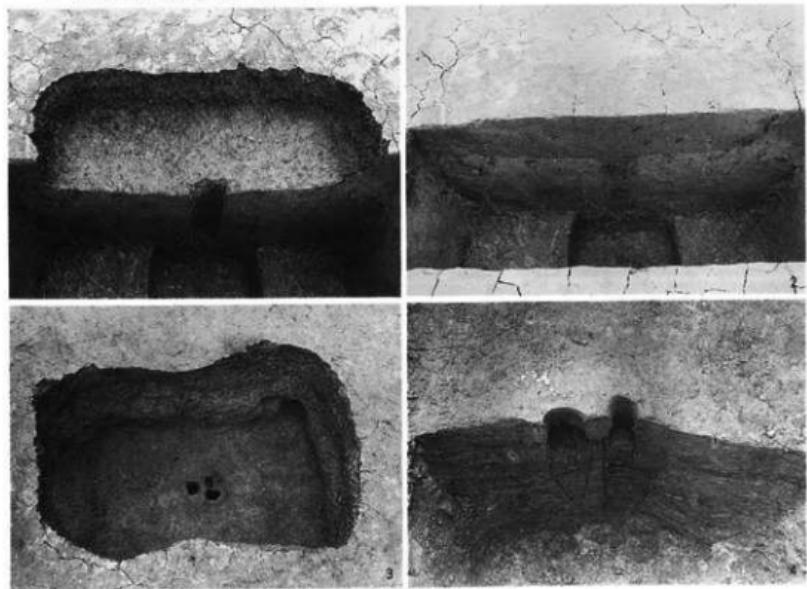
23 第Ⅱ層上面検出土坑群（北より）



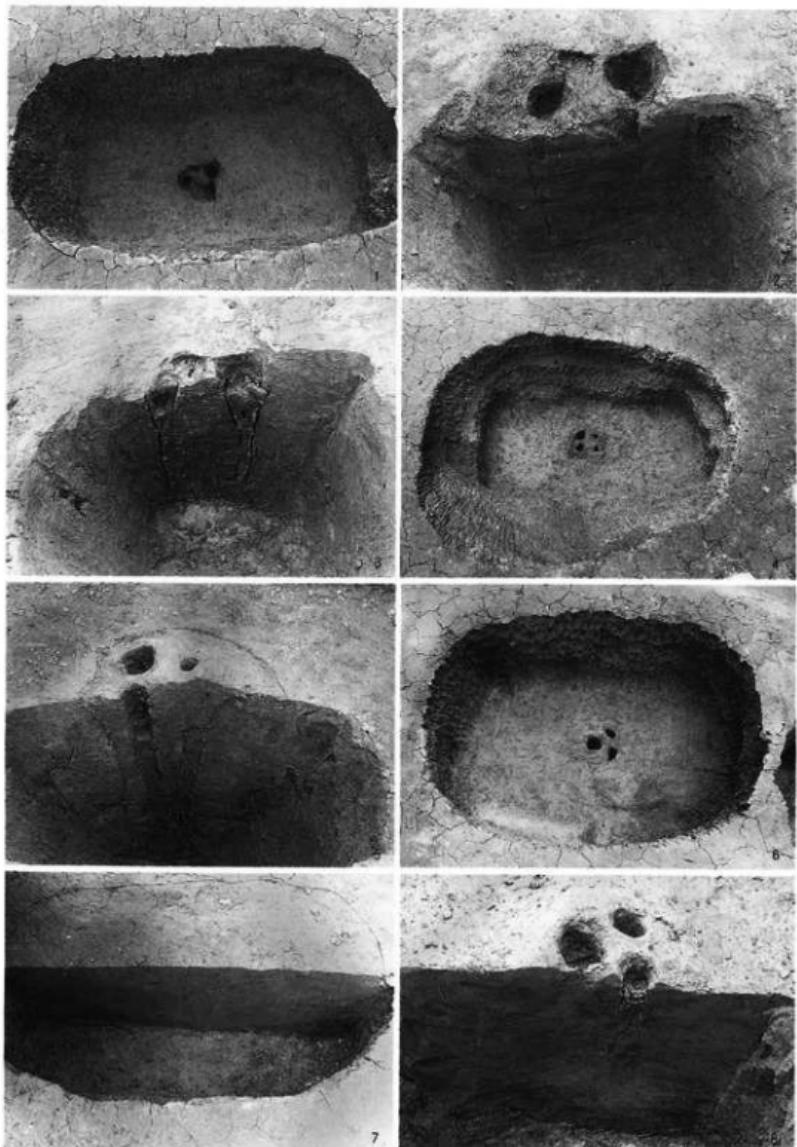
24 第Ⅱ層上面検出土坑群（北東より）



25 X層上面検出土坑群（南より）

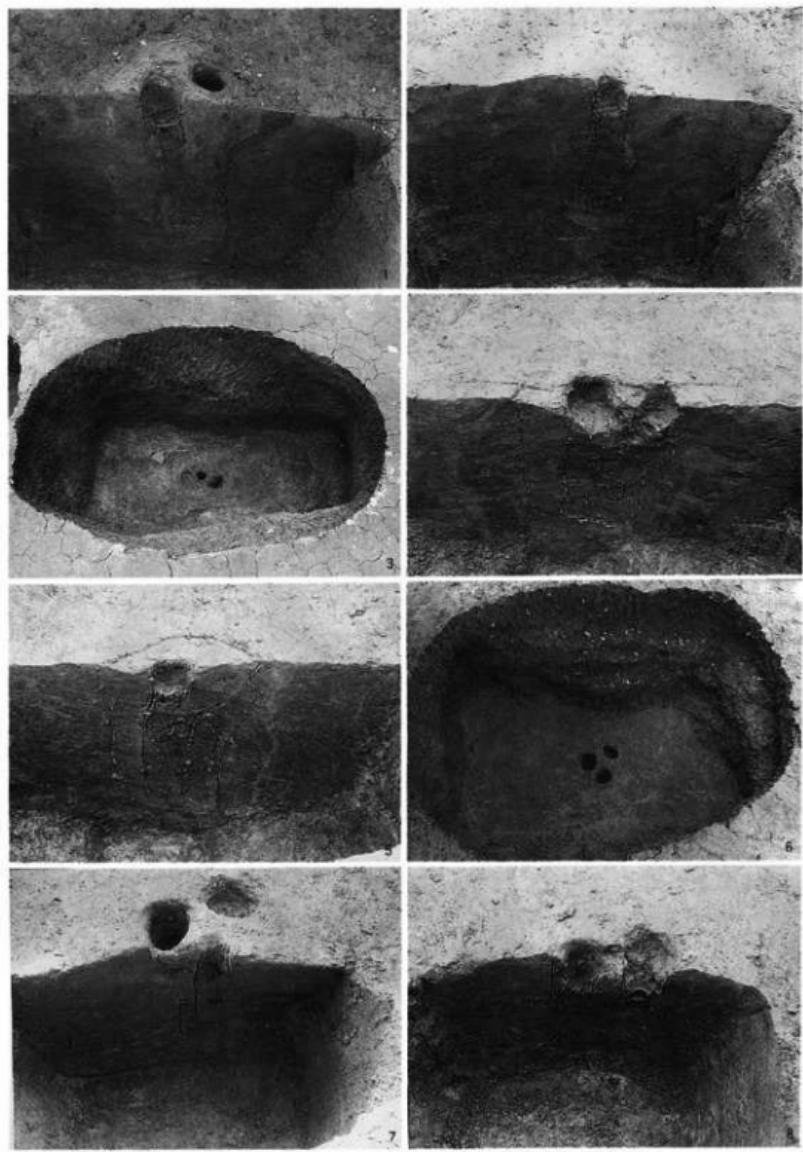


26 土坑 (1) 1. 12号土坑（北東より）
2. 12号土坑断面（北東より）
3. 13号土坑（北東より）
4. 13号土坑断面（北東より）



27 土坑 (2) 1. 14号土坑 (北東より)
3. 14号土坑底面破ち割り (北東より)
5. 15号土坑底面破ち割り (北東より)
7. 16号土坑断面 (北東より)

2. 14号上坑底面破ち割り (北東より)
4. 15号土坑 (北東より)
6. 16号土坑 (北東より)
8. 16号土坑底面破ち割り (北東より)



28 土坑（3） 1. 16号土坑底面截ち割り（北東より）

3. 17号土坑（北東より）

5. 17号土坑底面截ち割り（北東より）

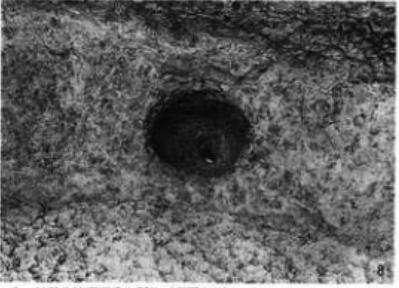
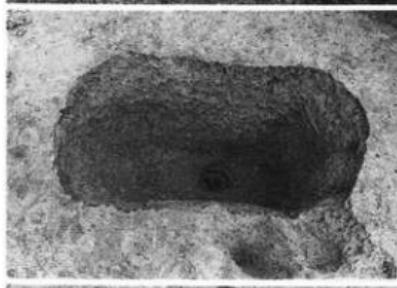
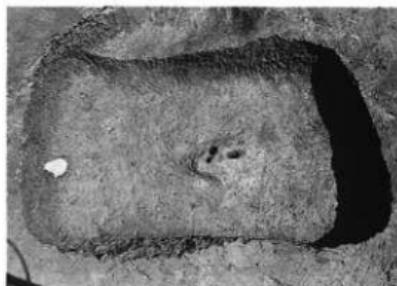
7. 18号土坑底面截ち割り（北東より）

2. 16号土坑底面截ち割り（北東より）

4. 17号土坑底面截ち割り（北東より）

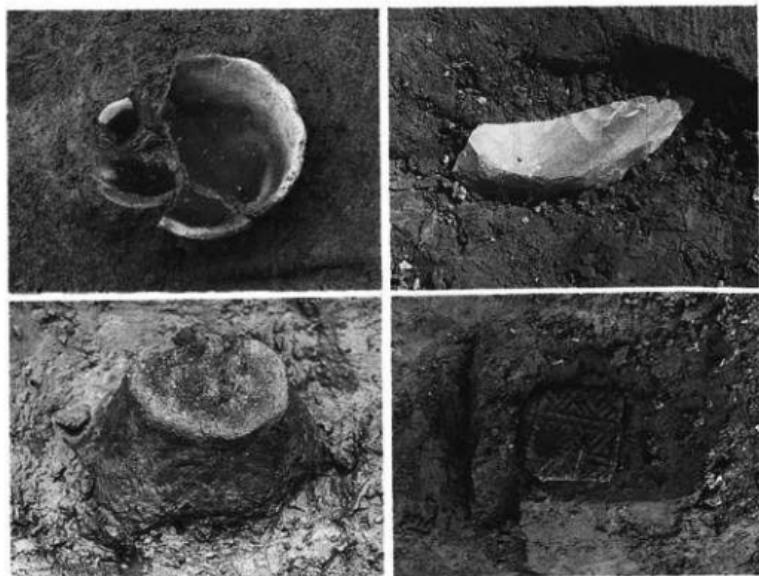
6. 18号土坑（北東より）

8. 18号土坑底面截ち割り（北東より）



29 土坑 (4) 1. 19号土坑 (南西より)
3. 19号土坑底面観ち割り (南西より)
5. 21号土坑 (北東より)
7. 22号土坑 (北東より)

2. 19号土坑底面観ち割り (南西より)
4. 20号土坑 (北西より)
6. 21号土坑底面 (北東より)
8. 22号土坑底面 (北東より)

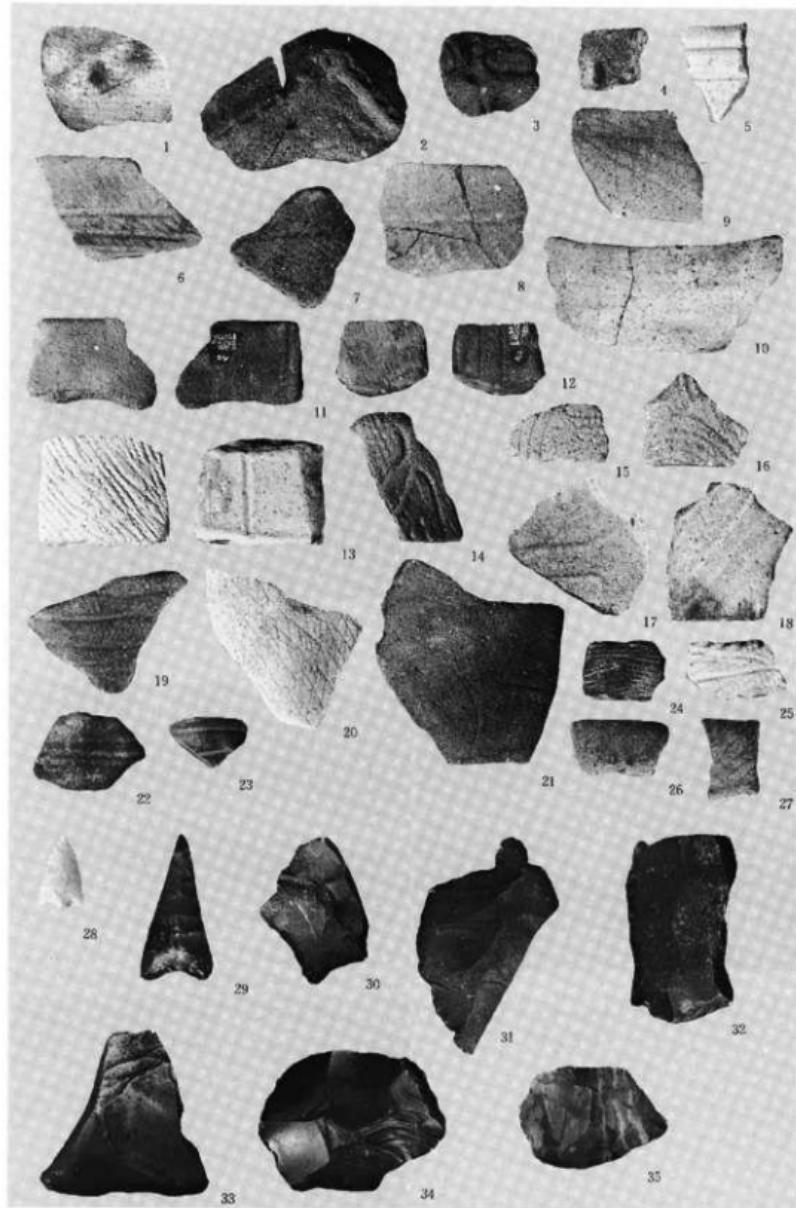


30 遺物出土状況 1. 盆形 2. 碗形
3. 杯形 4. 遠形

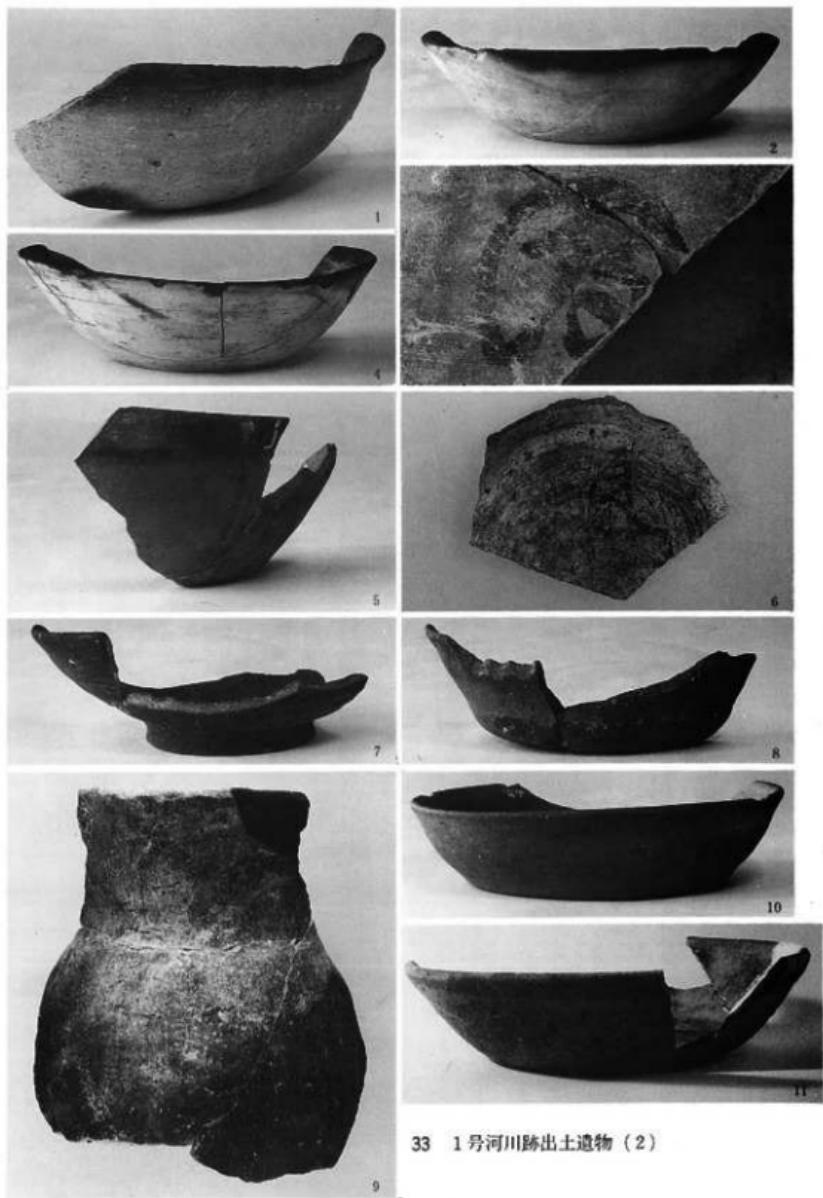


31 調査風景 1. 土坑の調査
2. 壁面取り下げる
3. 大野田小見学会

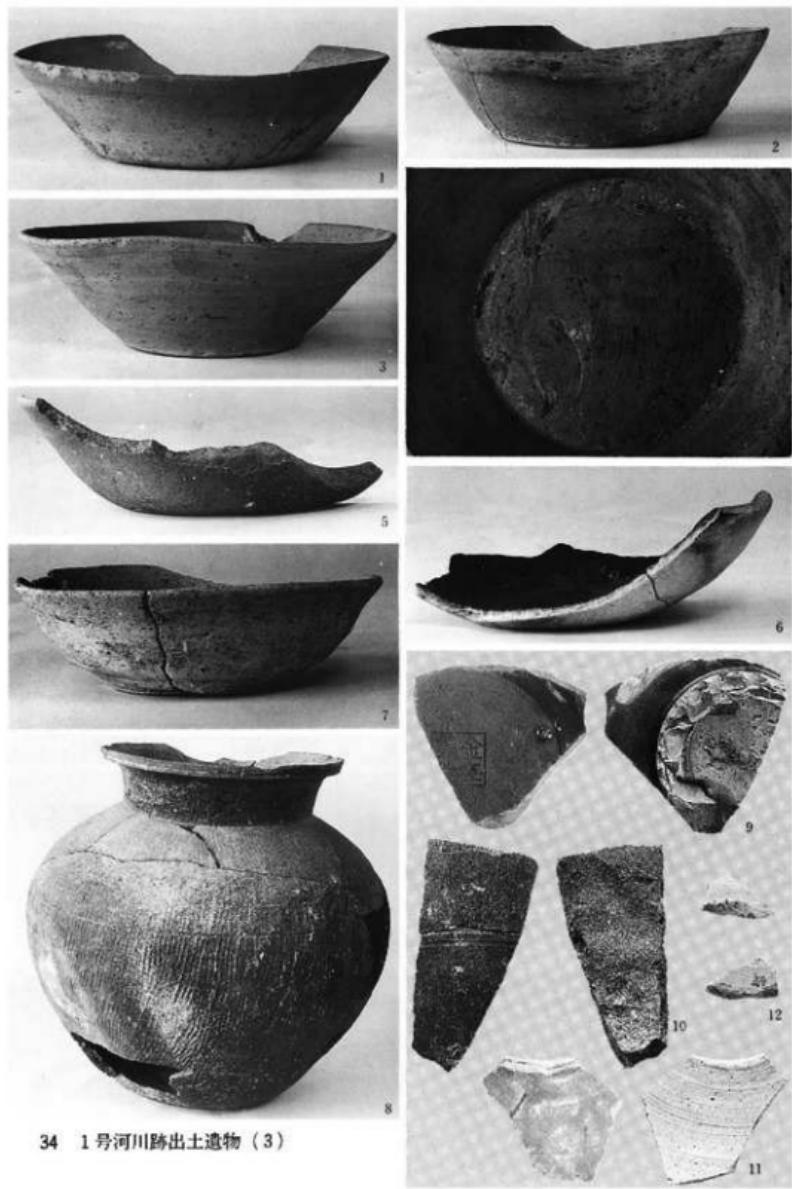




32 1号河川跡出土遺物(1)

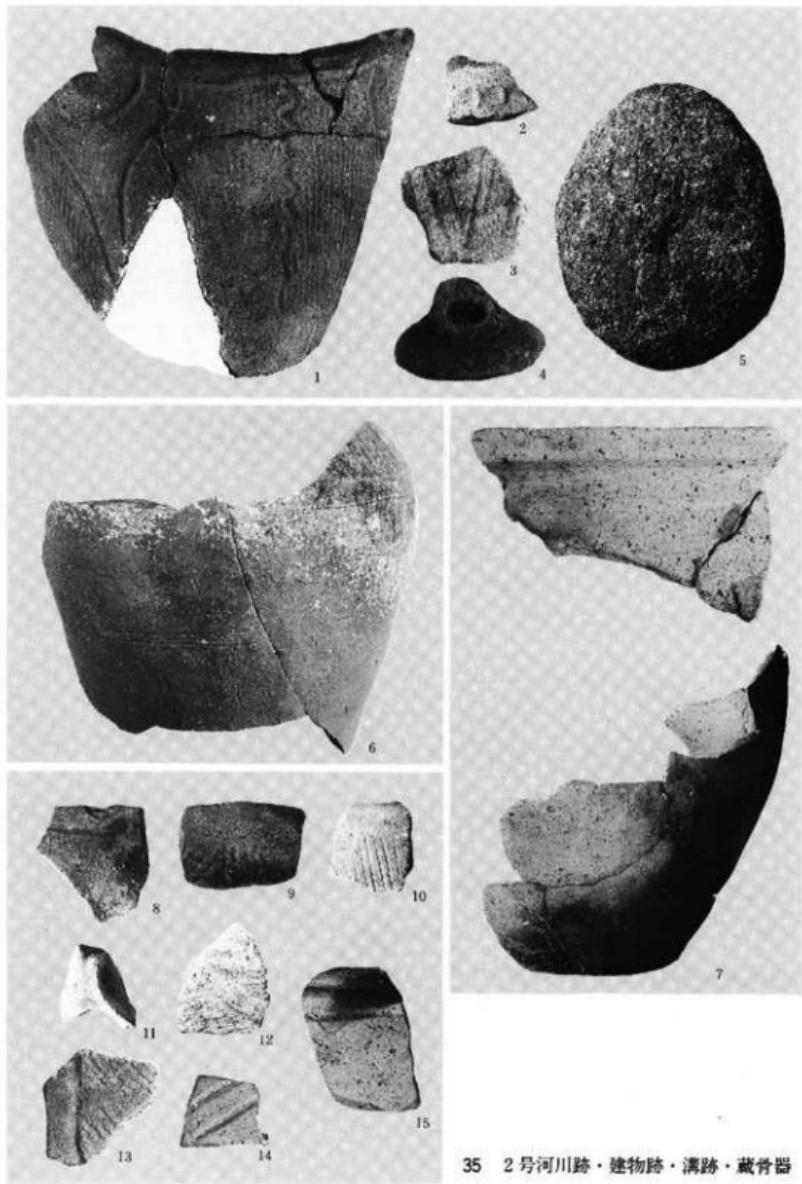


33 1号河川跡出土遺物（2）

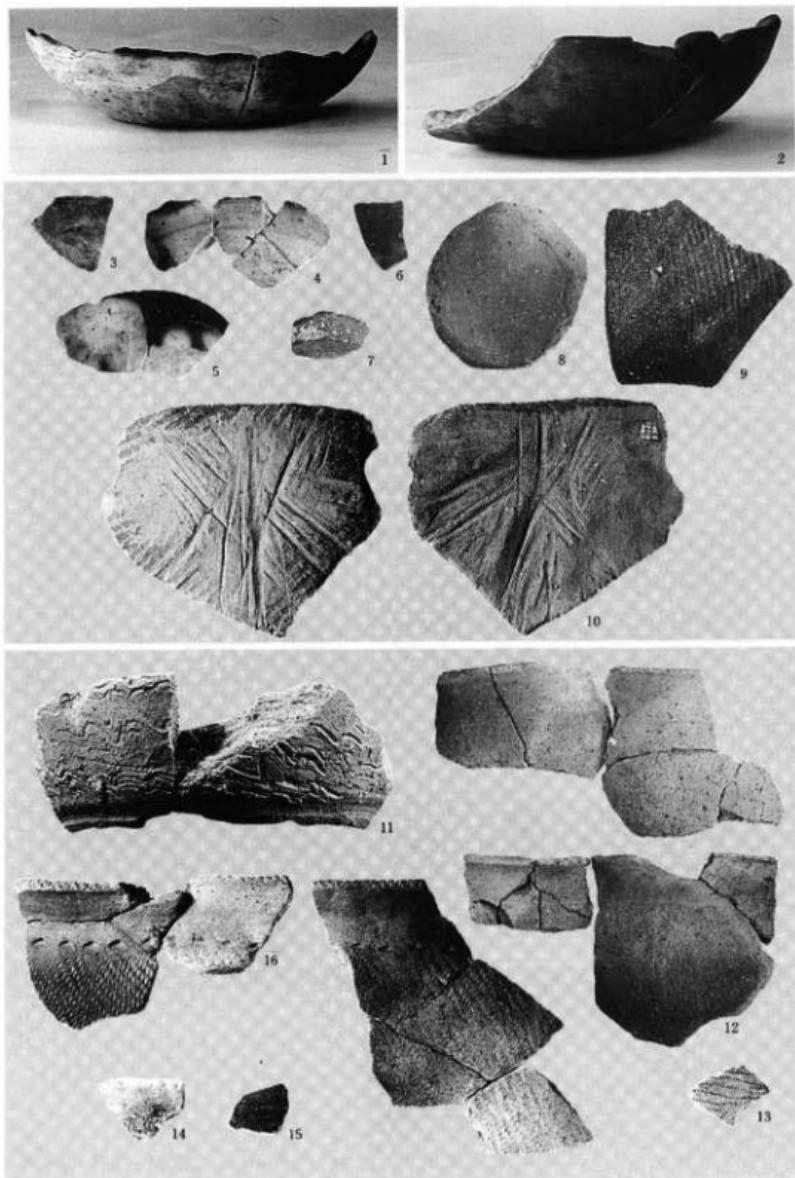


34 1号河川跡出土遺物（3）

11. 漆器 12. 志野



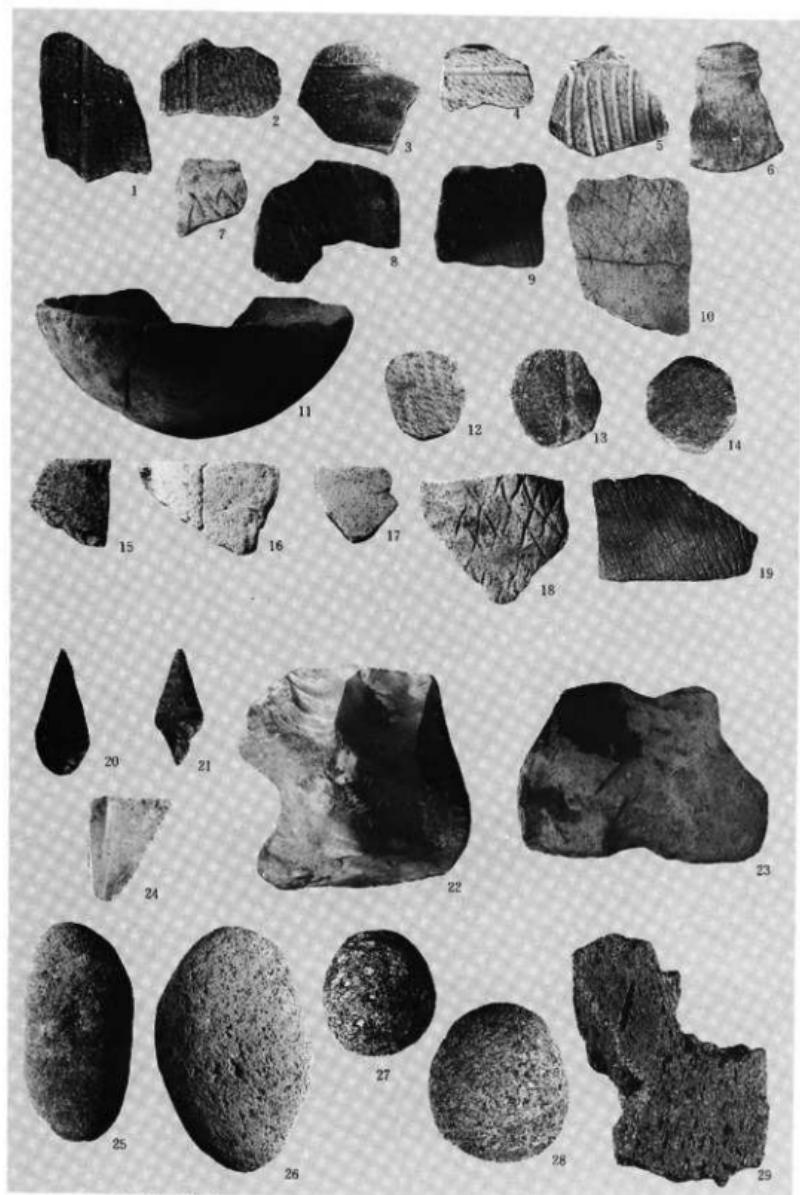
35 2号河川跡・建物跡・溝跡・藏骨器



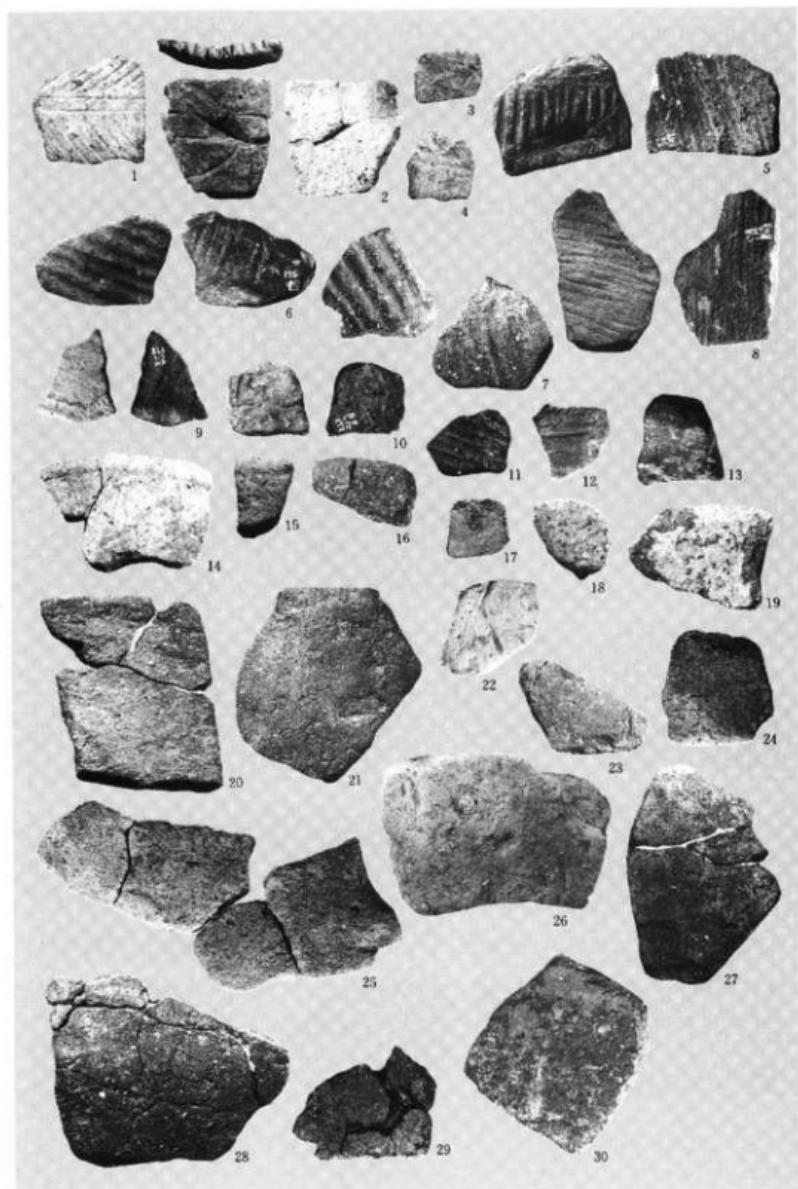
36 1号住居跡・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層出土遺物



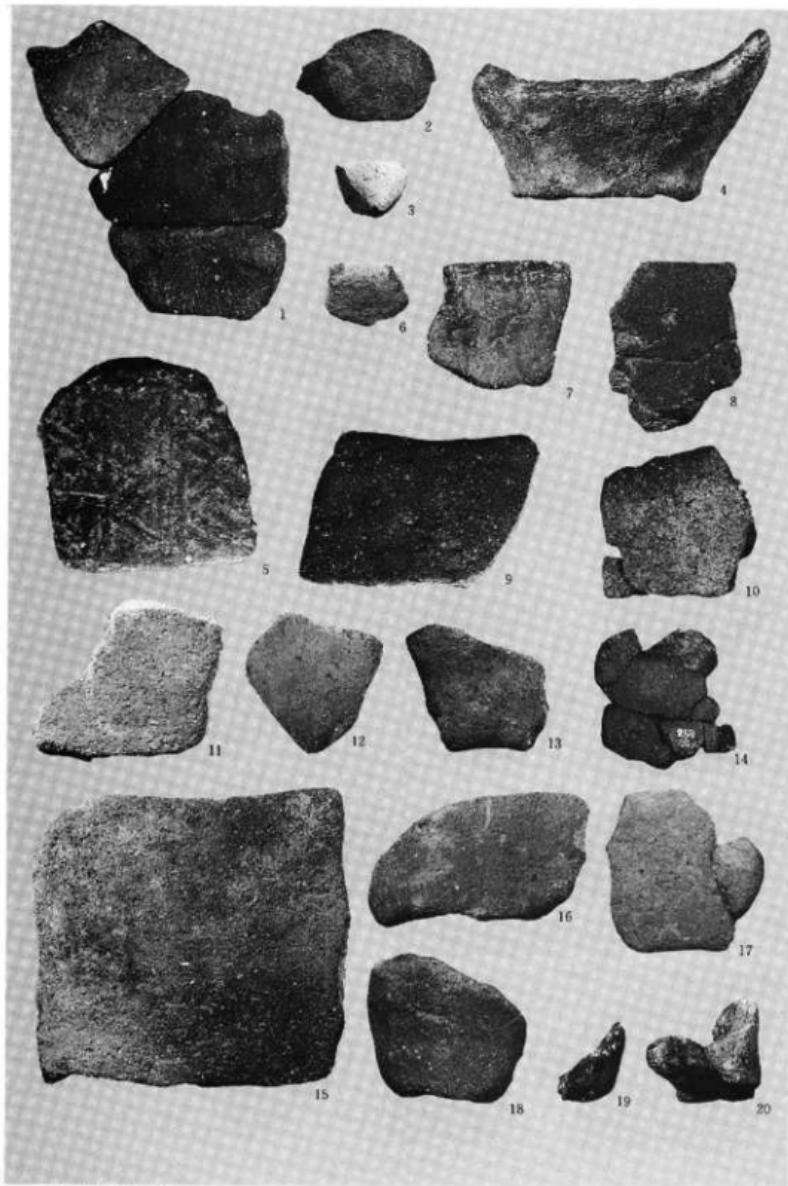
37 V・VI層出土遺物



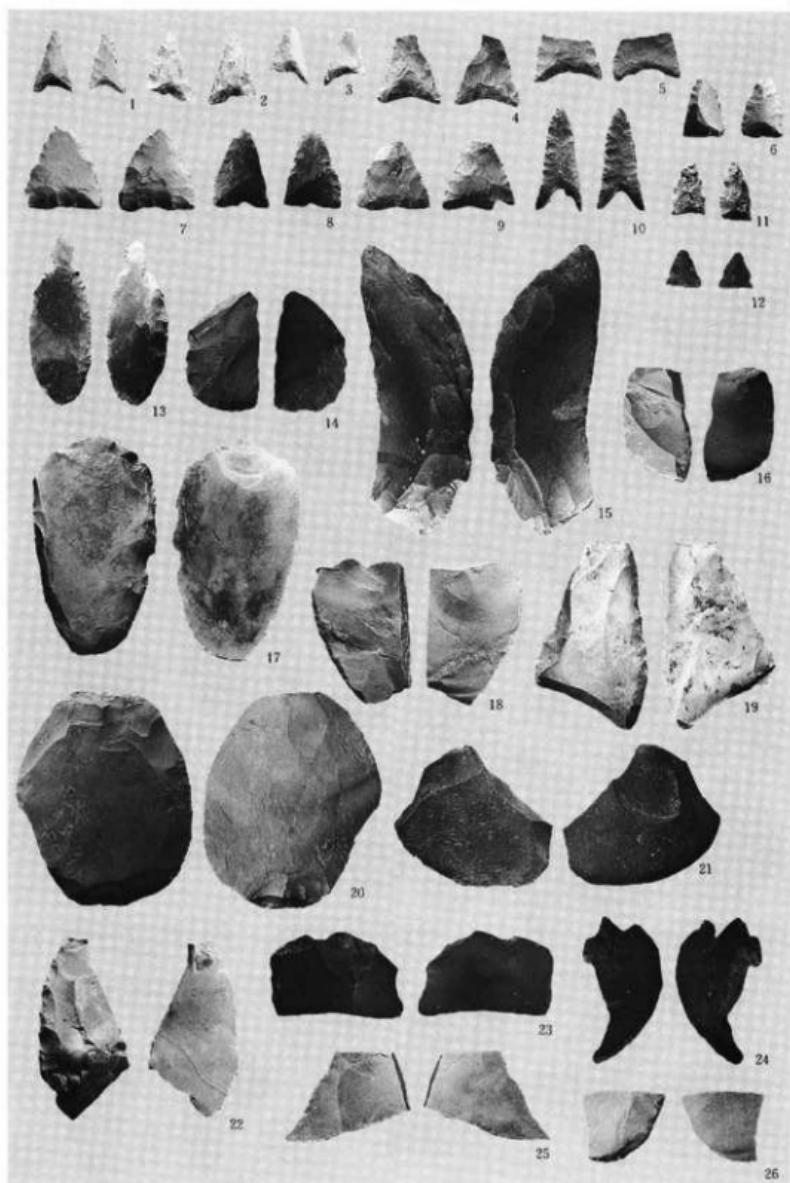
38 VI・VII層出土遺物



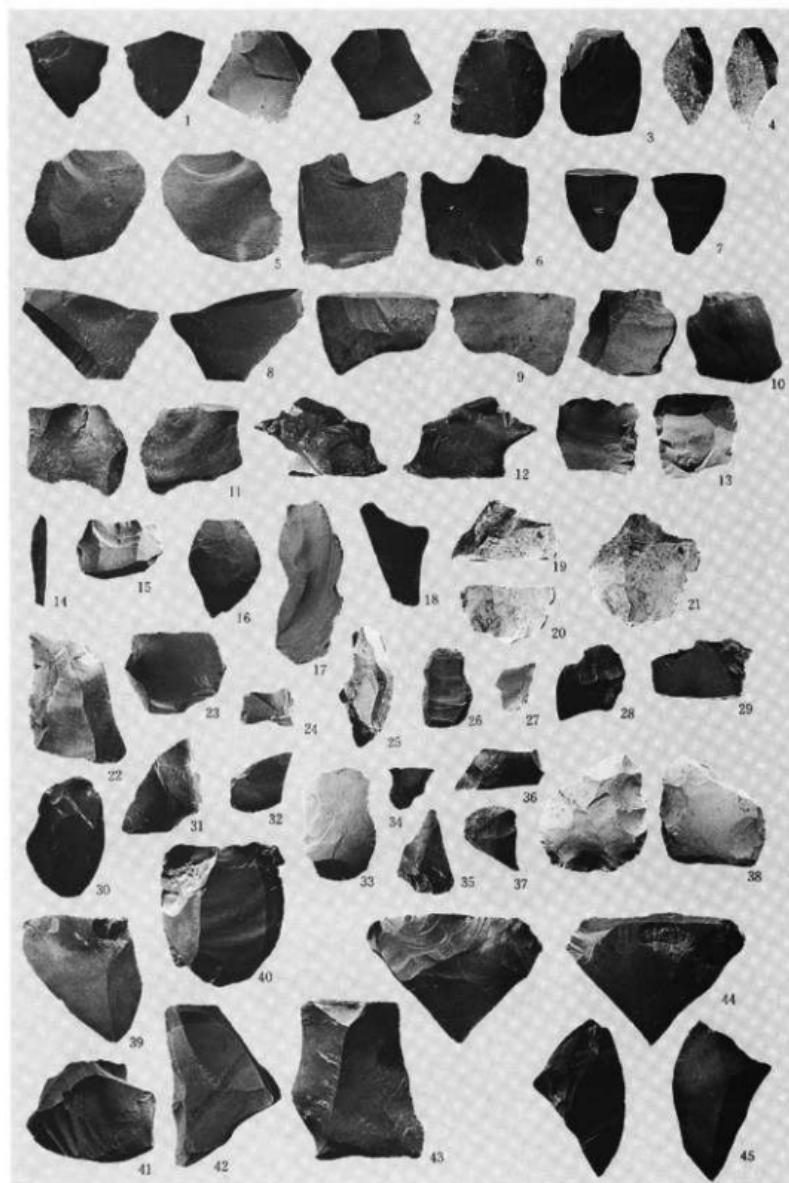
39 XI層出土土器



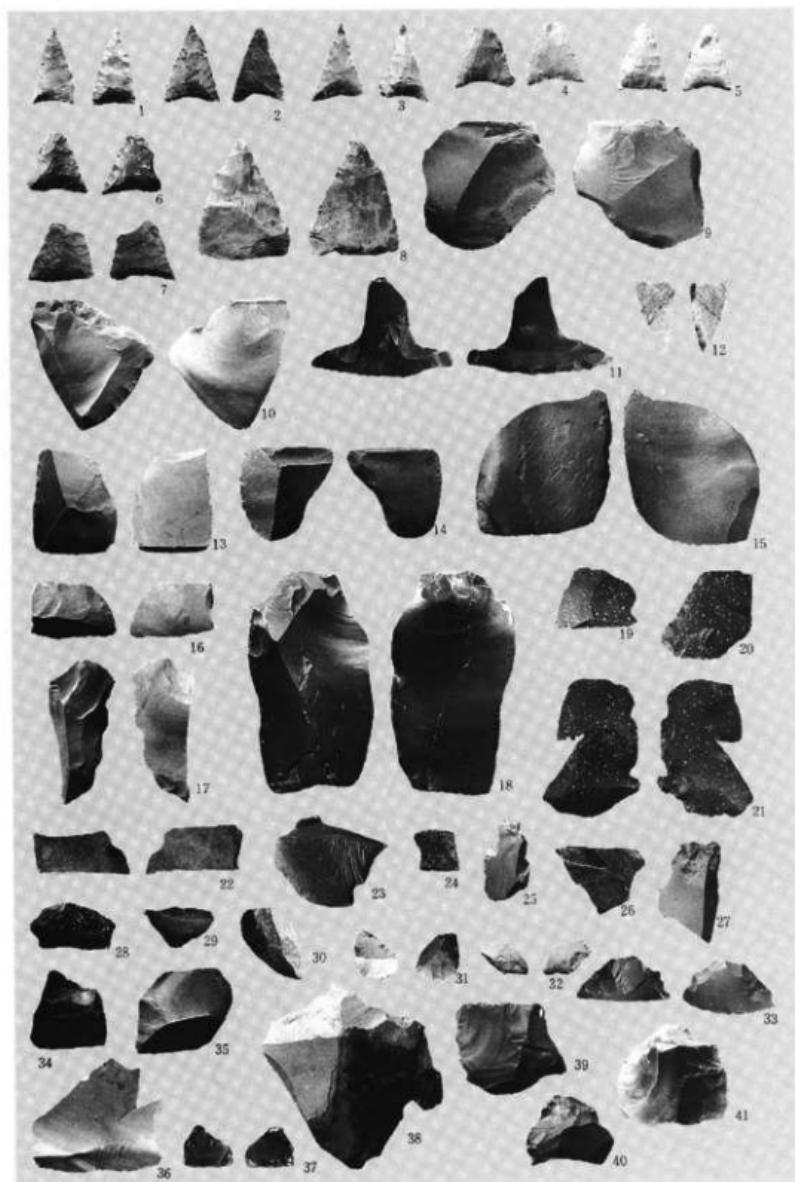
40 XII・XIII層出土土器



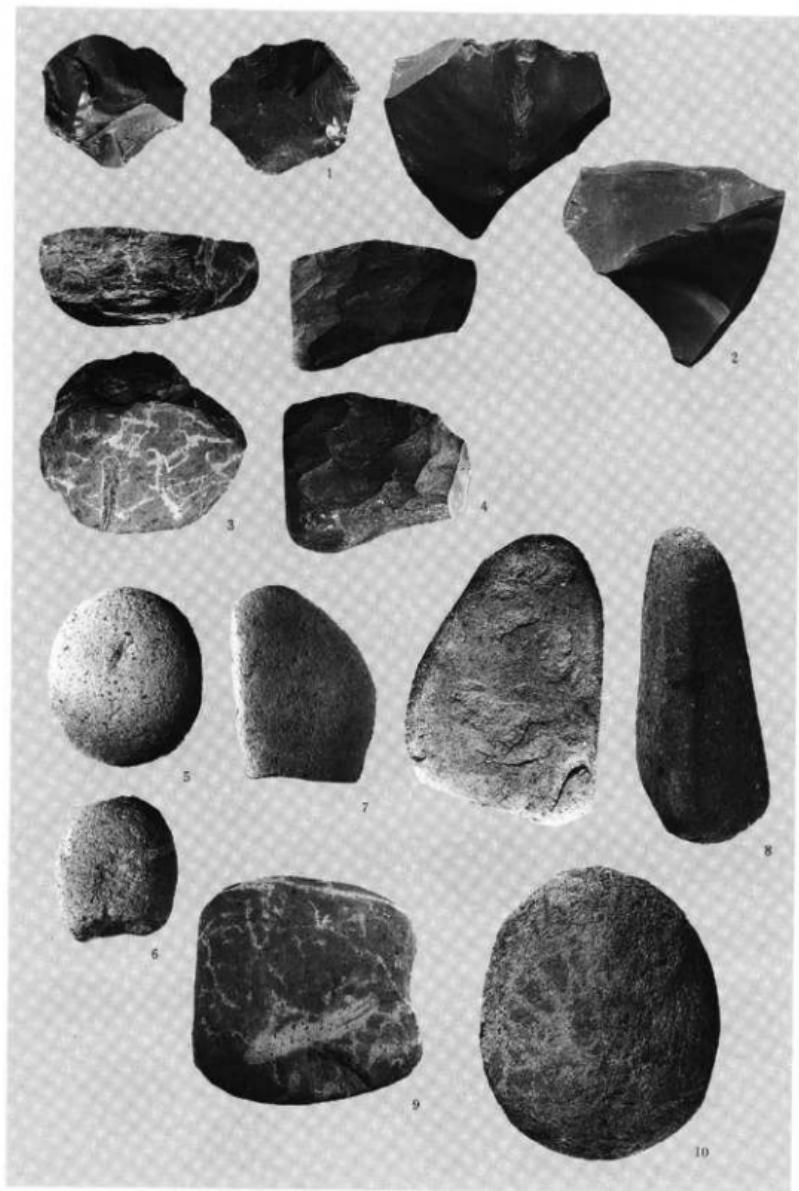
41 西双版纳出土剥片石器 (1)



42 Xishan出土刮片石器 (2)



43 遷层出土侧片石器



44 XII·層出土石核・礫石器

45 土偶頭部



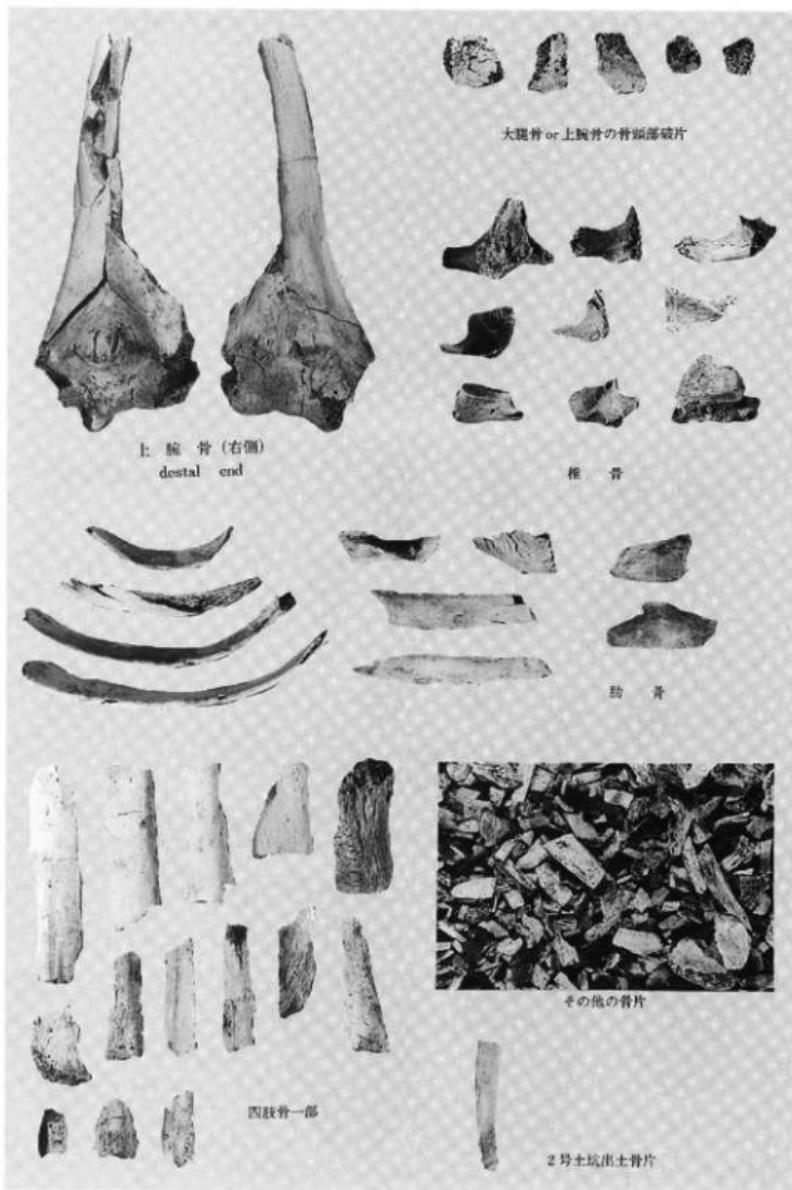
46 炭化穀粒
(P. 85星川報告参照)



写真1
出土した炭化穀類



写真2
左:米粒(側面、左下部が胚)
中:オオムギ(皮壳)の背面
(複数面)
右:オオムギ(皮壳)の腹面、
下端が胚



47 火葬骨・2号土坑出土骨片

仙台市文化財調査報告書第115集

下ノ内浦遺跡

1988年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市国分町3-7-1
仙台市教育委員会文化財課

印刷 (株) 東 北 プ リ ン ト
仙台市立町24-24 TEL 263-1166

